

長野県松本市

*MATSUMOTOJÔ Ô TEMONMASUGATA-ATO*

# 松本城大手門枡形跡

— 発掘調査報告書 —

*2015.3*

松本市教育委員会



# 目 次

例言

目次

## 第Ⅰ章 調査の経緯

- 第1節 調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 第2節 調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

- 第1節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 第2節 地形・地質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

## 第Ⅲ章 調査結果

- 第1節 地中レーダー探査による事前調査・・・・・・・・・・ 12
- 第2節 発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
- 第3節 遺構
  - 1 概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
  - 2 石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
  - 3 石列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
  - 4 総堀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 第4節 遺物
  - 1 陶器・土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
  - 2 瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
  - 3 石器・石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
  - 4 金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
  - 5 木製品・植物繊維製品・・・・・・・・・・・・・・ 54
  - 6 松本城大手門枳形跡出土骨の同定・・・・・・・・ 58

## 第Ⅳ章 調査のまとめ

- 第1節 調査成果の総括
  - 1 大手門枳形跡の遺構について・・・・・・・・・・ 63
  - 2 出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
- 第2節 大手門枳形の破却について・・・・・・・・・・・・・・ 65
- 第3節 災害等による修理と瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

写真図版

報告書抄録

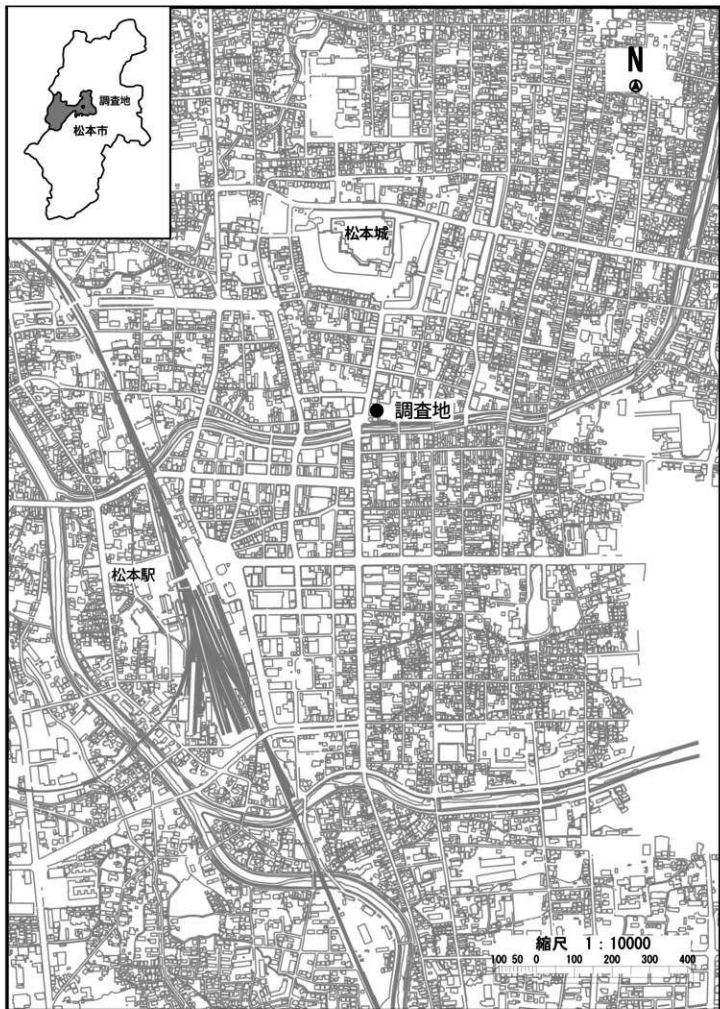
## 挿図目次

第1図	調査地の位置	第19図	瓦(4)・・・・・・・・・・	39
第2図	調査区の位置・・・・・・・・	第20図	瓦(5)・・・・・・・・・・	40
第3図	A・B地区70MHzアンテナ による成果平面図(部分)・・	第21図	瓦(6)・・・・・・・・・・	41
第4図	A・B地区70MHzアンテナ による成果平面図・・・・・・・・	第22図	瓦(7)・・・・・・・・・・	42
第5図	遺構全体図・・・・・・・・・・	第23図	瓦(8)・・・・・・・・・・	43
第6図	トレンチ1遺構図・・・・・・・・	第24図	瓦(9)・・・・・・・・・・	44
第7図	トレンチ1出土図・・・・・・・・	第25図	石器・石製品、 金属製品・・・・・・・・・・	53
第8図	トレンチ2・3・4遺構図・・	第26図	木製品(1)・・・・・・・・・・	56
第9図	トレンチ2・3出土図・・	第27図	木製品(2)・・・・・・・・・・	57
第10図	トレンチ3出土図・・・・・・・・	第28図	ニホンジカの骨格・・・・・・・・	59
第11図	トレンチ1・2土層断面図・・	第29図	絵図にみる調査位置(推定)・・	64
第12図	トレンチ1・2・4土層断面図・・			
第13図	南トレンチ遺構図・・・・・・・・			
第14図	南トレンチ割石出土図・・			
第15図	南トレンチ遺物出土図・・			
第16図	陶器・土器・瓦(1)・・・・・・・・			
第17図	瓦(2)・・・・・・・・・・			
第18図	瓦(3)・・・・・・・・・・			

## 表目次

第1表	土層一覧・・・・・・・・・・	第7表	石器・石製品一覧表・・・・・・・・	52
第2表	陶器・土器観察表・・・・・・・・	第8表	金属製品一覧表・・・・・・・・・・	52
第3表	軒丸瓦観察表・・・・・・・・・・	第9表	木製品・植物繊維製品観察表・・	55
第4表	丸瓦観察表・・・・・・・・・・	第10表	検出動物分類群の一覧・・・・・・・・	58
第5表	軒平瓦観察表・・・・・・・・・・	第11表	骨同定結果・・・・・・・・・・	61
第6表	平瓦観察表・・・・・・・・・・	第12表	災害と普請の記録・・・・・・・・	72





第1図 調査地の位置

# 第I章 調査の経緯

## 第1節 調査経過

松本城三の丸にある城郭への虎口（出入口）は、東門、北門、北不明門、西不明門、大手門の5ヶ所あり、このうち南側中央部にあり、最も規模が大きく正門にあたるものが大手門である。大手門枡形付近は、幕末・維新期を経て大手門及び門台等が取り壊され、市街地化の開発が進められる中で、昭和38年頃には大型商業ビルが建てられ現在に至っていた。こうした中、平成22年3月にこの商業ビル（旧・鶴林堂ビル）の土地・建物が松本市に寄付された。これを受け、松本市として近隣の商業ビル（旧・武富士ビル・旧・ノセビル）の土地建物も買収し、跡地を将来的な遺跡の保存を前提とした仮称・多目的歴史公園（松本城大手門枡形跡広場）として整備することとなった。この多目的広場の整備事業にあたり、大手門枡形跡の遺構残存状況や構造を明らかにするため、保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。調査に先立ち、平成22年12月13～14日には、地中レーザを用いた遺構確認調査を実施し、ビル以外の構造物が地下に残存している可能性が高いことが判明した。遺構の残存状況を確認するため平成24年7月30日から同年12月28日まで発掘調査を実施し、調査終了後は遺構を砂等で保護しながら埋め戻した。

平成22年度

- |           |  |
|-----------|--|
| 3月        | 旧鶴林堂ビルの土地・建物が松本市に寄付される。                                |
| 9月        | 9月議会にて市長提案説明及び総務委員会で言及                                 |
| 11月       | 史跡松本城整備研究会で説明及び「松本城およびその周辺整備計画」に位置づけを了承。               |
| 12月13～15日 | 大手門枡形の遺構の有無について、地中レーダー探査を実施。石垣等の構造物が残存している可能性があることが判明。 |

平成23年度

- |    |                       |
|----|-----------------------|
| 4月 | 旧武富士ビル・旧ノセビルの土地・建物を取得 |
|----|-----------------------|

9月

～平成24年6月 3棟の建物を解体

平成24年度

- |              |                             |
|--------------|-----------------------------|
| 7月13日        | 発掘調査の土地承諾書                  |
| 7月30日        | 発掘調査開始                      |
| 10月2日        | 県教育委員会文化財・生涯学習課<br>指導主事現地指導 |
| 10月26・29・30日 | 現地見学会実施                     |

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 11月21日 | 文化庁 佐藤正知調査官 発掘現場視察  |
| 1月23日  | 埋蔵物発見届及び埋蔵文化財保管証の提出 |
| 2月14日  | 文化財の認定              |
| 3月4日   | 終了報告書の提出            |
| 8月5日   | 出土文化財譲与申請           |
| 8月19日  | 出土文化財の譲与認定          |

平成25年度

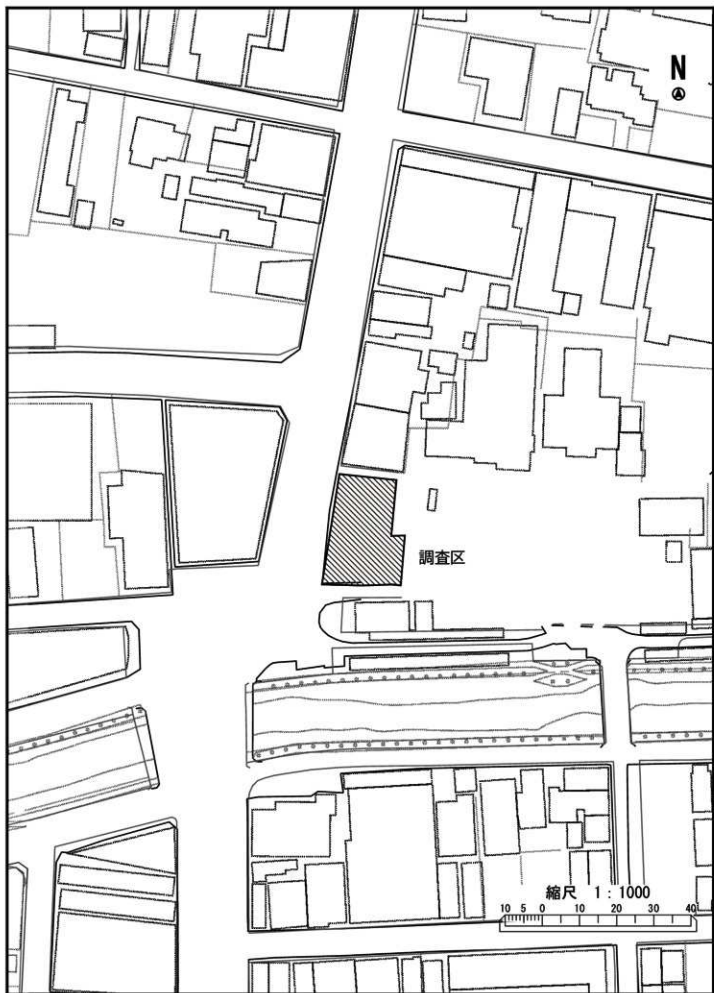
- |    |               |
|----|---------------|
| 4月 | 松本城大手門枡形跡広場整備 |
|----|---------------|



写真1 解体されるビル



写真2 開智小学校6年生の見学



第2図 調査区の位置 (S=1/1,000)

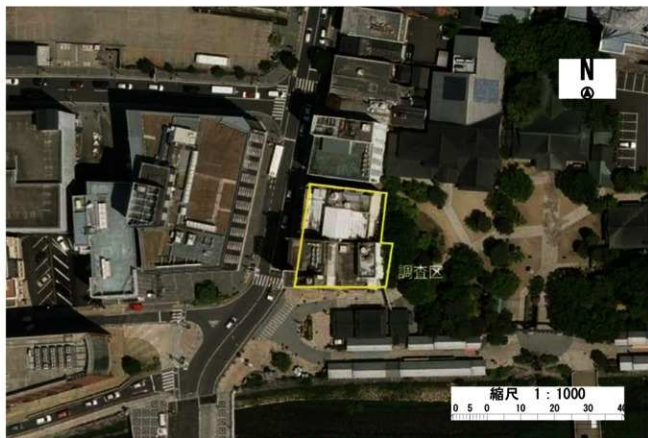


写真3 調査前 (ビル解体前・H16年) 空中写真

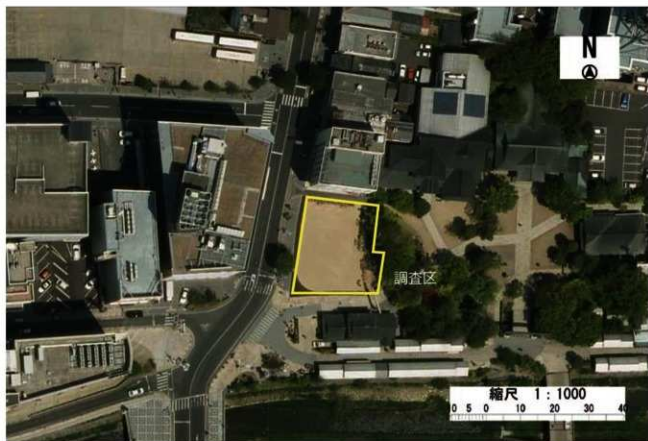


写真4 調査後 (公園整備・H25年) 空中写真

## 第2節 調査体制

調査団長：吉江 厚（松本市教育長）

### <平成24年度（発掘調査）>

調査担当者：福沢佳典、原田健司、山田梨恵

発掘協力者：井口方宏、大滝清次、折井次次、加藤朝夫、坂口ふみ代、清水陽子、関谷昌成、鳥井和幸、西牧まり子、林 秋好、宮沢昭敬、宮沢文雄、山崎素行、渡辺順子

整理協力者：内田和子、佐々木正子、白鳥文彦、中澤温子、前沢里江、三沢栄子、八板千佳、安田津由紀

### <平成25年度（整理作業）>

整理協力者：市川二三夫、内田和子、柏原佳子、佐々木正子、白鳥文彦、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、三沢栄子、八板千佳

### <平成26年度（報告書刊行）>

報告書作成：竹内靖長、原田健司、山田梨恵、鈴木仁美

調査員：宮島洋一

整理協力者：内田和子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、村山教枝、三沢栄子、八板千佳、安田津由紀

事務局：松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子（課長 ～平成26年3月）、内城秀典（同 平成26年4月～）、

大竹永明（課長補佐 埋蔵文化財担当係長 ～平成25年3月）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、

竹原 学（同）、三村竜一（主査 ～平成26年3月、埋蔵文化財担当係長 平成26年4月～）、

竹内靖長（埋蔵文化財担当係長 平成26年4月～）、久保田 剛（主査 ～平成25年3月）、

櫻井 了（主査 平成25年4月～）、柳澤希歩（嘱託 ～平成26年3月）、

吉見寿美恵（同 平成26年4月～）



写真5  
作業状況

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 歴史的環境

#### 1 松本城の略史

##### (1) 深志城時代

松本城は、その前身である深志城を基盤として築城されたと言われている。水野氏時代に編纂された『信府統記』によれば、永正元年（1504）小笠原氏の一族である島立右近貞永が、坂西氏の居館跡を整備して、本丸のみであったところを整備し、二ノ曲輪を設け、家臣の邸宅を建て、小笠原氏の拠点である井川の館の北の守りとして深志城を築いたとされ、昭和8年発行の『松本市史』においてもこの記述を採用し、坂西氏居館跡を基盤として深志城を整備したとしている。しかし、『二本家記』によれば、天文19年（1550）武田信玄が小笠原氏を府中から追ってこの地を手中にしたとき、「坂西が罷りあり候 深志の城を取立て・・・」とあり、深志城には坂西氏が在城していたとみられる。また、武田氏側の記録である『高白斎記』では、「子の刻大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所自落、島立・浅間降参・・・」とあり、島立氏は浅間の赤沢氏とともに武田氏に下っている。このような様々な記録があり、深志城期のことについては、実際のところほとんど判然としないが、小笠原氏の本城である林城の支城にすぎなかったことは確かなようである。天文20年（1550）に武田晴信が松本平に侵攻して以後、深志城は32年間にわたり武田氏の信濃侵攻の拠点となった。

一方、発掘調査においては平成13年に実施された松本城三の丸跡土居第2次調査において、16世紀前半までさかのぼる幅5.5mの薬研堀が、長さ23mにわたって発見された。また、松本城三の丸跡大名町第1次調査では、16世紀後半の松本城築城直前に埋め戻された幅5.4m以上、深さ2mの片薬研堀が発見されている。このような深志城期の堀は、文書記録や絵図などにも一切記録がみられないもので、深志城期の解明において重要な資料となっている。

##### (2) 小笠原氏の松本城の初期整備

天正10年（1582）武田氏の滅亡を機に、小笠原長時の三男貞慶が旧領である安曇・筑摩郡を回復し、深志城を松本城と改め、城郭の整備にとりかかった。『信府統記』によれば、

「大二普請ヲ企テ、天正十三年乙酉年ヨリ今ノ宿城地割シテ、同十五年丁亥年マテニ、市辻泥町辺ノ町屋残ラズ本町江引移シ、東町・中町ヲ割リ、麻葉町ヲ安原ト改メ、西口ヲ伊勢町ト名ツケ、通り筋ヲ定メ、家ヲ建続ケ（中略）枝町ヲも地割アリ、和泉町・横田町・飯田町・小池町・宮村町・馬口旁町等ノ名ハ定リケレトモ、家居ハ村々ノ如クニテ、町並軒端ハ未ツラナラザリシト云フ、三ノ曲輪繩張シテ、壘ヲホリ土手ヲ築キ、四方ニ五ヶ所ノ大城戸ヲ構ヘ、南門ヲ追手ト定メ、小路ヲ割リ、土屋鋪ヲ建テ泥町ノ跡ヲ柳町ト号ス、然レ共、家居ハ未立統カサリシト云フ・・・」

貞慶は、三の丸の市辻と呼ばれた地蔵清水から大柳町にかけての地域にあった町屋を、女鳥羽川の南側の地に移し、武家地と町人地をしっかりと分けつけた。また、三の丸には堀を掘り、土手を築いて5か所の大城戸を築き、大手門を南に構え、侍屋敷を整備した。この時、町人町の本町・中町と枝町の道筋を整え松本城下町の基本が形成された。

##### (3) 石川数正・康長の城郭整備期

天正18年（1590）、豊臣秀吉が小田原の戦いで後北条氏に勝利して天下を手中にすると、徳川家康を関東に移した。松本には、秀吉方の石川数正が8万石で入封した。数正は早速城普請に着手し、二の丸に簡山寺御殿を造営したが、文禄元年（1592）朝鮮出兵中に他界し、同年12月に京都で葬儀が行われた。その後、数正の子康長は秀吉の命を受けて、文禄2～3年（1593～94）にかけて、関東の家康を監視する城として松

本城天守を築いたとされる。

『信府統記』には、「父康昌（数正）ノ企テル城普請ヲ繼、天守ヲ建、惣堀ヲサラヘ、幅ヲ広クシ、岸ノ高クシテ石垣ヲ築キ、渡リ矢倉ヲ造ル、黒門・太鼓門ノ門樓ヲ立、堀ヲカケ直シ、三ノ曲輪ノ大城戸五ヶ所共ニ門樓ヲ造ル、其外矢庫々々、惣堀大方建ツ、城内ノ屋形修造アリ、郭内ノ土屋鋪ヲ建テ続ケ、郭外ニモ土屋鋪ヲ割ル、亦枝町ノ家ヲツケ、並ヲ能シ、宮村町ノ辺ニ歩行士ノ屋鋪ヲ造ル・・・」とある。

数正の意志を継いだ康長は、天守を建て、総堀を深くし、土塁を築き、本丸を石垣で防備した。また、三の丸の入口5か所には門樓を造り、土塀・隅櫓・太鼓門・黒門を造り、城内の館の修造、郭内外の侍屋鋪の建造を行い、近世城郭としての松本城が成立した。

#### (4) 小笠原秀政時代

石川氏が改易されると、慶長18年（1613）に小笠原秀政が飯田から再び入封した。このころは、城下町の町割りができていても、まだ空き地や空き家が多かったが、飯田から従った人々や、城下町の再整備により集住が進んだようである。『信府統記』には「当時ハ軒端立チツラナリ、繁盛昔ニ越ケルトナリ」と記されており、城下町の充実がみられた。伊勢町一帯の発掘調査においても、城下町最下層の築城当時と考えられる検出面では、まだ短冊形地割が成立しておらず、人為的な整地面があっても遺構がほとんど確認できない箇所が多くみられた。17世紀初頭段階で短冊形地割が見られ始め、遺構も密に確認できるようになるため、『信府統記』の記述と発掘調査での所見に同じ様相がみられる。

#### (5) 戸田氏・松平氏統治時代

元和3年（1617）、戸田康長が入封し、安原町西側に徒士町・足軽町を建設している。

その後、寛永10年（1633）に、家康の孫にあたる松平直政が入封した。この時「寛永十西年大工・木挽・鍛冶 豊師役銀之事」によれば、「御本城御殿・天守・四方御門・矢倉・惣御廻御修復・御本城当方へ長多門立、二之丸へ御殿立、同御城米蔵立、大手御門外西へ大御馬屋立、惣木戸数十ヶ所新立・・・」とあり、天守閣の修復が行われ、辰巳附櫓と月見櫓が新たに付設された。さらに二の丸には、幕府の非常用米蔵を保管するために、八千俵蔵を建て、六九には籠が設置された。

#### (6) 堀田氏・水野氏時代

寛永15年（1638）堀田正盛が入封したが短期間であったため、上土の蔵を建設した程度であった。

寛永19年（1642）水野忠清が入封し、松本城北の堀や石垣の破損を修復し、辰巳隅櫓の建て替えを行った。城下町は、水野氏時代にほとんど完成したと考えられる。

#### (7) 戸田氏時代

享保12年（1727）閏正月元旦、905坪の広さがあった本丸御殿が焼失した。戸田氏はこれを再建することができず、政庁は二の丸御殿に移された。しかし、二の丸御殿は狭かったので、郡所や町所などは六九に移された。元文4年（1739）、二の丸御殿は手狭であったらしく、新御殿が古山地御殿西側に増築された。明治維新後、二の丸御殿は筑摩県の県庁となっていたが、明治9年（1874）に焼失した。

## 2 大手門枳形について

### (1) 大手門枳形の概略

松本城は本丸・二の丸・三の丸の城郭部分と、その外側の城下町で構成され、城郭の各郭を内堀・外堀・総堀が囲む。三の丸にある城郭への虎口（出入口）は、東門、北門、北不明門、西不明門、大手門の5ヶ所あり、このうち南側中央部にあり、最も規模が大きく正門にあたるものが大手門である。大手門以外の門は、馬出しの形態であるが、大手門だけは枳形の形態をしている。

大手門枳形は、門・番所・堀の建物と、石垣、枳形の空地、堀（総堀）で構成される。城下町から千歳



橋を渡ると、東側には縄手、西側には六九の通りがあった。六九には、江戸後期に松本藩の地方行政機関が集中してあった。「嘉永七年家中名前付図」(1854)をみると、幕末段階では六九の通り北側には、東から郡所(町所を併合)、表勤定所、預所の順で並び、通りの南側には蔵、射場、蔵役所、木場役所、炭所が置かれていた。蔵のあった場所は、安永5年(1776)の火災以前には、東西157間余(約283m)の規模の54正立の外廻(六九廻)があり、町の名称の由来となった。

大手門枡形の東側には総堀があり、絵図などから南北約55mの幅があったと推定される。枡形西側には、二の門に入るための空地があり、外番所があった。

二の門は西向きに開く門である。様式などの詳細は不明であるが、後藤新門が明治30年(1897)に明治初年の状況を想いおこして描いた原図をもとに着色されたとされる『松本城見取り図』には、薬医門の形式が見て取れる。二の門を入ると枡形の空地になっていた。この枡形は約220坪あり、松本城にある3カ所の枡形(黒門枡形・太鼓門枡形・大手門枡形)の中で最大規模であった。枡形の周囲には石垣が積まれ、その上には屋根付きの土塀が巡り、枡形南東隅には、内番所が置かれていた。

枡形の北奥には左右に門台の石垣が積まれ、一の門が設けられていた。門台石垣には、総堀北側にある土塁と、その上にあった土塀が接続していた。門台石垣の上には、櫓門(太鼓門や黒門と同様)形式の一の門が設けられていて、規模は桁行10間5尺、梁間は5間あった(太鼓門は桁行10間、梁間3間半である)。絵図資料などをみると、一の門・二の門・土塀の屋根には瓦が葺かれていたことが見て取れる。一の門を通り北へ進むと、三の丸内の武家屋敷が位置する大名町通りへと通じていた。



写真6 松本城見取り図に描かれた大手門枡形 (松本市立博物館所蔵)

## (2) 史料に記された大手門

水野氏時代に編纂された『信府統記』の中から、大手門枡形についての記述を抜き出してみる。

小笠原貞慶時代の城郭の整備では、「・・・三ノ曲輪繩張りシテ、壘ヲホリ土ヲ築キ四方ニ五ヶ所ノ大城戸ヲ構へ、南門ヲ追手ト定メ、・・・」とあり、南門を大手と定めた。

石川氏時代には、「・・・父康昌の企てたる城普請を継ぎ、天守を建て、惣堀を浚え、幅を広くし、岸を高くして石垣を築き、渡り矢倉を造る・・・三の曲輪の大城戸五カ所共に門樓を造る・・・」とあり、この時に大手門台石垣や門が作られたものと考えられる。

松平直政時代の寛永10～15年(1633～1638)には、「此時天守並に門々修復あり・・・」とあり、いく



つかの門が対象となった中で、大手門も修理されたかもしれない。

### (3) 明治期に破却された大手門

明治維新後の明治4年(1871)頃には、大手門の取り壊しが行われた。取り壊された後の様子は、『明治6年 筑摩県博覧会の錦絵』(1873・写真20)の中に、大手門跡として門が無く門台石垣のみが描かれている図に見て取れる。明治9年頃には、門台の石垣も取り壊され、その石が使われて大手橋が石橋となり、千歳橋と改名された。明治11年、四柱神社建設が許可となり、大手門枳形東側にあった総堀が払い下げられ、埋め立てられている。明治13年(1880)には四柱神社御幸橋に、大手門台の石垣が利用された。また、明治11年(1878)には、本町南端の緑橋の架け替えに際し、大手門台石垣が利用された。明治13年に描かれた『明治十三年六月御巡幸松本御通図』(写真21)の明治天皇行幸の錦絵では、門台石垣は無くなり、東に四柱神社、西に警察署・電信局・本願寺が建設されている。総堀もほとんど埋め戻され、わずかに四柱神社南側に残るだけとなっている。



写真7 享保十三年秋改松本城下絵図(松本城管理事務所所蔵)

大手門枳形の周囲には石垣が積まれており、「南大手」と記載されている。大手門枳形の二の門は、薬医門のようである。

赤い印は番所で、枳形内に1か所、二の門西側に1か所見られる。

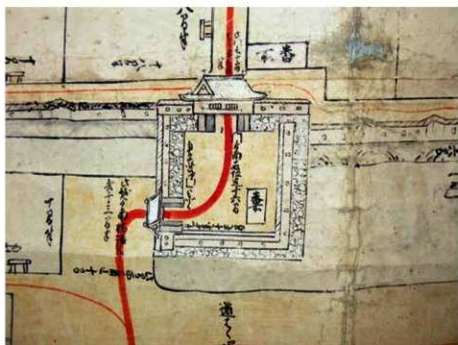


写真8 水野氏時代松本城下図

大手門が入母屋造りに描かれている。門より南石垣まで16間との記載があり、桁形内の南北が16間(29.12m)ほどであったことが推定できる。

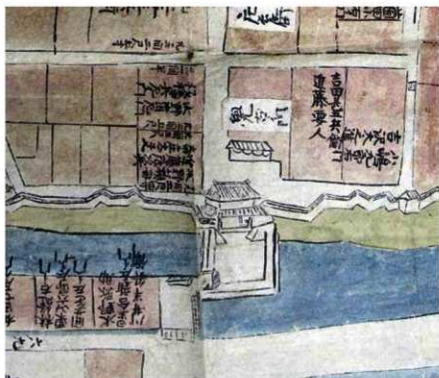


写真9 享保年間松本城下町古図

大手門桁形内には番所が無く、二の門西側と大手門北側に番所のような表現がみられる。

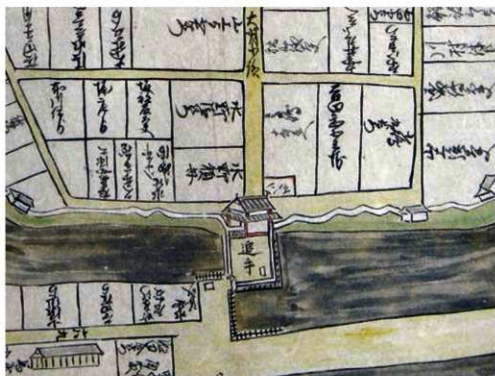


写真10 文化十二年信州松本図

外番所・内番所が描かれ、大手門構形は「追手」と表記されている。



写真11 文化文政松本藩屋敷割図

※写真8～11は松本市立博物館所蔵

## 第2節 地形・地質

調査地は、松本盆地中央東寄りの松本城の南側約400mに位置している。標高は587～588mで南南西方向に緩く傾斜している。松本盆地は、南北に長い構造性の盆地で、西部と南部は飛騨山地で中・古生層とそれを貫く花崗岩や、その他の火成岩からなっている。これらの岩石は、主に梓川系により浸食され、大量の土砂が盆地の南半部を埋めている。さらに南から北流する奈良井川・鎮川などの河川による堆積物も加わり、広大な複合扇状地を形成している。いったん盆地が形成された後、洪積世後期後半頃から松本市街地周辺に局部的な地質変動に、松本盆地の東端の一部が沈降して湖沼化し、西側は逆に傾斜しながら隆起し、城山山系を形成した。このため、古深志湖と呼ばれる湖沼化の進行に伴い、低地には四方から河川が流入し、それらの河川が形成した扇状地の扇端付近は、必然的に地下水水位が高く、湧水が豊富にみられる。それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は、南西から南東へ流れを変え、洪積世末の第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層をのせて山地化し、隆起の進行とともに、右岸に三段の段丘面を形成しつつ市街地東部を流れるようになった。

こうしたことから調査地周辺の地下には、中・古生代の松本盆地形成期と洪積世後期の局部的構造盆地形成期の堆積物が、市街地のボーリング調査の結果からわかっている。地下40～50mより深いところには梓川水系を主とする中・古生代からの砂礫層が堆積しており、上部には局部的な盆地形成に伴う筑摩山系の土砂が女鳥羽川・薄川により堆積している。女鳥羽川系の堆積物にみられる岩石は、玢岩、砂岩、石英閃緑岩、第三紀層から出た粘板岩、チャートの小礫である。薄川系は、緑色火山岩類、安山岩、石英閃緑岩、砂岩、玢岩などがみられる。両者の堆積物の違いは、女鳥羽川系堆積物は玢岩が多く、安山岩は角閃安山岩とガラス質安山岩が含まれることと、薄川系堆積物には白っぽい石英閃緑岩がみられる点である。

松本城付近の堆積は、古深志湖の北から北東部分の堆積物であり、北からの女鳥羽川扇状地と東からの薄川扇状地の複合扇状地の堆積物である。女鳥羽川と薄川が形成した扇状地は東は湯川付近で接し、流路の首振りとともに、両者の堆積物が互層状か混成して堆積し、複合扇状地を形成していった。

現在の女鳥羽川は、中央3丁目付近で不自然に90°向きを変えているが、これは中世末頃に人為的に曲げられたものと考えられている。この無理な改修のため、市街地付近は度々洪水の被害を受けている。

大手門枳形跡の地形層より下層の現地表下230～300cm以下が地山で、漆黒色粘土層・灰白色シルト層・砂礫層などが互層的に堆積しているのが観察された。そこには、古深志湖の沼沢地に扇端を形成しながら堆積する流路が首振りをしながら、近ければ砂礫、遠ければ漆黒色粘土の堆積を繰り返してきたものと考えられる。築城前の地山には、アシなどの植物質が混ざっており、起伏のある微高地に、アシなどが生えていた場所であったとみられる。



写真12  
調査地トレンチ1の地山土層

## 第三章 調査結果

### 第1節 地中レーダー探査による事前調査

#### 1 目的

発掘調査を実施する前に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室）により、地中レーダーおよび電気探査を実施し、松本城大手門枳形跡の遺構の残存状況や位置・深さ・分布などの把握を行った。調査は、平成22年12月13日～12月15日に実施した。

#### 2 探査の方法

今回の調査は、地中レーダー探査（GPR探査）と電気探査を実施した。遺跡の探査には、複数の方法があるが、今回の調査地は現地に市街地の建物が建っていることや、石垣・堀という大形の遺構の把握が中心ということから、この方法が選択された。

機器は、地中レーダーがSIR-3000（アメリカGSSI社）、アンテナは中心周波数70および200MHzのものを使用された。電気探査はRM-15（イギリス Geoscan社）と、桜小路電気製リレー式電極切り替え機を用いた。調査地は、建物内が花崗岩およびリノリウム、外部はアスファルトとコンクリートの部分があり、通常使用しているステンレス製の電極の打設が困難であるため、応用地質（株）製のジオゲル電極を使用し取得した。取得したデータの解析は、GPR-Sliceおよび桜小路電機製ソフトウェアを用いた。

#### 3 調査区の設定

調査は、A～C区の3か所を設定して実施した。

A地区は、旧富士ビル建物内部である。建物内部で探査が実施されることは極めて少ないが、今回は探査対象物が大形であるため実施することとし11×11mを実施範囲とした。しかし建物内部は、ノイズ源や建物構造物が存在することは確実であり、条件としては極めて悪い。

B地区は、旧富士ビルの北側道路および駐車場部分である。この部分は、アスファルト及びコンクリート舗装があり、また水道管や電線などノイズ源が多いため、条件は極めて悪い。

C地区はビル西側の四柱神社園路部分である。この部分は、A・B区の比較対照と堀の探査として実施した。地下レーダー探査の測線距離は1654m、測線間隔は200MHzアンテナ0.5m、70MHzアンテナ1mである。



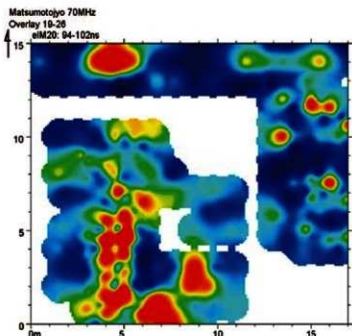
写真13

A地区（旧富士ビル建物内部）  
地下レーダー探査実施の様子  
（H22年12月14日撮影）

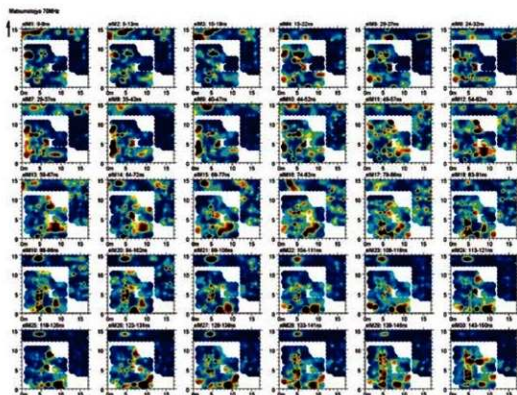
#### 4 探査結果

電気探査はA地区で試みたが抵抗値を記録することが十分ではなく、継続を断念した。

地下レーダー探査では、200MHzの結果で、やや深い部分79ns（想定値約2.4m以下）のX（横軸）= 5m付近に存在する南北方向の線状の反射が石垣などビル以外の構造物である可能性が指摘された。70MHzの結果においても同様の反射が確認されており、浅い部分にこれに関連する反射をみる事ができないため、やはり下部に何らかの構造物がある可能性が指摘された。



第3図  
A・B地区 70MHz アンテナによる成果平面図（部分）



第4図 A・B地区70MHz アンテナによる成果平面図

## 第2節 発掘調査の方法

### 1 調査の目的と方法

#### (1) 調査区の設定とトレンチの配置

本調査は松本城大手門枳形跡の保存を前提とした発掘調査である。従って、調査に際しては大手門枳形の残存状況や構造を確認することを目的として、トレンチにより最小限の範囲で調査を実施することにした。

トレンチは、地下レーダー探査の結果や、絵図（『享保十三年秋改松本城下絵図』）と現在の都市計画図との重ね合わせから、大手門枳形石垣の位置を推定し、それに直交するように東西方向に、2本設定した。トレンチ1・2はそれぞれ調査区の北端と中央に設定し、石垣と総堀の検出を予想した。さらに石垣の残存状況を把握するために、トレンチ1・2の間に南北に伸びるトレンチ3を追加した。また、トレンチ1の西端に石列を検出したため、その石列の続きを確認するために、トレンチ4を設定した。南区では、西半が旧商業建物により、遺構が破壊されていることが予想されたため、東半を面的に掘り下げ、トレンチ5とともに攪乱と石垣の残存状況を確認した。

#### (2) 調査の手順

調査はまず、重機を用いて、客土（厚さ120～150cm）を除去し、明治21年の大火で形成されたと考えられる焼土層を検出し、ここを調査開始面としてトレンチを設定し、以後人力作業によって層位的な掘り下げを行った。トレンチ1の東側では、総堀の底を確認するために掘り下げた。その際、深くなるため大走りを設け、また、壁面崩落を防ぐ土止めを施した。その結果、堀底の基盤は水生植物を多く含む湿地性の自然堆積層であることがわかった。

調査で出土した遺物については、近世・近代の時期差にかかわらず、極力出土地点を記録して取り上げた。また、調査区北東に測量用基準点を設定した後、調査区全域を覆う3mメッシュを設けた。遺構図・遺物出土図の測量は簡易遣り方測量で行い、基本的に1/20で作成した。

調査終了後は遺構保護の目的のため、トレンチは砂で埋め戻し、さらに遺構検出面全体を10cm程度砂で被覆し、その上に発生土を戻した。

### 2 調査の概要

遺跡名	松本城大手門枳形跡
所在地	松本市大手3丁目67-2、67-10、67-11、77-12、77-14
調査期間	平成24年7月30日～12月28日
調査面積	215.5㎡
検出遺構	大手門枳形東辺部分：石垣、整地土、石列、総堀
出土遺物	

近世～近代：土器・陶磁器、瓦（水野・戸田家紋瓦ほか）、金属製品（小柄、釘ほか）、石製品（硯、砥石ほか）、木製品（漆器、建築材ほか）、植物繊維製品（草鞋か）



## 第3節 遺構

### 1 概要

大手門枳形跡の残存状況や位置・構造を確認するため、トレンチ1～4及び南区トレンチを設定し、調査を行った。この結果、大手門枳形の東端を区画する石垣と石列、および総堀跡が確認できた。以下、発見された各遺構について記述する。

### 2 石垣

トレンチ1・3と南区において、調査区中央部分に南北19mにわたって直線的に通る石垣列が発見された。石垣は、現地地表下1.2～1.5mにおいて、築石2段と基底部の根石1段の計3段が確認された。地表面から石垣検出面までの間は、近代以降の攪乱層である。発見された石垣残存高は、最大1.7mを測る。この石垣列は、東側に石垣面、西側に石尻が向く。築石の幅は0.5～1mで、石垣小口から石尻までの控え長は比較的短く、50～70cm程度のもが多い。それぞれの築石には矢穴が全く見られず、自然石を活かして積む野面積の手法が用いられている。

築石と築石の間には、間詰石として割石が詰められていた。石垣の裏込は、幅1.2～1.5mの範囲に拳大の礫が入れられており、そのほとんどが荒く割られた割石である。トレンチ3の東端では、根石の下に胴木が敷かれているのが確認され、根石の下部には破砕されていない拳大の円礫が詰められていた。この礫は、石垣裏込めの破砕された礫とは形状が異なり、根石下部のグリ石と考えられる。

石垣から東側部分では、総堀の掘り方とそこに堆積した埋土が観察された。築石小口面から東側1.2～1.5mの範囲には、瓦や木製建築材などの遺物が集中して出土した。特に瓦が多く、約500点の出土点数があった。これらの瓦は、すべて本瓦葺で棧瓦は出土していない。この遺物集中箇所出土層位をみると、上層に瓦・建築材が集中する遺物包含層があり、その下層に破砕された礫層、その下部に再び遺物包含層がみられた。瓦は、おそらく大手門枳形の門や土塀の屋根に載せられていたものとみられ、破砕礫は石垣の裏込めに使用されていたものに類似している。このことから、この遺物集中地点で出土したものは、明治期に大手門枳形の門や土塀などが破却された際に投棄されたものと考えられる。

南区においても石垣が直線的に延びているのが確認された。ただし、南区南端部分では旧・商業ビルの基礎が入られた影響で石垣が消失していた。南区北端部から1.4m部分の築石は、他と比べて比較的小形のもが多く、築石の規模と形状が異なる。また、この小形の築石部分には杭が2本打たれていた。1本は南側の大形の築石全面部分、もう1本は小形から大形に形状が変わる部分である。このことから、小形の築石部分には、改修が施されている可能性が考えられる。

今回の調査で確認された石垣列は、絵図との照合から大手門枳形の東縁を区画する石垣とみられる。絵図から推定すると、総堀から石垣が積み、石垣上面には土塀が構築されていたものと考えられるが、明治期の破却により築石2段と根石1段が残るのみで、大半が失われている。

調査の所見から、石垣の構造については次のように考えられる。胴木の上に根石を置き、その下部は根固め用のグリ石（円礫）で充填している。根石の上には築石を積み、築石の石間には破砕された礫を用いた間詰石が入れられていた。また築石の背面には、破砕礫を用いた裏込めが詰められていた。

なお、石垣を構築する築石や間詰石の石材は、玢岩（閃緑斑岩）系が主体で、この材質は天守や太鼓門の石垣とも類似している。また裏込石として用いられた礫は、安山岩・緑色凝灰岩・玢岩などがみられ、こうした石材は付近を流れる女鳥羽川や薄川に多くみられるものである。

### 3 石列

トレンチ1の西端とトレンチ4において石列が確認された。トレンチ1では、南北2mの間に3個の築石、



トレンチ4では1mの間に2個の築石が検出された。両箇所ともに発見された築石は1段のみである。築石小口面を西側、石尻は東側を向く。両トレンチで確認された築石は、東側で確認された石垣列と平行し、直線状に並ぶ。この石列には、築石小口から50～60cmほどの幅で、裏込め石が詰められていた。石列を確認した2か所では、築石下部に胴木などは検出されておらず、人為的整地土（地形層）の上に掘り方が掘られ、10～15cm大の円礫を根固め用のグリ石に用い、築石を設置していた。

石垣と石列が並行して通り、両方の遺構の間に裏込めがあることや絵図との照合などから、これらの遺構は大手門枡形土塼の基礎を構築するものであると考えられる。調査で確認した石垣列と石列の間隔は、残存部分で幅5.5m（約3間）を測る。ただし、石列裏込めから18世紀代に比定される陶器が出土しており、この時期以降に改修された可能性も考えられる。

#### 4 総堀

トレンチ1の石垣築石前面から東側において、総堀の落ち込みが確認できた。堀の埋め土と考えられる土層を除去し、漆黒色粘土層・灰白色シルト層・砂礫層などが互層的に堆積する地山面を掘り込んだ掘り方が確認された。堀底面の状況は、石垣小口面から1.2m程の範囲では、ほぼ平坦に掘り方を削平しているが、そこから東側では、傾斜角15°程の落ち込みが確認された。

<参考文献>

松本城管理事務所 2011 「資料 松本城 大手門枡形の歴史的変遷」

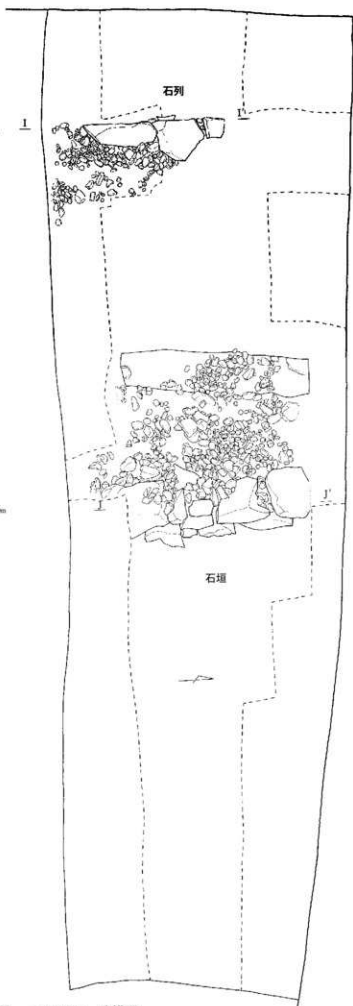
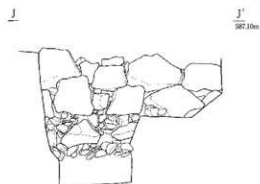


写真14  
調査区の配置



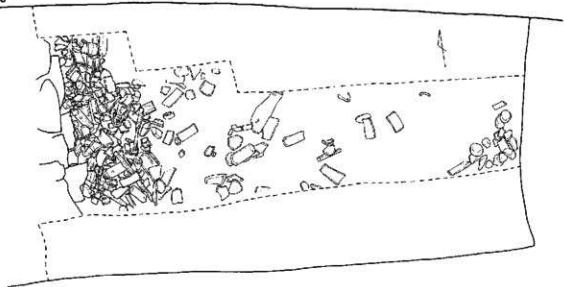
第5図 遺構全体図

トレンチ1 石垣・石列

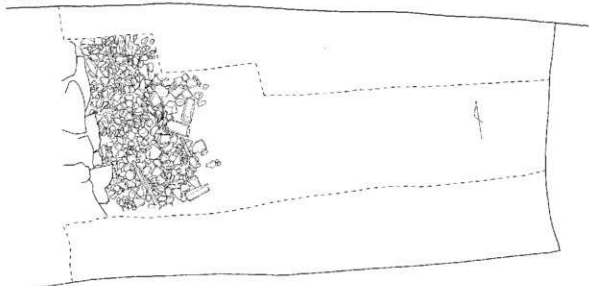


第6図 トレンチ1 遺構図

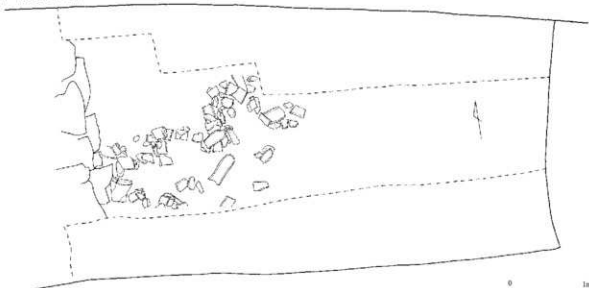
トレンチ1 瓦



トレンチ1 根固め

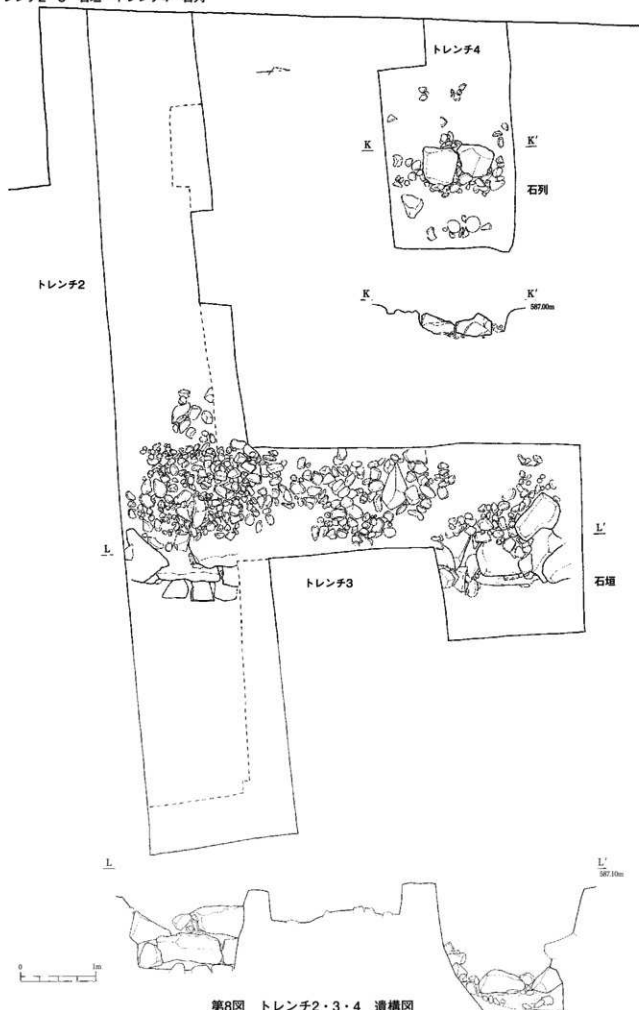


トレンチ1 根固め下層



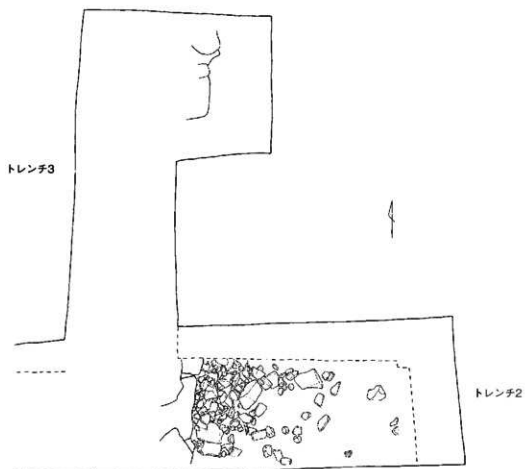
第7図 トレンチ1 出土図



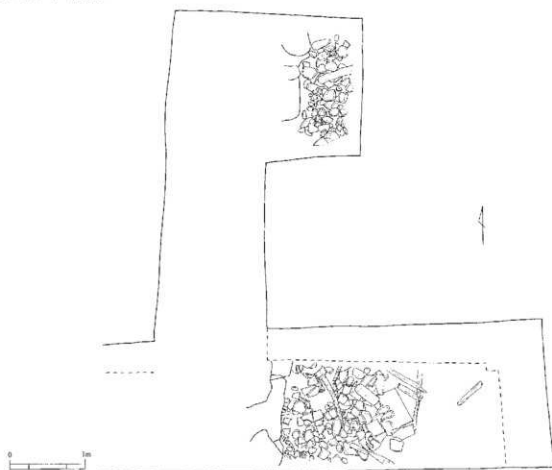


第8図 トレンチ2・3・4 遺構図

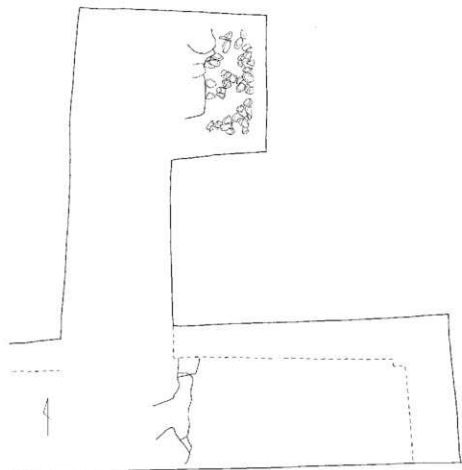
トレンチ2 割石



トレンチ2・3 根固め



第9図 トレンチ2・3 出土図



第10図 トレンチ3 出土図



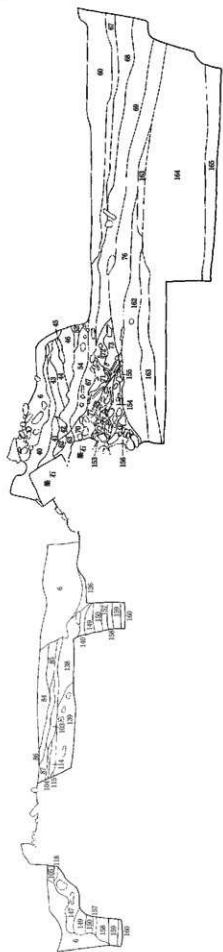
写真15  
T2 瓦出土状況



写真16  
T2 瓦出土状況  
(北から)

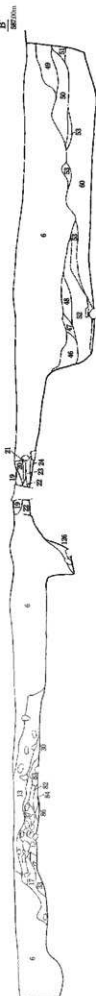
トレンチ1

A' 100m



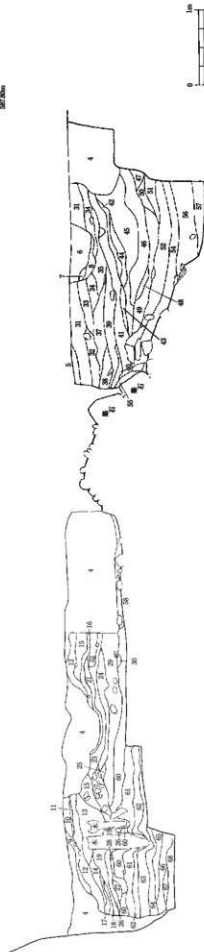
トレンチ1

B' 100m



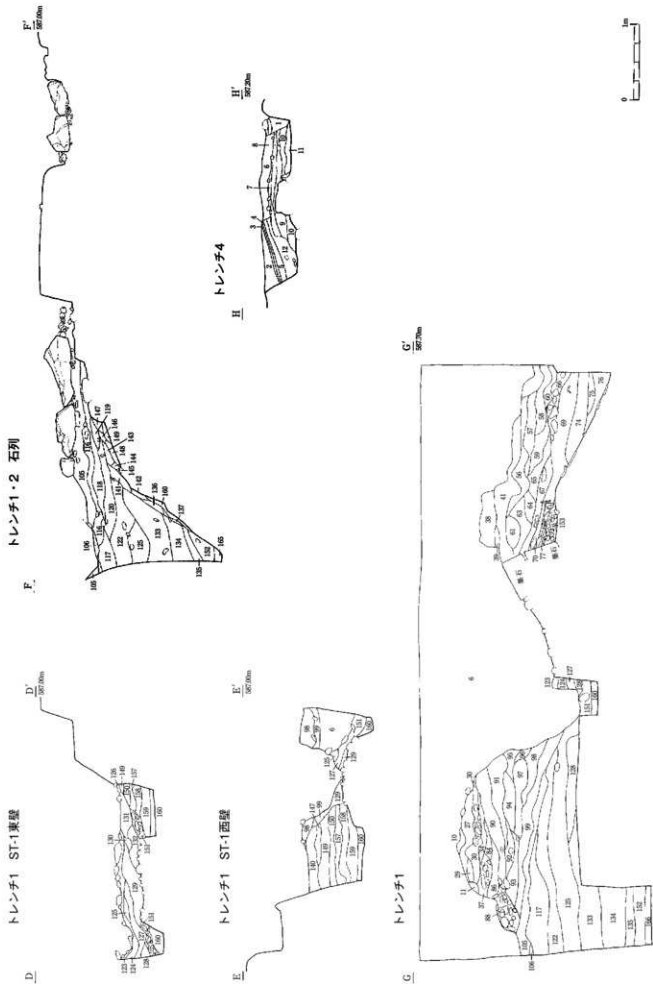
トレンチ2

C' 100m



第11図 トレンチ1・2 土層断面図





第12図 トレンチ1・2・4 土層断面図

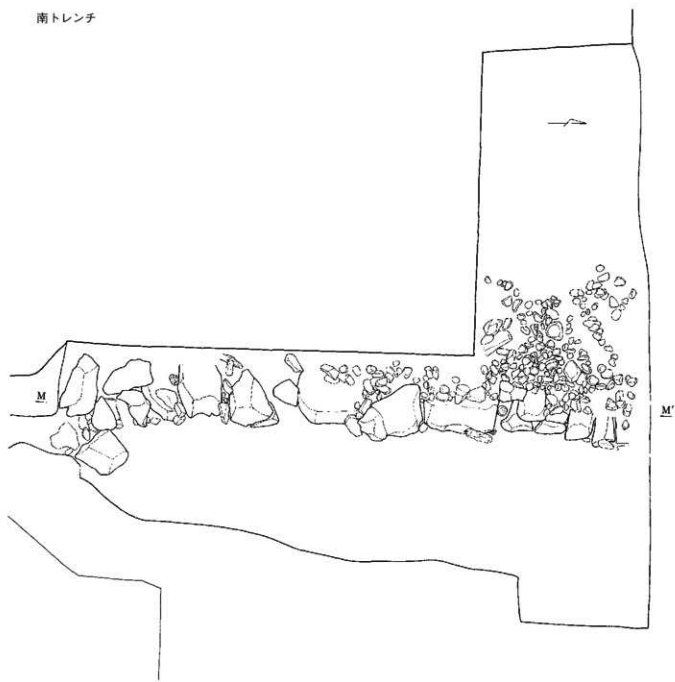
第1表 土層一覧

土層No.	土色	含有物
<b>トレンチ1</b>		
1		
2		
3	灰青	灰青
4		
5		
6	25V3-2	軽硬砂質粘土、コサリト多量
7	5V25-1	シルト(粘付や中強い)、砂混入多い、粗オリーブ褐色シルト層(小)2%、茶褐色粘土層(小)5%、～3cm大礫2%
8	5V3-1	シルト(粘付や中強い)、粗オリーブ褐色シルト層(小)2%、茶褐色粘土層(小)2%、灰オリーブ色シルト層(小)2%
9	5V25-1	シルト(粘付や中強い)、粗オリーブ褐色シルト層(小)2%、茶褐色粘土層(小)1%、灰オリーブ色シルト層(小)2%、黄1層(薄小)1%
10	5V45-1	茶褐色土層、灰色土層
11	5V4-1	茶褐色土層
12	灰青	灰青
13	75V4-15	
14	5V4-2	
15	5V4-3	
16	5V5-2	
17	5V3-1	
18	5V4-3	
19	5V3-1	前粘、～5cm大礫2%、茶褐色土層(大)15%、黄褐色シルト層(大)15%
20	25V4-1	前粘、～5cm大礫2%、灰色粘土層(中)2%
21	5V3-4	砂質土、～1cm大礫2%
22	5V35-1	前粘、灰白色シルト層(大)15%
23	5V3-1	前粘、黄褐色シルト層(大)20%
24	5V3-1	～5cm大礫混入、灰白色シルト層(小)10%
25	10V25-2	シルト(前粘)、粘砂30%
26	10V4-3	シルト(前粘)、黄土層(大)30%、灰色粘土層(大)1%、～20cm大礫混入、ドリがが入る層
27	10V25-2	シルト(前粘)、黄土層(小)5%、灰色粘土層(小)1%、粘砂30%、～20cm大礫混入、ドリがが入る層
28	10V25-2	シルト(前粘)、黄土層(小)5%、灰色粘土層(小)1%、粘砂30%、～20cm大礫混入、ドリがが入る層
29	10V5-1	
30	25V4-3	粘砂、～2cm大礫10%
31	5V3-2	粘土、茶色土層(中～大)20%、灰オリーブ色土層(小)10%、～10cm大礫混入、ドリがが入る層
32	灰青	灰青
33	75V25-1	粘土層、～10cm大礫2%
34	5V2-1	シルト(粘付)、粗オリーブ褐色土層(小)2%、茶褐色土層(薄小)1%、～1cm大礫2%
35	5V2-2	粘土、茶色土層(中～大)20%、灰オリーブ色土層(小)10%、～10cm大礫混入、ドリがが入る層
36	25V5-1	
37	5V45-1	茶褐色土層、褐色土層
38	5V4-1	
39	75V3-2	シルト(前粘)、～1cm大礫2%、茶色-灰白色土層(中～大)25%(灰片混じる)、砂多量
40	75V4-15	シルト(前粘)、～2cm大礫1%、茶色-灰白色土層(大～層大)20%、砂多量
41	25V25-1	シルト(前粘)、茶色-灰白色土層(中)2%
42	25V3-1	シルト(前粘)、～2cm大礫2%、黄色粘砂(小)3%、茶色-灰白色シルト層(大～層大)10%
43	5V2-2	砂質土(粘砂)、黄色粘砂、～0.5cm大礫多量に多い、～2cm大礫5%、茶色-灰オリーブ色シルト層(小)2%
44	5V25-2	シルト(前粘)、黄色粘砂多量、茶色-灰オリーブ色シルト層(層大)30%
45	5V3-15	シルト(前粘)、茶色-灰オリーブ色粘土層(大～層大)20%、～5cm大礫5%
46	25V25-1	シルト、茶色粘砂層2%、灰オリーブ色粘土層(大)2%
47	5V3-15	シルト、粘砂15%、～1cm大礫2%
48	25V4-1	シルト、～5cm大礫15%、砂質土層
49	25V25-1	砂層、～4cm大礫15%、～10cm大礫混じる、中砂多量
50	5V35-1	粘土、茶色-灰色粘土層(小)10%、茶褐色粘土層(小)5%、～10cm大礫混入
51	5V3-1	シルト(前粘)、茶色-灰オリーブ粘土層(大)30%、黄色粘砂4%
52	5V2-2	シルト(前粘)、～3cm大礫2%、黄赤い粘土層(小)2%
53	5V25-1	粘土、茶色-灰オリーブ粘土層(層大)50%、前粘粘砂層(層大)2%、黄色粘砂層(層大)10%、～5cm大礫2%
54	75V4-15	灰色土層
55	75V55-13	灰色土層、茶褐色土層
56	75V5-1	茶褐色土層、灰オリーブ土層、灰色土層
57	5V35-1	茶褐色土層
58	75V5-1	茶褐色土層、灰色土層、灰オリーブ土層
59	25V3-1	砂層、～3cm大礫(中砂)、～5cm大礫混じる
60	75V4-1	茶褐色土層
61	75V25-1	粘土、黄色粘砂層2%、茶褐色土層(層大)20%
62	5V2-1	シルト(前粘)、茶色-灰オリーブ粘土層15%、灰白色粘砂(小)10%
63	75V5-1	灰色土層
64	5V6-9	茶褐色土層、淡灰色土層
65	5V3-1	茶褐色土層、淡灰色土層
66	25V3-1	粘土(前粘)、粘った黄赤い粗オリーブ色、粘砂多量混着、～10cm大礫5%、灰色粘土層、混じり少ない層
67	5V35-1	
68	5V25-2	粘土(前粘)やや目が粗い、黄赤-灰オリーブ色粘砂層(大)30%、灰色粘土層(小)1%、粘砂分2%、粘砂層2%
69	5V3-1	粘土(前粘)粘砂分30%混着、本層混入
70	5V3-15	粘土(前粘)やや目が粗い、粘砂分5%、本質-灰片混入
71	5V3-2	粘土(前粘)やや目が粗い、灰オリーブ色粘土層(大)5%、～5cm大礫2%、灰色粘砂(層小)1%
72	25V25-1	粘土(前粘)灰オリーブ色粘土層、シルト、粘砂層(大)3%、本層混入
73	5V4-1	灰オリーブ土層、茶褐色土層
74	75V6-1	茶褐色土層、淡灰色土層
75	5V3-15	粘土(前粘)粘砂混入やや多い、本層(小)7%
76	5V3-2	粘土(前粘)粘砂混入少ない、灰片を混入層
77	10V3-1	シルト(前粘)、～6cm大礫下に中5%、茶褐色土層、黄褐色シルト層(小)10%
78	5V2-1	シルト(中～粘付)、～3cm大礫2%、灰オリーブ色粘土層(大)10%
79	75V3-1	シルト(中～粘付、砂多い)、～5cm大礫2%、～1cm大礫多量混入層
80	75V2-1	シルト(前粘)、～3cm大礫10%、灰オリーブ色粘土層(大)5%
81	75V45-15	
82	75V45-1	
83	5V3-1	
84	5V4-1	
85	5V3-15	
86	5V4-1	
87	5V4-1	茶褐色土層、灰色土層
88	25V5-15	

土層No.	土色	含 有 物
89	75V2-1	粘質土、～5割大礫0%、石屑あり
90	N4-0	灰オーリーブ土層、淡灰色土層、茶褐色土層
91	75V4-1	小礫、淡灰色土層、灰オーリーブ土層
92	75V4-1.5	淡灰色土層、茶褐色土層
93	75V5-1	淡灰色土層、茶褐色土層、灰オーリーブ土層
94	N5-0	茶褐色土層、淡灰色土層
95	5V5-1	灰色土層
96	5V4-1	淡灰色土層
97	5V5-1.5	茶褐色土層、淡灰色土層
98	75V3-2	小礫、淡灰色土層
99	75V5-1.5	茶褐色土層
100	10VH12-1	粘土
101	75V2-1	粘質土、～2割大礫2%
102	75V3-1	シルト(粘質)、～5割大礫1%、灰オーリーブ砂礫2%、茶色粘土粒(小)、黄褐色シルト粒(小)10%
103	5V3-1	灰色土層
104	75V3-1	
105	75V4-1	茶褐色土層、灰色土層
106	75V45-1	茶褐色土層、淡灰色土層、灰オーリーブ土層
107	10V25-1	シルト(粘質)、茶色粘土粒(小)、黄褐色砂礫(極小)3%
108	10VH12-1	粘土、～5割大礫7割に多い、灰オーリーブ色粘土粒(大)17%
109	10VH2-1	粘土、灰オーリーブ色粘土粒(小)15%、土器片含む
110	25V25-1	粘土、灰オーリーブ色粘土粒(大)10%
111	75V4-2	中礫
112	10VH12-2	粘土、細灰オーリーブ色粘土粒(中)2%、細灰オーリーブ色砂粒(大)1%、比較的鉄入物少ない
113	75V3-1	粘土、茶色粘土粒(小)5%、灰オーリーブ色粘土粒(中)7%
114	75V45-1	茶褐色土層、灰色土層
115	75V3-1	
116	75V4-1	
117	75V35-1	茶褐色土層、灰色土層
118	75V3-1	
119	75V5-2	
120	75V4-1	
121	75V45-1	
122	N45-0	茶褐色土層、灰色土層
123	75V3-1	
124	5V3-1	灰色土層
125	75V3-1	
126	75V4-1	
127	75V6-1	
128	5V35-1	
129	礫層	
130	5V6-2	
131	75V3-1	灰色土層
132	75V4-1	茶褐色土層
133	5V45-1	灰色土層、茶褐色土層
134	N45-0	茶褐色土層、灰色土層
135	N3-1	
136	5V35-1	
137	5V3-1	
138	75V3-1	灰色土層、茶褐色土層
139	75V4-1	
140	75V4-1	灰オーリーブ色土層
141	5V5-1	
142	5V45-1	
143	75V3-2	
144	75V35-1	茶褐色土層、灰色土層
145	75V3-25	
146	75V3-1.5	
147	10V2-1	粘土、黄化砂礫(小)3%、オーリーブ灰色粘土粒(大)2%、土器片含む
148	75V4-1.5	
149	5V3-1	粘土、茶色腐葉物7%、オーリーブ灰色粘土粒5%
150	5V5-2	淡灰色土層
151	5V5-2	
152	75V3-1	
153	礫層	～15割大V(礫層)(やや軽微の風入(た塵)、面に2VY2(2割)シルト(礫砂多い)入る
154	礫層	～15割大V(礫層)(15割より大きく風が大きい)、面に2VY2(2割)シルト(礫砂多い)入る
155	10V2/2-1	粘土(礫物層-礫砂中量流(と)、木炭混入、灰オーリーブ中砂礫(大)1%
156	礫層	～25割大V(礫層)(風化少ない)、面に2VY2(茶色粘質土(礫砂多い)入る
157	5V6-2	
158	75V3-1	
159	75V5-2	
160	75V3-1	
161	5V3-1	
162	25V25-1	粘土、腐葉物(赤)地下率75%
163	10VH12-1	粘土、腐葉物(赤)地下率70%(赤も多い)、木炭(枝)混入
164	5V5-2	シルト(やや粘質(と)、礫物類と茶色層が混かく堆積する層、腐葉物25%)
165	25VY2-1	シルト(礫砂混(と)、腐葉物混入
166	N5-0	
<b>トレンチ2</b>		
1		
2	灰層	灰層
3		
4	礫砂層	
5	25V25-1	腐粘質、～10割大礫25%、灰白色粘土粒(大)10%、焼土粒(中)15%
6	10VH4-5	砂礫層、～5割大礫-褐色中礫、表面に焼土粒多く堆積したような面跡あり
7	10VH3-1	腐粘質、～5割大礫1%、焼土粒(中)20%
8	10VH12-1	粘質土、～1割大礫1%、焼土粒(中)5%
9	25V3-1	砂質土、焼土粒(小)10%、～5割大礫7%、黄化砂礫(中)中5%
10	25V2-1	砂質土、茶色シルト粒(大)10%、～1割大礫2%
11	5V3-4	砂礫層(中礫)～1割大礫1%
12	25V3-1	腐粘、茶色シルト粒(大)10%、～1割大礫1%

土層 No.	土 色	含 有 物
13	5V3-1	砂質土、堆土・炭化物粒(小)2%、～10mm大礫10%
14	5V23-3	砂質土、～10mm大礫10%
15	72V25-1	シルト(前粘)、堆土・炭化物粒(小)小3%、～30mm大礫1%
16	25GY2-1	シルト(前粘)、堆土(全体の約1割弱)、黄褐色砂粒(小)15%
17	5V2-15	シルト、0.5mm大礫2%
18	5V2-2	シルト(上層より堆土が積まる)、黒色粘土(粘帯状)に混入
19	25V3-2	シルト(前粘)、黒色粘土粒(大)12%、黄砂砂粒(全体の混入)
20	72V25-1	シルト(前粘)、～10mm大礫30%
21	5V1-2	シルト(前粘)、腐植質(中)混入、黒色粘土粒(小)3%
22	2V1-4	シルト(前粘)、オレンジ黄色シルト層(大)50%
23	5V35-2	腐植、上層より砂粒混入多い、オレンジ黄色シルト層(中)10%
24	5V4-25	腐植、オレンジ黄色粘土塊層(部分的)50%
25	5V3-3	シルト(前粘)、オレンジ黄色粘土粒(層小)1%
26	5V25-1	シルト(前粘)、堆土・炭化物粒(小)15%
27	5V2-2	シルト(前粘)、堆土・炭化物粒(小)20%、オレンジ色シルト粒20%
28	5V2-15	シルト(前粘)、堆土・炭化物粒(中)25%、オレンジ色シルト粒12%
29	5V2-15	シルト(前粘)、堆土(大)15%、炭化物粒(中)20%、～15mm大礫5%、オレンジ黄色シルト粒(中)10%
30	25V3-1	前粘(固くしまる)、堆土・炭化物粒(層小)1%
31	25V25-1	前粘、～10mm大礫1%、黒色粘土粒(大)25%、灰色粘土粒(大)20%
32	25V2-1	前粘、黒色粘土粒(大)30%(主体)、灰色粘土粒(大)15%、黄褐色砂粒(中)12%
33	25V3-15	砂質土(黄褐色中砂層)に多く混入、黒粘-灰白色粘土粒(中)15%
34	25V3-1	前粘(黄褐色中砂少量混入)、黒粘-灰色粘土粒(層小)混入、灰白色粘土粒(大)10%
35	25V3-2	前粘(灰黄色中砂少量混入)、黒粘-灰白色粘土粒(大)10%、黄砂粒6-5%
36	5V3-2	腐植砂
37	25V3-15	前粘、黒粘-灰白色粘土粒(大)7%、黄褐色粘土主体
38	25V35-1	前粘、黒粘-灰白色粘土粒(中)5%、～15mm大礫%、腐植質混入
39	25V3-1	前粘、～10mm大礫5%、黒粘-灰色粘土粒(大)10%、炭化物粒(小)大2%、黄褐色砂粒少量混入
40	25V3-1	前粘、黒粘粘土粒(層小)混入(腐植質)、黄褐色砂粒少量混入
41	25V25-1	前粘、～10mm大礫3%、黒粘-灰白色粘土粒(中)2%
42	5V1-2	中砂(堆土)～20mm大礫2%、腐植物混入、黒色粘土粒(大)2%
43	25V3-1	前粘、～5mm大礫2%、黄褐色粘土粒(大)5%、腐植質アロップ
44	25V3-2	前粘、灰白色粘土粒(大)3%
45	25V25-1	前粘、～5mm大礫1%、腐植質アロップ(層小)10%
46	5V2-1	前粘、黒粘粘土粒(大)17%、～5mm大礫3%
47	5V4-2	中砂(土砂層)、黒粘粘土粒(大)10%、～20mm大礫2%
48	25V2-1	前粘、～5mm大礫1%、黒粘-灰白色粘土粒(小)2%
49	5V3-2	前粘、腐植質アロップ(層小)混入15%、オレンジ黄色粘土(中)中量、本質混入
50	70V2-1	前粘、腐植質アロップ(土砂層)40%、オレンジ黄色粘土粒(大)20%、灰オレンジ色中砂
51	5CV4-1	シルト(砂多い)、黒粘粘土粒10%、黄褐色粘土混入、本質少量(本の側)
52	10V3-1	シルト(砂多い)、～30mm大礫1%、黄褐色粘土中量
53	25GY25-1	シルト(前粘)、腐植質(1%)堆れた部分(を覆う上)
54	5CV4-1	シルト(前粘)、腐植質2%
55	25GY4-1	シルト(前粘)
56	10V3-1	シルト(前粘)、オレンジ黄色粘土(層小)2%
57	10V35-1	シルト(前粘)
58	5V35-1	シルト(前粘)、～20mm大礫30%、軟好混入(土層厚さ小)
59		丸石土層
60	73V45-1	粘(固くしまる)、黒色粘土粒(小)3%
61	N2	粘(固くしまる)
62	73V2-1	粘質土(柔らかい)、本質・腐植質10%、灰オレンジ色粘土粒(中)10%
63	23V2-1	粘質土(柔らかい)、本質・腐植質15%、下に灰白色粘土が多く堆積(腐植質下の堆土に混入)
64	5V3-2	シルト(前粘)、本質・腐植質5%、黒色粘土として部分的に堆積
65	5V3-15	シルト(前粘)、本質・腐植質5%、黒色粘土として部分的に堆積
66	5V3-1	シルト(前粘)、中砂混入多い、腐植質1%
67	10V35-1	中砂、腐植質2%
68	10V37-1	粘土、腐植質15%、軟粘層(2層目)に混入
<b>トレンチ4</b>		
1	25V4-2	粘砂、～20mm大礫30%、黒粘土層5%
2	10V4-2	粘砂、～5mm大礫30%、黒粘土層5%
3	25V4-1	粘質土(しまり有)、～5mm大礫3%、白粘土(表面)23%
4	25V3-1	粘質土(しまり有)、幾土層1%、～5mm大礫2%
5	10V33-4	シルト質土(しまり有)中や硬、堆土(層)140%、～5mm大礫5%、炭化物5%、黒粘土層5%
6	5V2-2	粘質土(しまり有)、黒粘土層5%、オレンジ黄色粘土層5%
7	25V4-6	粘砂、～5mm大礫10%
8	25V25-1	粘質土(しまり有)、黒粘土層5%、灰黄色粘土層1%、～10mm大礫
9	25V35-1	腐植(シルト)しまり有、～5mm大礫3%
10	5V3-1	シルト質土(しまり有)中や硬、黒粘土層1%、～20mm大礫2%
11	5V4-1	粘質土(しまり有)、灰オレンジ黄色粘土層10%、黒粘土層2%
12	10V33-4	シルト質土(しまり有)中や硬、堆土(層)中(大)10%、～5mm大礫5%、炭化物5%、ガラス、混入

南トレンチ

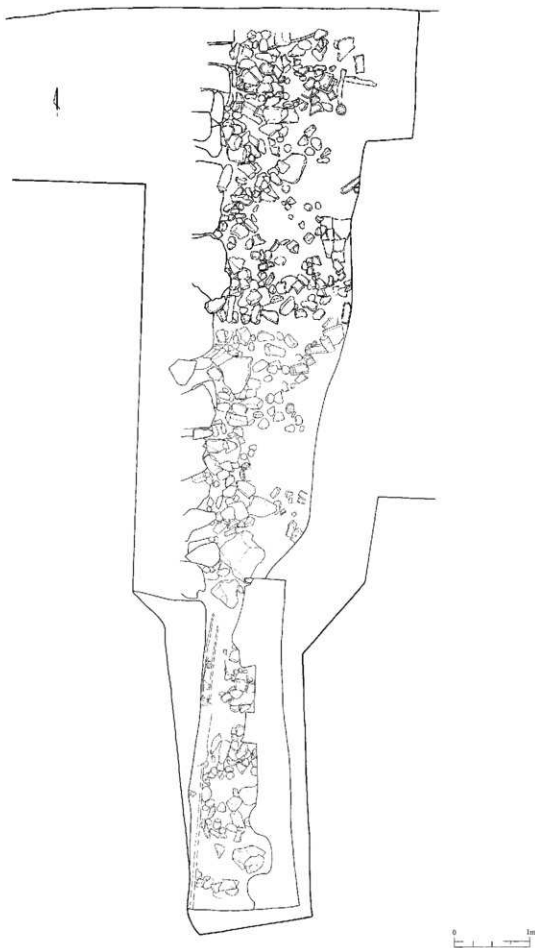


M

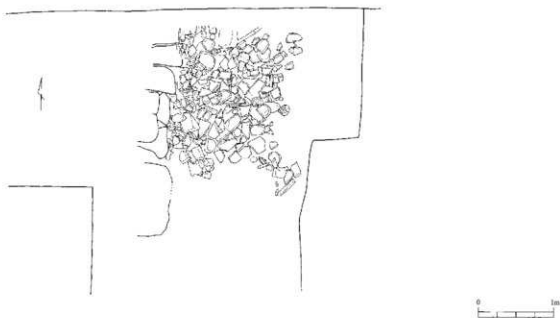
M'  
007.10m



第13図 南トレンチ 遺構図



第14図 南トレンチ 割石 出土図



第15図 南トレンチ 遺物 出土図



写真17  
南区北端 石垣根固め  
(東から)



写真18  
南区北端 石垣根固め  
(北から)

## 第4節 遺物

### 1 陶器・土器 (第16図、第2表)

今回の調査では、整地層および総埋土中より陶器・土器が出土した。このうち、枳形内の整地層および石垣・石列の裏込から出土したもので、図化可能な12点を提示した。種別の内訳は、陶器2点、土器10点(内耳鍋7点・皿3点)である。

#### (1) 陶器 (1・2)

1は、石列裏込際の整地土から出土した京焼小碗である。透明釉がかかり、文様はみられない。ロクロ調整で下半部は回転ヘラ削りが施される。18世紀後半の所産とみられる。2は、石垣と石列の間の整地土から出土したもので、美濃産灰軸皿の小片である。大窩Ⅳ期に比定されるものである。

#### (2) 土器 (3～12)

図化した土器は、皿と内耳鍋である。すべて石垣と石列の間の整地層から出土した。3～5は、土師器皿である。すべてロクロ調整で、底部に回転糸切痕が残る。5は、底径が7.4cmと大きく、古い様相がみられるが、3点とも小片のため時期が判然としない。6～12は、内耳鍋である。8・11は、傾きが大きく器高が低いタイプのもので、18世紀以降の所産と考えられる。

### 2 瓦 (第16～24図、第3～6表)

今回の調査で最も多量に出土した遺物は瓦で、総計491点を数える。これらの内訳は、軒丸瓦101点、丸瓦222点、軒平瓦12点、平瓦145点、その他2点、棧瓦9点である。棧瓦については、堀埋没土の上層面から出土しており、近代以降の可能性が高いため、報告掲載資料からは除外した。これらの瓦は、各トレンチの整地層や石垣際からまとも出土したものである。出土したすべての瓦にID番号を付し、形状や調整などを観察し、一覧表にまとめた。ID番号は、種別ごとに頭数字を決め(軒丸瓦11、丸瓦12、軒平瓦21、平瓦22、棧瓦21、その他42)、それぞれ1から(11-1など)付した。これらの資料で、各瓦種ごとの分類では、瓦当文様を有するものは文様により、それ以外は形態と調整の特徴により分類した。特に丸瓦は、各瓦当面を有する瓦の凹部に残る叩き調整の痕跡に着目し、A～E類の5種に分類した。以下、各種別の特徴と概要を述べていく。

#### (1) 軒丸瓦

101点が出土した。これらのうち、瓦当文様に家紋がみられるのは2種類ある。戸田氏家紋の離れ六つ星文と水野氏家紋の立沢渦文がみられる。家紋以外では、連珠左巻三つ巴文・連珠右巻三つ巴文がある。これらは、瓦当面の文様の特徴と凹面の叩き調整の痕跡により、さらに細分化できる。

#### ア A類：離れ六つ星文 (13・14・35・42など)

松本藩主・戸田家の家紋である離れ六つ星文が入った軒丸瓦である。瓦当面にこの紋が残る瓦は6点出土している。戸田氏は、松本城に江戸時代前期と後期の2回入封している(前期の元和3年～寛永10年・1617～1633、後期の享保11年～慶応3年・1726～1867)。全体的に器面が緻密で、高温で焼成されており、一部に銀色に輝く銀化した部分が観察される。丸瓦凹部の調整は、布目圧痕の残る器面に、縄目叩きが行われ、その後に棒状工具による叩き調整が施されている。棒状叩きの痕跡は、全面には残らず、一部にのみ観察される。叩きの単位は、幅の狭いものと広いものの2種類みられる。瓦当面は、外縁部の幅が広く、瓦当面と胴部の接合部には、強いヨコナデがみられる。胴部凹部の側縁と側面は、それぞれ面取りされて平坦面がみられるが、側面部(端部)の方が広く側縁部は幅が狭い。釘穴は、外面から内面に向けてあけられており、内面に飛び出した粘土塊も丁寧に除去している。胴部凸面は、丁寧に縦方向



にナデ調整が入る。瓦当面と丸瓦部本体の接合部には、強い指ナデが入る。(14・35・42)

#### イ B類：立沢瀉

松本藩主・水野氏の家紋である立沢瀉文が入る軒丸瓦は、17点ある。水野氏は、松本藩に、寛永19年～享保10年(1642～1725)の83年間在城した。瓦当面の文様をみると、連珠文が有るもの(B-①類)と無いもの(B-②類)の2種類みられ、連珠文の有るものにも連珠の数により、3パターンみられる。

B-①類：立沢瀉文の周りに連珠文があるものである。連珠文の数が15・16・17個付く3タイプがみられる。

胴部凹面に残る調整は、布目圧痕の残る器面に、タテ方向に強いケズリ状のナデが施されている。すべて叩き調整を省略しており、器厚が厚く歪みも大きい。胴部凹面の側縁・側面は、それぞれ面取りがみられるが、シャープさに欠けるため玉縁状になっているものも多く見られる。

B-②類：瓦当面に連珠文が付かないものである。側面に面取りは見られるが、側縁の面取りがみられない。凹面は布目圧痕とともに模骨(型)の木組みの痕跡が明瞭に残るものが多い。B-①と同様に叩き調整は見られず、強いケズリ状のナデ調整が施されている。また、B類共通で、瓦当面と胴部の接合が粗く、瓦当部と胴部が剥落している資料が多くみられる。

#### ウ C類：連珠左巻三つ巴文

瓦当面に連珠左巻三つ巴文が入るものをC類とした。C類とした軒丸瓦は32点ある。これらは、叩き調整や側面・側縁の形状で、①～③の3種に分類できる。連珠の数は、3種ともに9個である。以下、3種類の特徴を述べる。

C-①類：22・23など10点が該当する。胴部凹面側縁・側面に面取りがみられるが、側縁の幅が広いものである。胴部凹面の調整痕は、縄目叩きの後に、一部ヨコナデ調整が施されている。釘穴は外側からあけられており、内面に飛び出した粘土塊は処理されずに、そのまま残されている特徴がある。瓦当部と胴部接合部は、かなり粘土を足して接合し、ヨコナデが施されている。

C-②類：50・54など7点が該当する。胴部凹面側縁・側面に面取りがみられるが、側面の幅が広く側縁の幅が狭い。胴部凹面の調整痕は、布目圧痕の残る面に棒状叩きが行われ、一部にヨコナデが入る。棒状叩きは、比較的幅の広い板状の工具痕が残る。瓦当面は、珠文・巴文に布目圧痕が残る。

C-③類：51が該当する。胴部凹面には布目圧痕の器面にヨコナデが入るもので、叩き調整の痕跡は見られない。側縁・側面に面取りがみられ、側縁の幅が狭く、側面の幅が広い。

このほか、瓦当面のみ残存するものが7点みられる。

#### エ D類：連珠右巻三つ巴文

瓦当面に連珠右巻三つ巴文が入るものをD類とした。D類に分類された軒丸瓦は33点みられる。これらは、叩き調整や側面・側縁の形状などで①～③の3種に分けられた。このうち①と③は、C類の①・③と内面の叩き調整や周縁部の形状が共通する。D類の珠文の数は、すべて12個である。以下、3種類の特徴を述べる。

D-①類：32・37・58など8点があげられる。凹面の叩き調整や側縁・側面の形状などはC-①類と非常に似ている。側縁・側面の面取りは、側縁の幅が広い。凹面の叩きは、布目圧痕の後、縄目叩きの後に一部にヨコナデが施される。

D-②類：31・57など14点が該当する。布目の圧痕が残る器面に、縄目叩きが施されるものである。側縁・側面の面取りの形状は、側面の幅が狭く、側面の幅が広い。ややシャープさに欠けるもので、中には玉縁状になるものもみられる。瓦当面の裏面端部には、指ナデが1周巡る。

D-③類：38(11-31)・30(11-33)の2点が該当する。布目圧痕が残る器面に、タタキ調整の痕跡がみられず、ヨコナデが施されるものである。C-③類と特徴が共通する。側縁・側面に面

取がみられるが、側縁の幅が狭く、側面の幅が広い。瓦当面裏面の端部にナデが1周入る。瓦当面の文様部分にも布目圧痕が残る。

## (2) 丸瓦

222点の資料が出土した。これらは軒丸瓦の分類に準じ、凹面の調整と側縁・側面の形状などの特徴を観察した。この結果、軒丸瓦のA～D類の特徴に当てはまるものは踏襲し、軒丸瓦にはみられなかった特徴を持つ一群は新たにE類として分類した。

### ア A類

17点確認できる。軒丸瓦分類A類の凹面の調整痕と、側縁・側面の特徴が共通するもの。布目圧痕の後、縄目叩き・棒状叩きが施される特徴をもつ一群である。

### イ B類

B-①類は、側縁・側面に面取りもしくは玉縁状になるもので、布目痕に強いタテ方向のナデ調整がされるものである。37点確認できるが、12-121・12-123・12-124の3点は尾部がすぼみ形状である。また、内面に吊り紐痕が残るものが14点みられる。

B-②類は、5点確認できる。側縁のみ面取りされる形状で、布目痕に強いタテ方向のナデ調整が施されるもの。布目には、模骨（型の痕跡）が明瞭に残るものが多い。

### ウ C-②類

6点確認できる。凹面の観察で、布目圧痕の器面に棒状叩きが施され、一部にヨコナデ痕が残るものもある。棒状叩きは、やや幅の広い工具と狭い工具の2種類の痕跡が確認できる。

### エ D-②類

12点確認できる。布目圧痕が残る器面に、縄目叩きが施されるもの。側縁・側面の面取りの形状は、側面の幅が狭く、側縁の幅が広い。ややシャープさに欠けるもので、中には玉縁状になるものもみられる。

### オ CまたはD類

①・③類：2種ともに凹面調整や側縁・側面の形状がC・D類共通なため、瓦当面が残存していなければ断定は難しい。このため、分類はC or D類-①または③とした。

### カ E類

瓦当面が残存している軒丸瓦はみられず、丸瓦のみである。丸瓦部凹面の調整は、布目圧痕が残る器面に、縄目叩き、の後に棒状叩きも施され、一部にヨコナデが入るものである。叩き調整が、縄目と棒状の両方が施される丁寧なつくりである。側縁・側面ともに面取りがみられるが、側縁の幅が狭く側面の幅が広い。器面のザラツキが顕著で、調整等も古い様相の特徴が看取できる。今回の調査で出土していない五七の桐文がつく可能性も考えられるが、二の丸御殿出土の五七の桐文の凹面の特徴とは異なっている。

## (3) 軒平瓦

軒平瓦は12点出土した。軒丸瓦の出土量と比較すると非常に少ない。瓦当面の文様は、中心五花弁唐草文、三葉文唐草文、中心三葉文唐草文の3種類観察される。以下、それぞれの特徴を述べる。

### ア I類：中心五花弁唐草文軒平瓦

67の1点が該当する。瓦当上縁部に面取がある。面取り幅は、中央が広く端が狭い。全体的に器面のザラツキが顕著で、胎土中に砂礫が多く含まれる。特に1cm大の礫も混入しており、器面にひび割れが目立つ。瓦当面裏面には、平瓦部との接合部に強いヨコナデが入る。接合部分だけでなく、平瓦部分にも幅の広いヨコナデが施される。

### イ II類：三葉文唐草文軒平瓦

7点が該当する。すべて瓦当面上縁の面取は見られない。瓦当面裏面の平瓦部との接合部には、明瞭

なヨコナデ調整が残る。胎土中にⅠ類ほどの大きな礫は入らないが、細砂・粗砂が多く含まれ、器面は粗い。72・73は、他の出土瓦より特に大形である。73は、縦55.5cm、幅29.5cmの瓦で、縦横比率0.53と特に縦が長い。72も同様で、縦53.0cm、幅29.5cmで、縦横比率は0.55である。『摂津高槻城』（1984年）の報告では、「平瓦の縦横比0.83が安土・桃山時代までの平瓦と江戸時代以降の平瓦を区別する目安になる」とし、0.83以下即ち縦が長いものは「文禄年間以前の資料」、0.83以上すなわち縦が短いものは「元和年間以後の資料」としている。これに照らし合わせると古い様相となるが、この2点他に出土事例がなく、今後に検討を要す資料である。

#### ウ Ⅲ類：中心文唐草文軒平瓦

2点みられる。瓦当上縁部に面取りがみられる。同じように面取りが入るⅠ類とは異なり、中心部・端部ともに同じ幅である。瓦当額裏面にヨコナデが入るが、接合部分のみに入っており、平瓦本体部にはナデが及んでいない。胎土は緻密で、器面はツルツルしている。

#### (4) 平瓦

器面に残る調整等の観察では、はっきりとした分類は困難である。軒平瓦の記述でも記載したが、胎土や器面の特徴で大きく3種に分けられる。

ア類：器面のザラつきが顕著で、胎土中に砂礫が多く含まれる。特に1cm大の礫も混入しており、こうした箇所から発生するひび割れが目立つものである。

イ類：胎土中にア類のような大きな礫は入らないが、細砂・粗砂が多く含まれ、器面は粗くザラザラしているもの。

ウ類：緻密な胎土で、焼き上がりも硬く締まっており、器面はツルツルしているもの。

胎土分析等を踏まえた結果ではないので断定はできないが、軒平瓦との断面・表面観察の比較で、Ⅰ類とア類、Ⅱ類とイ類、Ⅲ類とウ類が類似している。

#### (5) 刻印・刻書瓦

出土した瓦のうち刻印・刻書のある資料は2点のみで、総量に比して非常に少ない。刻印の押されたものは丸瓦の57の1点、刻書は平瓦71の1点である。

57の丸瓦には、釘穴近くに「㊦」（丸に三）の刻印がみられる。

71の平瓦の凹面には四つ菱形の刻書がみられる。幅1～2mm程の線刻で模られている。

#### (6) まとめ

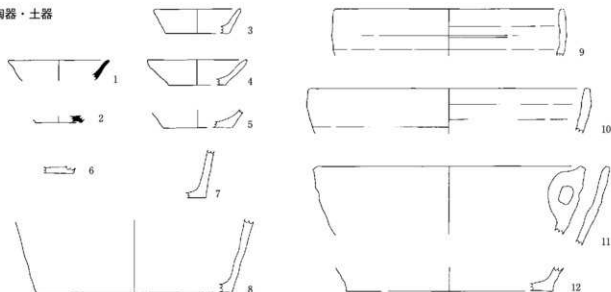
今回の調査で出土した瓦は、藩主・水野氏と戸田氏の家紋の入った軒丸瓦が確認されており、葺かれた年代に時期差が認められた。このことは、瓦を葺き直すような修理が複数回行われてきたことを示すものとして考えられる。出土した瓦のうち、特に軒丸瓦の瓦当面の文様と、凹面の叩き調整痕、側縁・側面の面取りの形状、瓦当面と本体との接合方法などの特徴から5種類に分類した。特に丸瓦凹面に残る叩き調整の痕跡では、明瞭な特徴が観察できた。この違いが時期的な技法の変遷を示すのか、瓦工人の相違を表すのか、その他に理由があるのかは判然としない。今後、今回出土した資料と松本城の他の調査地点から出土したものを比較していきながら、松本城関連の瓦の葺き替えの規模や背景、生産の様相、技法の変遷など、今後検討していく必要がある。

<引用・参考文献>

高槻市教育委員会 1984 『摂津 高槻城』

山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

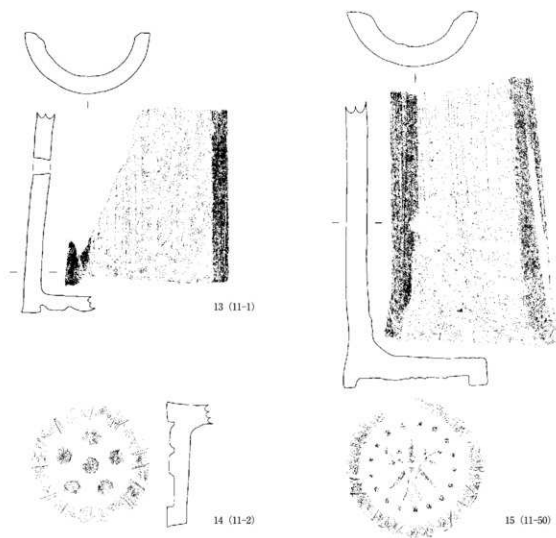
陶器・土器



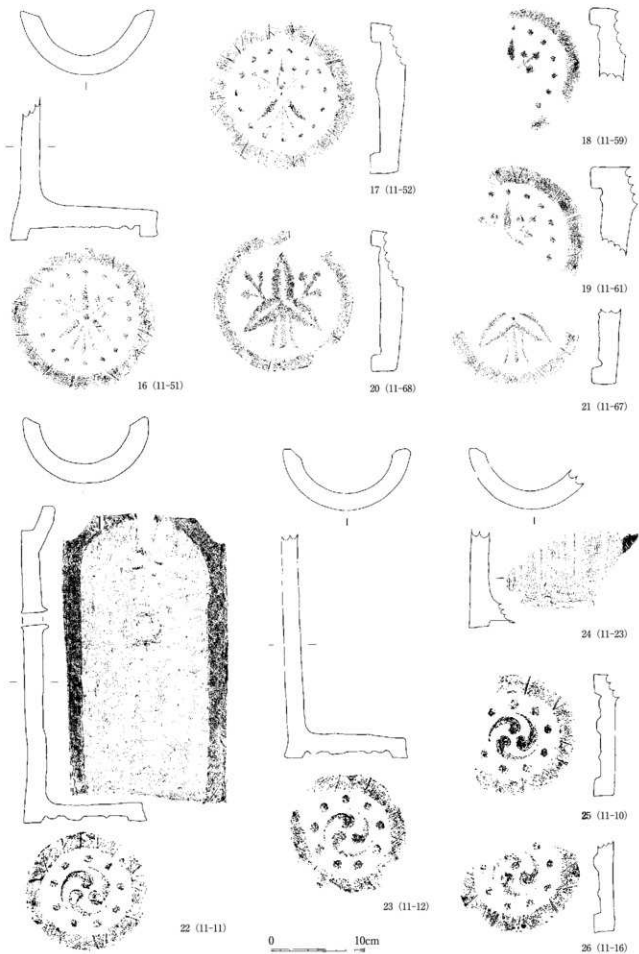
瓦

軒丸瓦

T1



第16図 陶器・土器・瓦(1)



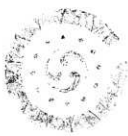
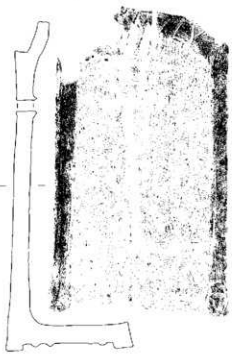
第17图 瓦 (2)



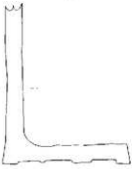
27 (11-18)



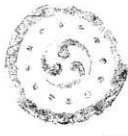
28 (11-15)



29 (11-42)



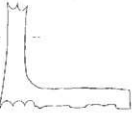
30 (11-33)



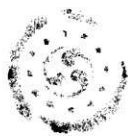
31 (11-39)



33 (11-45)



32 (11-30)

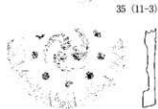
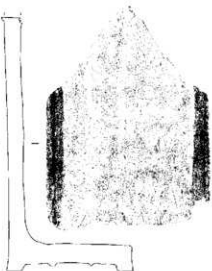
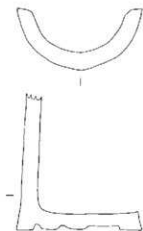


34 (11-38)

0 10cm

第18圖 瓦 (3)

T2



35 (11-3)

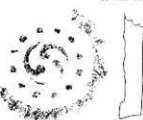


37 (11-29)

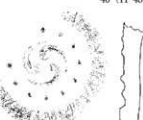
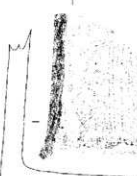


38 (11-31)

T3



39 (11-35)



40 (11-48)



42 (11-4)

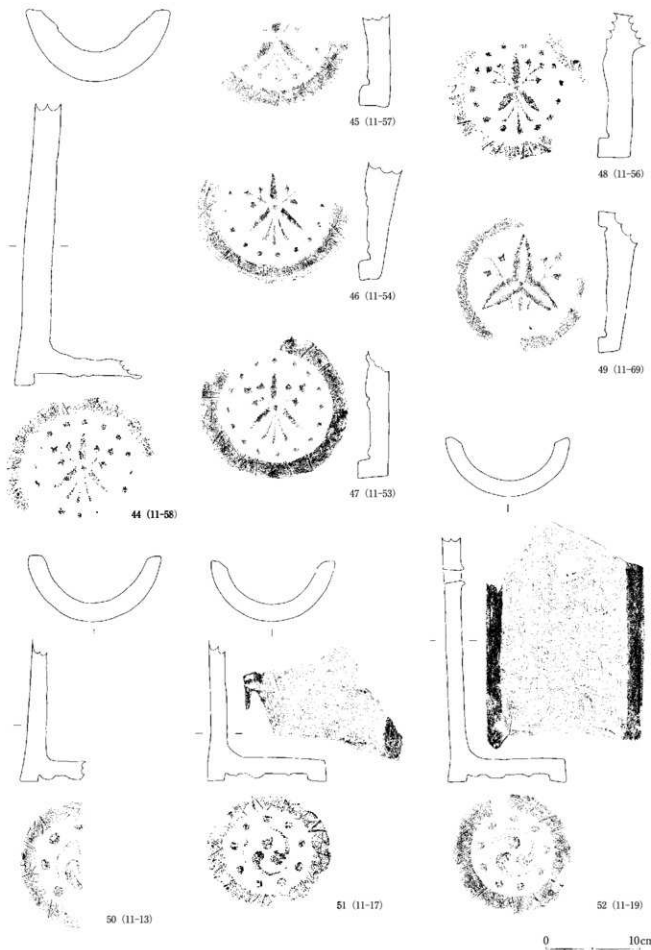


43 (11-66)

41 (11-34)

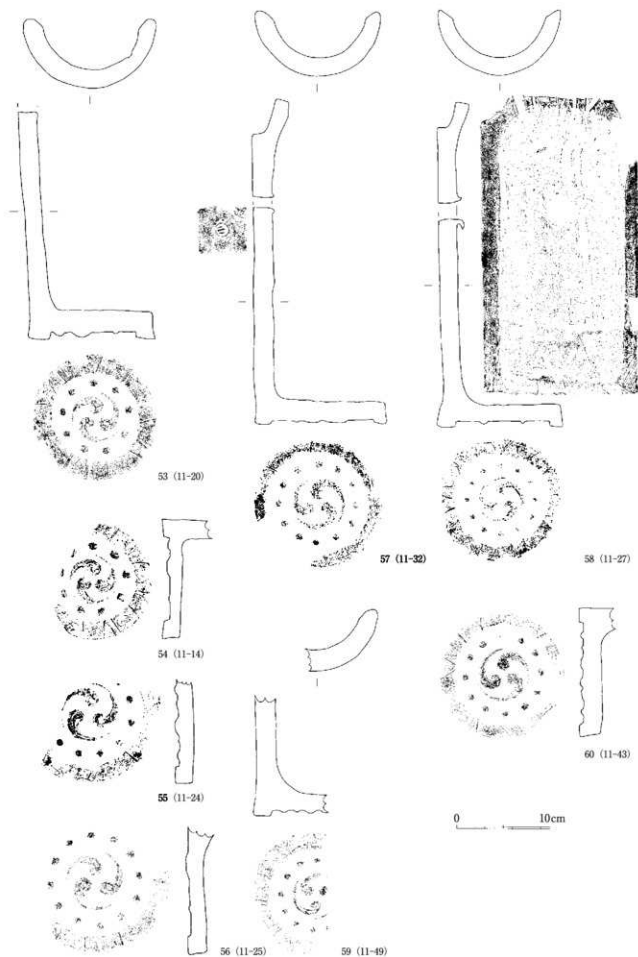
0 10cm

第19图 瓦 (4)



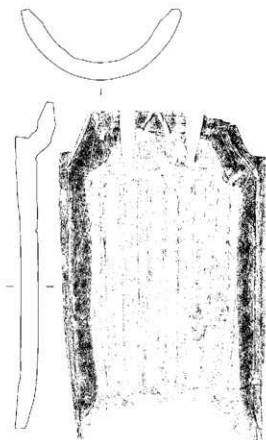
第20圖 瓦 (5)





第21图 瓦 (6)

丸瓦  
T1



61 (12-20)

南区



62 (12-18)

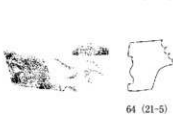
軒平瓦  
T1



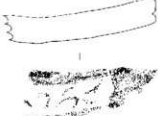
63 (21-11)



65 (21-6)



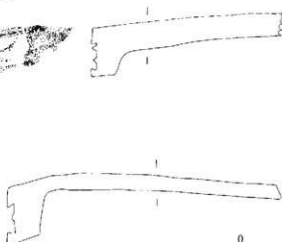
64 (21-5)



66 (21-7)



67 (21-4)



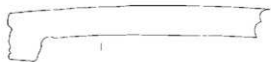
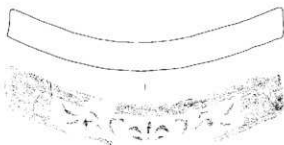
0 10cm

第22图 瓦 (7)

T2



68 (21-10)



69 (21-9)

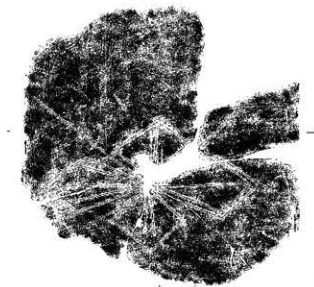
南区



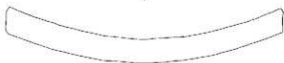
70 (21-8)

平瓦

T2·南区



71 (22-107)



0 10cm

第23图 瓦 (8)

軒平瓦  
T2



72 (21-3)

溝瓦



73 (21-1)

0 10cm

第24図 瓦 (9)

第2表 陶器・土器観察表

図No	実照番号	出土地点	洋記	種類	器形	造形			残存数	胎土	技法・形製の特徴	施陶	推定年代	鑑定年代
						口径	底径	器高						
1	整-1	T1石原・右列側	0180 №198	陶器	小瓶	105B			111.8	灰白	口ナロ調整、下平回転ヘウ型	矢橋のり透明	2c	古墳
2	整-2	T1石原・右列側	0177 №195	陶器	瓶	14B			底1.8	灰黒	口ナロ調整、瓶り出し高台	漆黒	16c	推平
4	整-3	T1	0025 T1-2	土器	瓶	105B	06.1	2.7	111.8、底(0.2)	暗灰	口ナロ調整、底部回転糸切	—	20c	在地産
6	整-4	T1	T1 セイ025 T1-2	土器	内耳瓶				小片	暗灰	表面磨目・内面口ナロナ	—	—	在地産
5	整-5	T1	0003 №94	土器	瓶		77.0		底1.8	瓶	口ナロ調整、底部回転糸切	—	—	在地産
3	整-6	T1石原側	0002 №103	土器	瓶	90B	65.0	2.6	口ナロ平、底1.16	暗瓶	口ナロ調整、底部回転糸切	—	—	在地産
10	整-7	T1石原・右列側	0182 №200	土器	内耳瓶	129.1			111.16	瓶	ヨコナデ	—	—	在地産
9	整-8	T1	0005 №89	土器	内耳瓶	124.0			110平ナ	暗瓶	ヨコナデ	—	—	在地産
11	整-9	T1	0007 №7	土器	内耳瓶	127.0			111.10	暗灰瓶	ヨコナデ	—	—	在地産
12	整-10	T1石原・右列側	0178 №196	土器	内耳瓶		22.0		底1.10	暗灰瓶	ヨコナデ	—	—	在地産
8	整-11	南区	0461 東区 ヌリ	土器	内耳瓶		20.0		底1.10	暗灰瓶	ヨコナデ	—	—	在地産
7	整-12	T1石原・右列側	0171 №189	土器	内耳瓶				底わすナ	暗灰瓶	ヨコナデ	—	—	在地産

第3表 軒丸瓦観察表

図No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	径(cm)	重量(g)	家紋	瓦文の数	内面調整		その他	類型	
											瓦文	調整			
13	11-1	0045	T1石原側	13.4	1.8	13.0	1000			縦目タテキ→横目タテキ	釘穴あり、瓦当部と側部接合部にスビナデ				
14	11-2	0030	T1石原側				13.4	550		不明					
35	11-3	0216	南区	13.4	1.7	13.4	840			縦目タテキ→横目タテキ	瓦当部側部接合部にスビナデ				
42	11-4	0248	南区	13.2	1.8	13.4	920			横目タテキ				A	
11-5	0249	T1				60									
11-6	0093	積形整地				14.4	100								
11-7	0076	T1石原側				12.6	120			不明					
11-8	0046	T1石原側				13.4	140								
11-9	0066	T1石原側				1.8	13.6	420			ヨコナデ	瓦当部と側部接合部に強いヨコナデで凹凸、横線・縦線は玉縁状		C1	
25	11-10	0098	T1石原側				12.8	340			不明	瓦当部部分に瓦当部特のケジ目あり		C(不明)	
22	11-11	0018	T1石原側	33.6	13.2	1.8	13.3	2160			縦目タテキ→一部ヨコナデ	瓦当部と側部接合部にヨコナデ、釘穴あり、横線・縦線は玉縁状			
23	11-12	0059	T1石原側	13.5	1.8	13.6	1360			縦目タテキ、瓦当部一部横目タテキ	瓦当部と側部接合部にヨコナデ、横線・縦線は玉縁状			C1	
30	11-13	0208	南区	14.1	1.9	14.2	920			横目タテキ→ヨコナデ	瓦当部と側部接合部にヨコナデ			C2	
34	11-14	0230	南区	1.9	13.2	3.00				横目タテキ	瓦当部と側部接合部にヨコナデ、横線・縦線は不明				
36	11-15	0069	T1石原側				13.6	220			不明			C(不明)	
36	11-16	0067	T1石原側				13.6	260			不明				
51	11-17	0215	南区				1.8	12.6	820		強いヨコナデ	横成や不直、横線・縦線は玉縁状		C2	
27	11-18	0043	T1石原側				13.4	270			不明	横成や不直、横線・縦線は玉縁状		C(不明)	
32	11-19	0051	南区	13.1	1.8	13.4	1390			縦目タテキ→ヨコナデナメのナデ	横成や不直、釘穴あり、横線・縦線は玉縁状			C1	
53	11-20	0224	南区	13.9	1.9	13.6	820			縦目タテキ→一部ヨコナデ	横成や不直、横線・縦線は玉縁状、瓦当部と側部接合部にヨコナデ			C(不明)	
34	11-21	0284	T2				13.4	160			不明				
26	11-22	0340	T1				12.4	140			不明				
34	11-23	0054	T1石原側				1.8	13.6	480		9	春日比賣→横目タテキ	釘穴前あり	C2	
55	11-24	0248	南区				15.6	340			12	不明		C(不明)	
36	11-25	0227	南区				16.4	300							
11-26	0063	T1石原側				15.0	1.7	14.8	540		9	縦目タテキ→ヨコナデ	瓦当部と側部接合部にナデ、横線・縦線は玉縁状(29と同7)		C1
58	11-27	0065	南区	34.5	13.2	2.0	13.3	2240			縦目タテキ→一部ヨコナデ(瓦当部の近くヨコナデ)	瓦当部と側部接合部にヨコナデ、釘穴あり、横線・縦線は玉縁状			
11-28	0244	南区				1.8	13.6	1440			縦目タテキ→一部ヨコナデ(瓦当部の近くヨコナデ)	瓦当部と側部接合部にヨコナデ、釘穴あり、横線・縦線は玉縁状			
37	11-29	0256	T2	14.2	1.9	14.0	1500			春日比賣→縦目タテキ	巴文に春日比賣、横線・縦線は玉縁状、横線内と側部接合部に内面凹み横成、瓦当部縁部、瓦当部との側部間にナデ			D1	
32	11-30	0032	T1石原側	13.1	1.9	14.0	1080			縦目タテキ→ヨコナデ	巴文に春日比賣、内面・横線は玉縁状、釘穴あり、瓦当部縁部、瓦当部との側部間にナデ				
38	11-31	0277	T2	13.6	1.8	13.4	1670			春日比賣→ヨコナデ	釘穴を中心から外にも開ける、瓦当部縁部、瓦当部との側部間にナデ			D2	
37	11-32	0228	南区	34.6	12.9	1.8	13.6	1990			春日比賣→縦目タテキ	横線内と側部接合部にナデ			D2
30	11-33	0036	T1石原側	13.3	2.1	14.0	3100			春日比賣→ヨコナデ	横線または釘穴の透し横成、玉縁平用			D2	
43	11-34	0123	T3石原側				13.4	440			不明				
39	11-35	0148	T3石原側				13.6	390			不明	瓦当部縁部間に瓦当部特のケジ目あり		D(不明)	
11-36	0235	南区				13.4	160								
11-37	0245	南区				13.8	1.8	14.0	840			縦目タテキ→ヨコナデ			D1
34	11-38	0050	T1石原側				13.6	480			不明	玉縁平用(22と同7)		D(不明)	
34	11-39	0057	T1石原側	13.6	1.7	13.6	1140			春日比賣→縦目タテキ	玉縁平用、横線玉縁状			D2	
11-40	0061	T1石原側	35.4	13.6	1.8	13.6	2220			縦目タテキ→ヨコナデ	釘穴あり、成形不良			D1	
11-41		集合(11.29)	南区				80					0209		集合	
29	11-42	0042	T1石原側	33.0	13.2	1.8	13.4	2430			春日比賣→縦目タテキ→ヨコナデ	釘穴あり、成形不良		D1	
40	11-43	0465	南区				13.4	530			不明	玉縁平用		D(不明)	
11-44		集合(11.29)	T2				1020					0403		集合	
33	11-45	0085	T1石原側	13.5	1.8	13.5	540			12	不明			D(不明)	
11-46		集合(11.29)	T2				160							集合	

国No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	径(cm)	重量(g)	家紋	珠文の数	内面調整	その他	類型	
80	11-47	0342	T1石垣前				130	100	通珠右巻三巴	12	不明		既不明	
80	11-48	0430	T3				154	450						
39	11-49	0241	南区			2.1	156	730	通珠右巻三巴	12	不明		D-1	
15	11-50	0143	T1	13.6	2.0	15.0	2530				春日比賣→強いタテナゲ			
16	11-51	0136	T1石垣前	14.0	1.9	15.8	3500				春日比賣→強いタテナゲ			
17	11-52	0297	T1				15.8	800		15	不明			
47	11-53	0274	南区				16.0	750		16	不明			
46	11-54	0246	南区				16.6	700			不明			
11	11-55	0278	T2	13.4	2.6	16.0	1640				春日比賣→強いタテナゲ	成形不良		
48	11-56	0225	南区				15.8	1000		15	不明	52と同高		
11	11-57	0207	南区				16.0	430		15中	不明	52と同高	B1	
14	11-58	0465	南区	15.0	2.6	16.4	2960			16	春日比賣→強いタテナゲ	成形不良		
18	11-59	0320	T1				16.0	430			有	不明		
	11-60	0247					16.8	240			有	不明		
19	11-61	0327	T1石垣前				16.4	610	立沢調					
	11-62	0464	南区				16.6	240						
	11-63	0464	南区				16.4	270			有	不明		
	11-64	0453	T5				17.4	150						
	11-65	0303	T1				14.4	80						
43	11-66	0226	南区	14.2	2.0	15.0	1440				春日比賣→タテナゲ	内面に繋(懸骨)の本眼(段)の痕あり		
21	11-67	0009	T1石垣前				15.0	350						
49	11-68	0050	T1石垣前				15.2	730				瓦当調整部分に瓦当接合時のクランク目あり	B2	
10	11-69	0259	南区				15.0	700			不明			
11	11-70	0336	T1石垣前				14.8	100						
	11-71	0279	T2				16.0	160			通珠左巻三巴	不明		
	11-72	0464	南区			2.0	13.2	400			横目タテナギ→ヨコナゲ			
	11-73	0032	T1石垣前				14.0	140			通珠左巻三巴	不明		
	11-74	0056	T1石垣前				14.0	80			通珠左巻三巴	不明		
	11-75	0340	T1				16.8	100	立沢調		有	不明	B1	
	11-76	0463	南区				13.0	80			有	不明	不明	
	11-77	0192	T5			1.8	12.2	200			有	不明		
	11-78	0096	T1石垣前				14.4	120	(立沢調)		不明		既不明	
	11-79	0139	T3石垣前				7.60	立沢調	不明	春日比賣→タテナゲ	内面に繋(懸骨)の本眼(段)の痕あり			
	11-80	0041	T1石垣前				3.20							
	11-81	0199	南区				4.40				通珠三巴	不明	CorD3	
	11-82	0110	T1石垣前	15.0	2.8	8.00	860	立沢調	不明	春日比賣→強いタテナゲ			B(不明)	
	11-83	0363	T1			2.5	14.8	450			通珠三巴	不明	春日比賣→横状タテナギ	C2
	11-84	0236	南区	14.7	2.8	13.00	1100	(立沢調)	不明	春日比賣→強いタテナゲ	内面に繋(懸骨)の本眼(段)の痕あり		B2	
	11-85	0215	南区				13.0	130		不明	横目タテナギ→強いヨコナゲ		不明	
	11-86	0327	T1石垣前				13.4	60		不明			不明	
	11-87	0430	T3	14.4	2.1		5.00	通珠左巻三巴	(有)	春日比賣→横状タテナギ			C2	
	11-88	0303	南区				8.40				強いヨコナゲ		巴文の各方向不明	CorD3
	11-89	0086	T1石垣前			1.9	4.40	通珠三巴	不明	横目タテナギ		巴文の各方向不明	CorD1	
	11-90	0125	T1石垣前	14.7	2.6		1820	立沢調	不明	春日比賣→強いタテナゲ	内面に繋(懸骨)の本眼(段)の痕あり		既不明	
	11-91	0076	T1石垣前				350	通珠三巴	不明	横目タテナギ→ヨコナゲ		巴文の各方向不明	CorE1	
	11-92	0234	南区			2.4	8.60	立沢調	不明	タテナゲ			既不明	
	11-93	0221	南区	13.7	1.8		1360				ヨコナゲ		巴文の各方向不明	CorD3
	11-94	0464	南区				350	通珠三巴	不明	春日比賣→横目タテナギ,ヨコナゲ		巴文の各方向不明	CorD1	
	11-95	0214	南区	14	2.3		1000						既不明	
	11-96	0248	南区	14	2.6		1000	立沢調			強いタテナゲ			
	11-97	0123	T1石垣前	14	1.8		1960				(春日比賣→横状タテナギ→一部ヨコナゲ)		C2	
	11-98	0102	T1石垣前	14	2.6		2580	通珠左巻三巴	(有)		春日比賣→強いヨコナゲ	横目線あり	C3	
	11-99	0100	T1石垣前	14	1.4		1610				横目タテナギ→ヨコナゲ	巴文の各方向不明,しぼった所に横目タテナギ	CorD1	
	11-100	0070	T1石垣前				240				ヨコナゲ			
	11-101	0186	T3				300	立沢調	不明	タテナゲ			既不明	

第4表 丸瓦観察表

国No.	ID番号	注記番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										支線	類型
12-1	0259	南区				500		横目タテナギ→一部ヨコナゲ			
12-2	0214	南区				300		不明	右穴あり(成形不良)		通珠三巴 CorD1
12-3	0336	T1石垣前				300		不明			立沢調必 CorD
12-4	0270	南区				1.7	500	横目タテナギ→横状タテナギ			磨れ六ツ星 A
12-5	0032	T1石垣前	14.9	1.8	5.00	800	春日比賣→横状タテナギ				通珠左巻三巴 C2
12-6	0131	T1石垣前				770	不明				立沢調 既不明
12-7	0105	T1石垣前				240	春日比賣→横状タテナギ				通珠左巻三巴 C2
12-8	0216	南区				160	横目タテナギ→ヨコナゲ				
12-9	0161	南区				210	春日比賣→横目タテナギ				通珠三巴 CorD1
12-10		接合(12.5)				210	不明		0059		不明 接合
12-11	0048	T1石垣前				540	春日比賣→横目タテナギ→横状タテナギ				
12-12	0215	南区				250	春日比賣→横目タテナギ→横状タテナギ(今や輪状の工具)				磨れ六ツ星 A
12-13	0302	南区	15.7	1.8	5.40	540	春日比賣→横目タテナギ→横状タテナギ				
12-14	0243	南区				820	春日比賣→横目タテナギ→横状タテナギ				
12-15	0271	南区	14.0	1.9	6.60	660	春日比賣→横目タテナギ→一部ヨコナゲ				通珠三巴 CorD1
12-16	0011	T1石垣前				280					
12-17	0294	南区				450					

IDNo.	ID番号	注記番号	掘土地点	長さ(m)	幅(m)	厚み(m)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類		
										支線	類型	
62	12-18	0267	南区	33.3	16.5	2.0	730		右穴あり			
	12-19	0065	T1右石垣面				460	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	右穴あり(丁寧な処理)	不明	E	
63	12-20	0077	T1右石垣面	34.6	17.0	1.8	2560		右穴なし			
	12-21	0029	T1右石垣面				600	右穴圧入→ヨコナデ			CorD3	
	12-22	0201	南区				120	右穴圧入→掘削タタキ			D-2	
	12-23	0042	T1右石垣面				220	右穴圧入→ヨコナデ			CorD3	
	12-24	0293	T1				560	掘削タタキ→一部ヨコナデ				
	12-25	0058	T1右石垣面	13.5	1.8	590		細小→掘削タタキ→一部ヨコナデ	右穴あり		CorD1	
	12-26	0048	T1右石垣面				180					
	12-27	0100	T1				170	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E	
	12-28	0142	T1	16.3	2.0	1340		右穴圧入→ヨコナデ			CorD3	
	12-29	0294	南区	16.7	1.9	1060		右穴圧入→掘削タタキ→ヨコナデ			CorD1	
	12-30	0191	T5	14.2	1.7	1140		掘削タタキ→ヨコナデ	右穴あり		遺珠三巴	
	12-31	0034	T1右石垣面	13.5	2.0	1880		右穴圧入→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-32	0259	南区				840	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ			CorD3	
	12-33	0021	T1右石垣面	17.3	2.4	1000		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	不明	不明	E	
	12-34	0180	南区				260					
	12-36	0019	T1右石垣面	15.5	1.8	860		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ				
	12-37	0029	T1右石垣面	17.8	3.1	2550		掘削タタキ	傾斜は掘削の面取		CorD3	
	12-38	0236	南区	16.8	2.1	1670		右穴圧入→掘削タタキ				
	12-39	0061	T1				400	右穴圧入→掘削タタキ			遺珠三巴	
	12-40	0291	T3	17.0	2.2	820		右穴圧入→ヨコナデ	崩り跡あり		CorD3	
	12-41	0015	T1右石垣面				800					
	12-42	0267	T1				560	右穴圧入→タタキ(不明)	不明	不明	不明	
	12-43	0020	T1右石垣面	17.3	2.5	1080		右穴圧入→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-44	0115	T1右石垣面				240	掘削タタキ→ヨコナデ			CorD3	
	12-45	0064	T1右石垣面				860	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E	
	12-46	0083	T1右石垣面	15.9	2.2	1380		右穴圧入→掘削タタキ			遺珠三巴	
	12-47	0259	南区	16.2	2.0	1060		右穴圧入→掘削タタキ→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-48	0088	T1右石垣面	14.0	2.0	1040		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	傾斜は掘削の面取		不明	
	12-49	0300	T1				300	傾斜は掘削の面取	傾斜は掘削の面取		E	
	12-50	0404	南区				440	掘削タタキ→ヨコナデ	傾斜・掘削面は支線状	右穴あり	遺珠三巴	
	12-51	0280	T3				540	右穴圧入→タタキ	傾斜面は支線状	立石溝	B-2	
	12-52	0423	T3				640	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E	
	12-53	0144	T1	15.8	2.2	1260		右穴圧入→掘削タタキ			遺珠三巴	
	12-54	0466	南区				340	不明	不明	不明	不明	
	12-55	0061	T1右石垣面				300	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	傾斜掘削の面取		遺珠三巴	
	12-56	0522	T2	14.0	2.0	820		右穴圧入→掘削タタキ	傾斜・掘削面は支線状		A	
	12-57	0001	T1右石垣面	33.3	15.3	2.4	2200	右穴圧入→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-58	0035	T1右石垣面	33.3	16.3	1.9	1960	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	傾斜は掘削の面取		不明	
	12-59	0069	T1右石垣面				280	掘削タタキ→ヨコナデ			CorD1	
	12-60	0211	南区				560	細小→掘削タタキ→ヨコナデ	右穴あり(成形不良)		遺珠三巴	
	12-61	0106	T1右石垣面				720	右穴圧入→ヨコナデ			CorD3	
	12-62	0288	T1	18.2	1.8	2140		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	不明	E	
	12-63	0438	T2	16.0	2.0	1420		右穴圧入→掘削タタキ→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-64	0464	南区				240	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ			遺珠三巴	
	12-65	0122	T1右石垣面				240	右穴圧入→ヨコナデ			A	
	12-66	0363	T3				2.0	970			遺珠三巴	
	12-67	0430	T3				330	掘削タタキ→ヨコナデ			CorD1	
	12-68	0071	南区				220	不明	不明	不明	不明	
	12-69	0238	南区				220	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ	不明	不明	E	
	12-70	0228	南区				330	掘削タタキ→ヨコナデ	傾斜は掘削の面取		遺珠三巴	
	12-71	0128	T1右石垣面				420	右穴圧入→ヨコナデ			CorD1	
	12-72	0341	T1				240	不明	不明	不明	不明	
	12-73	0341	T1				320	右穴圧入→ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-74	0228	南区	14.9	1.9	570		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	右穴あり、内面ノコリ調整	不明	E	
	12-75	0396	南区				500	掘削タタキ→ヨコナデ	右穴あり(成形不良)		CorD1	
	12-76	0424	T3				260	右穴圧入→ヨコナデ			CorD3	
	12-77	0247	南区				280	掘削タタキ→ヨコナデ	傾斜は掘削の面取		遺珠三巴	
	12-78	0342	T1右石垣面				300	傾斜・掘削面は支線状			CorD1	
	12-79	0196	南区	13.2	1.7	1020		右穴圧入→ヨコナデ	右穴あり		D-2	
	12-80	0342	T1右石垣面				360	傾斜掘削タタキ	傾斜・掘削面は支線状		遺珠三巴	
	12-81	0288	T1				370	ヨコナデ			遺珠三巴	
	12-82	0430	T3				150				CorD3	
	12-83	0217	南区				2.0	960	右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→ヨコナデ	不明	E	
	12-84	0431	T3				140					
	12-85	0408	T2	25.3	13.0	1.8	1340					
	12-86	0408	T2	25.3	14.5	2.0	1160		尾筋さし込み形、傾斜・掘削面は支線状			
	12-87	0242	南区	24.7	13.1	1.7	1280		細小→掘削タタキ→ヨコナデ			CorD1
	12-88	0010	T1右石垣面	23.8	13.8	1.7	1300		尾筋さし込み形、傾斜・掘削面は支線状、崩り跡あり			遺珠三巴
	12-89	0212	南区	25.0	13.0	1.7	1060		傾斜・掘削面は支線状			
	12-90	0023	T1右石垣面	26.7	13.3	1.7	800	不明	傾斜・掘削面は支線状			遺珠三巴
	12-91	0128	T1右石垣面				190	右穴圧入→ヨコナデ	傾斜・掘削面は支線状		CorD3	
	12-92	0128	T1右石垣面				420	掘削タタキ→一部ヨコナデ				
	12-93	0200	南区				1.9	580			CorD1	
	12-94	0036	T1右石垣面				600	右穴圧入→掘削タタキ→ヨコナデ	傾斜・掘削面は支線状			
	12-95	0071	T1右石垣面	14.3	2.5	1220		右穴圧入→タタキ	立石溝	B(不明)		
	12-96	0277	T2	15.6	2.0	1370		右穴圧入→掘削タタキ→棒状タタキ→一部ヨコナデ	不明	不明	E	
	12-97	0128	T1右石垣面				2.5	800				
	12-98	0079	T2右石垣面				300	右穴圧入→ヨコナデ			遺珠三巴	

国名	ID番号	注記番号	土地地点	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類		
										支線	類型	
12-99	0228		南区			2.1	730	強いタナナ	線路-線路に互換性	立石溝	B1	
12-100	0109		T1石垣前			2.2	740	強いタナナ		溝床三巴	CorD3	
12-101	0149		T3石垣前				720	溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-102	0249		南区			1.7	560	棒状タナナ→一部ヨコナテ (中心幅広の工具と強い棒状工具の接触の痕跡あり)		溝床右各三巴	C2	
12-103	0342		T1石垣前				150	溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-104	0261		南区			1.9	680	春日庄→溝目タナナ→棒状タナナ		離れ六ツ星	A	
12-105	0070		T1石垣前				240	春日庄→ヨコナテ		溝床三巴	CorD3	
12-106	0027		T1石垣前	12.5	2.0	1020		春日庄→溝目タナナ		溝床右各三巴	D-2	
12-107	0072		T1石垣前				330	春日庄→ヨコナテ		溝床三巴	CorD3	
12-108	0210		南区	12.9	1.5	560		溝目タナナ→ヨコナテ	不明	不明	E	
12-109	0072		T1石垣前	15.5	2.0	1000		溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-110	0206		南区				1.6	520	春日庄→溝目タナナ→棒状タナナ	不明	不明	E
12-111	0228		南区	13.0	1.5	700		タナナ				
12-112	0199		南区				1.4	500	溝目タナナ→ヨコナテ			CorD1
12-113	0060		T1石垣前				1.9	440	春日庄→ヨコナテ			CorD3
12-114	0464		南区				2.0	650	溝目タナナ→ヨコナテ			CorD1
12-115	0368		南区				550			溝床三巴		
12-116	0094		T1石垣前				440	春日庄→ヨコナテ			CorD3	
12-117	0024		T1石垣前				2.0	520	春日庄→溝目タナナ→ヨコナテ	線路-線路に互換性		CorD1
12-118	0338		T1石垣前				140	不明		不明	不明	不明
12-119	0238		南区	13.3	2.1	1600		春日庄→強いタナナ	釘穴あり(縦釘不良), 釘り線痕あり			
12-120	0230		南区	13.1	2.1	830		春日庄→強いタナナ	釘穴あり, 釘り線痕あり	立石溝	B1	
12-121	0218		南区	13.2	2.3	740		春日庄→タナナ	尾筋すばみ形			
12-122	0022		T1石垣前	13.8	1.8	420		溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-123	0196		南区	8.6	1.6	90		タナナ		立石溝	B1	
12-124	0296		南区	13.1	2.8	420		春日庄→タナナ				
12-125	0322		南区				250					
12-126	0053		T1石垣前				340	溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-127	0062		T1石垣前				300					
12-128	0165		T3石垣前				220	春日庄→ヨコナテ		溝床右各三巴	D-3	
12-129	0261		南区	13.6	2.5	690		春日庄→タナナ	釘穴あり	立石溝	B1	
12-130	0228		南区	13.0	1.8	760		溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-131	0307		南区	13.9	1.7	730		溝目タナナ→ヨコナテ	尾筋すばみ形			
12-132	0423		T3				180	春日庄→タナナ		立石溝	B1	
12-133	0097		T1石垣前				250					
12-134	0420		T3				1.7	650	溝目タナナ→ヨコナテ	尾筋すばみ形		CorD1
12-135	0053		T1石垣前				1.8	370	尾筋すばみ形			
12-136	0155		T3石垣前				260	タナナ		立石溝	B1	
12-137	0464		南区				350					
12-138	0022		T1石垣前				1.6	500	溝目タナナ→ヨコナテ	尾筋すばみ形	溝床三巴	CorD1
12-139	0054		T1石垣前	13.9	1.7	690						
12-140	0219		南区	13.5	2.1	610			釘穴あり, 釘り線痕あり			
12-141	0366		南区	14.2	2.3	1150		タナナ	釘穴あり	立石溝	B1	
12-142	0464		南区				1.9	480	釘り線痕あり			
12-143	0337		T1石垣前				130					
12-144	0398		南区				130	細かい溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-145	0124		T1石垣前	13.6	2.8	680		タナナ	釘り線痕あり	立石溝	B1	
12-146	0199		T3	15.2	2.1	1110						
12-147	0342		T1石垣前				200	春日庄→溝目タナナ		溝床右各三巴	D-2	
12-148	0257		T2	14.8	2.1	1240						
12-149	0025		T1石垣前				380	春日庄→溝目タナナ				
12-150	0430		T3				110	春日庄→タナナか		立石溝	探不明	
12-151	0431		T3				270	春日庄→タナナ		立石溝	B1	
12-152	0430		T3				330	溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-153	0240		T1				230	棒状タナナ→ヨコナテ		溝床右各三巴	C2	
12-154	0430		T3				250	春日庄→タナナ	釘り線痕あり	立石溝	B1	
12-155	0431		T3				90	春日庄→溝目タナナ→棒状タナナ	不明	不明	E	
12-156	0236		T1石垣前				110	春日庄→タナナ		立石溝	B1	
12-157	0464		南区				230	春日庄→棒状タナナ(一部幅広の板状)→ヨコナテ		溝床右各三巴	C2	
12-158	0044		T1石垣前				2.0	480	春日庄→溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1
12-159	0247		南区				140	春日庄→溝目タナナ		溝床右各三巴	D-2	
12-160	0238		T1石垣前				90	不明				
12-161	0238		T1石垣前				300	春日庄→タナナ		立石溝	B1	
12-162	0239		T1				300		脱骨の痕跡明顯			
12-163	0461		南区				350	春日庄→溝目タナナ→棒状タナナ	不明	不明	E	
12-164	0236		T1				150	不明		立石溝	B1	
12-165	0147		T1				260	春日庄→ヨコナテ		溝床三巴	CorD3	
12-166	0431		T3				140	細かい溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-167	0431		T3				250	タナナ		立石溝	B1	
12-168	0431		T3				200	春日庄→棒状タナナ(一部幅広の板状)		溝床右各三巴	C2	
12-169	0342		T1石垣前				180	細かい溝目タナナ→ヨコナテ		溝床三巴	CorD1	
12-170	0061		T1石垣前	15.0	3.1	1080		春日庄→タナナ	釘り線痕あり	立石溝	B1	
12-171	0263		南区				220	春日庄→溝目タナナ→一部棒状タナナ				
12-172	0466		南区				300	春日庄→溝目タナナ→棒状タナナ		離れ六ツ星	A	
12-173	0342		T1石垣前				150					
12-174	0342		T1石垣前				280	溝目タナナ→一部ヨコナテ				CorD1
12-175	0060		T1石垣前				180	溝目タナナ→ヨコナテ				CorD3
12-176	0341		T1				180			溝床三巴		
12-177	0471		南区				2.5	600	春日庄→ヨコナテ			
12-178	0211		南区				230	溝目タナナ→ヨコナテ				CorD1
12-179	0232		南区				510	春日庄→タナナ		立石溝	B1	
12-180	0294		南区				2.5	690	釘り線痕あり			
12-181	0044		T1石垣前				1.8	470	春日庄→溝目タナナ		溝床三巴	



国No.	ID番号	注記番号	掘土地点	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	内面調整	特徴・その他	分類	
										文種	形態
12-182	0092	T1	石垣前				290	春日庄前→掘目タタキ→一部ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-183	0073	T1	石垣前	15.0	2.4	1050		春日庄前→タタテテ			掘り継ぎあり B1
12-184	0073	T1	石垣前			160		春日庄前→掘目タタキ→一部積状タタキ			磨れた六ツ星 A
12-185	0361	T1				150					
12-186	0204		南区			380		掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-187	0052	T1	石垣前			330		掘目タタキ→一部ココナテ			
12-188	0201		南区			300		春日庄前→掘目タタキ→移状タタキ→ココナテ	不明		不明 E
12-189	0255	T2				400		春日庄前→掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-190	0069	T1	石垣前			170		春日庄前→掘目タタキ→一部積状タタキ			磨れた六ツ星 A
12-191	0247		南区			150		春日庄前→掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-192	0247		南区	12.3	2.2	700					
12-193	0385	T3				500		春日庄前→タタテテ			掘り継ぎあり, 外面に格子状の鉄線(風熱か) B1
12-194	0431	T3				150		掘目タタキ→ココナテ			掘り継ぎあり, 釘穴あり 透珠三巴 CorD1
12-195	0423	T3				40		不明			不明 不明
12-196	0121	T1	石垣前			180		春日庄前→タタテテ			立穴溝 B1
12-197	0383	T1	石垣前			2.4	360				
12-198	0257	T2				250		春日庄前→掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-199	0464		南区			410		春日庄前→掘目タタキ→一部積状タタキ			磨れた六ツ星 A
12-200	0408	T2		13.3	2.7	1400					
12-201	0464		南区			2.3	500				
12-202	0251	T2		13.3	2.2	820		春日庄前→タタテテ			掘り継ぎあり, 機曾の縦線明瞭, 釘穴あり 立穴溝 B1
12-203	0261		南区			150		掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-204	0464		南区			300		春日庄前→タタテテ			機曾の縦線明瞭, 釘穴あり 立穴溝 B1
12-205	0205		南区			290		春日庄前→掘目タタキ→一部積状タタキ			磨れた六ツ星 A
12-206	0292	T1				410		春日庄前→タタテテ			立穴溝 B1
12-207	0464		南区			290					
12-208	0113	T1	石垣前			1.7	430				透珠三巴 CorD1
12-209	0376	T1	石垣前			220					
12-210	0430	T3				290		春日庄前→掘目タタキ→移状タタキ			磨れた六ツ星 A
12-211	0309	T1	石垣前			100		春日庄前→ココナテ			透珠三巴 CorD3
12-212	0291	T1				3.1	460				
12-213	0263		南区	13.3	2.6	870		春日庄前→タタテテ			掘り継ぎあり 立穴溝 B1
12-214	0026	T1	石垣前	17.0	1.8	950		掘目タタキ→一部ココナテ			
12-215	0074	T1	石垣前			210		掘目タタキ→ココナテ			透珠三巴 CorD1
12-216	0466		南区			300					
12-217	0257	T2				350		春日庄前→掘目タタキ			透珠三巴三巴 D-2
12-218	0464		南区			180					
12-219	0464		南区			210					機曾の縦線明瞭 B2
12-220	0451	T5				360					立穴溝 B1
12-221	0279	T2				330		春日庄前→タタテテ			
12-222	0232		南区			370					

第5表 軒平互観察表

国No.	ID番号	注記番号	掘土地点	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	文種	特徴・調整等	
									文種	特徴・調整等
73	21-1	0140	南区	35.5	29.5	2.8	6480	三葉文様単文		縦横比率0.53(縦長), 瓦当上縁の面取りなし, 瓦当表面の平瓦組合部のココナテ調整, 平瓦部もナテ, 胎土に砂粒を多く含む(ザラついている), 大きな縦は入らない)
	21-2	0140	南区			2.1	380	文様不明		左側端部のみ残存
72	21-3	0282	T2	33.0	29.5	3.8	8370	三葉文様単文		縦横比率0.55(縦長), 瓦当上縁の面取りなし, 瓦当表面の平瓦組合部のココナテ調整, 平瓦部もナテ, 胎土に砂粒を多く含む(ザラついている), 大きな縦は入らない)
67	21-4	0116	T1	石垣前	29.0	25.5	1.5	2460	中心三葉文様単文	瓦当上縁に面取りあり(中央部の幅広く, 端部の幅狭い), 瓦当表面の両側に面取りあり, 瓦当表面の平瓦組合部に強いココナテ, 平瓦部もナテ, 胎面のザラつき調整(砂粒・塵の混入), 10cm大の縦線入し器面にヒビ割れが伴った調整技法や文様などを胎土中絶片の軒平瓦(石川氏の繪割か)
64	21-5	0338	T1				370			
65	21-6	0114	T1	石垣前		3.0	1930	三葉文様単文		瓦当上縁の面取りなし, 瓦当表面の平瓦組合部のココナテ調整, 平瓦部もナテ, 胎土に砂粒を多く含む(ザラついている), 大きな縦は入らない)
66	21-7	0142	T1	石垣前		2.9	1280			
70	21-8	0272	南区	32.8	2.0	2280		中心三葉文様単文		瓦当上縁部に等間隔の面取りあり, 瓦当表面と平瓦組合部にココナテ, 平瓦部はほとんどナテなし, 胎土焼成弱く脆さ, 器面は滑らか
48	21-9	0286	T2		3.0	3.0	3760			
68	21-10	0436	T2		2.7	560		三葉文様単文		瓦当上縁の面取りなし, 瓦当表面の平瓦組合部のココナテ調整, 平瓦部もナテ, 胎土に砂粒を多く含む(ザラついている), 大きな縦は入らない)
63	21-11	0345	T1			1.50	150	中心三葉文様単文		瓦当中央部のみ残存, 瓦当上縁部に等間隔の面取りあり, 胎土焼成弱く脆さ, 器面は滑らか
	21-12	0341	T1				200	文様不明		右側端部のみ残存

第6表 平瓦観察表

図 No.	ID番号	注記番号	測土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	胎土の特徴	分類
	22-1	0231	南区	27.3		2.0	1100		
	22-2	0231	南区				420		
	22-3	0254	南区				180		
	22-4	0112	T1 石川原			1.8	660	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-5	0233	南区			2.0	580		
	22-6	0118	T1 石川原			1.9	460		
	22-7	0108	T1 石川原				360		
	22-8	0103	T1 石川原			1.8	300		
	22-9	0117	T1 石川原				400	胎面のザラつき顕著（砂礫を多く含む）、1cm大の礫が混入し胎面のヒビ割れが目立つ	ア
	22-10	0111	T1 石川原			2.4	720		
	22-11	0104	T1 石川原			1.8	520	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-12	0147	南区			3.1	820		
	22-13	0423	T2			1.8	340	胎面のザラつき顕著（砂礫を多く含む）、1cm大の礫が混入し胎面のヒビ割れが目立つ	ア
	22-14	0140	T1				360		
	22-15	0236	南区			1.8	500		
	22-16	0287	T1				680		
	22-17	0237	南区			2.4	820		
	22-18	0141	T1 石川原				840	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-19	0140	T1				340		
	22-20	0423	T3				300		
	22-21	0163	T3 石川原				620		
	22-22	0409	T1 石川原	28.1		2.0	1030		
	22-23	0423	T3				620		
	22-24	007	T1 石川原	26.2		2.4	1080	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-25	0265	T1	31.0		2.4	1720	胎面のザラつき顕著（砂礫を多く含む）、1cm大の礫が混入し胎面のヒビ割れが目立つ	ア
	22-26	0087	T1 石川原				610		
	22-27	0285	T1		24.0	2.0	1400		
	22-28	0043	T1 石川原				540		
	22-29	0229	南区	28.8		2.0	980		
	22-30	0132	T1 石川原				820		
	22-31	0268	南区				340		
	22-32	0229	南区			2.0	760		
	22-33	0052	T1 石川原				600	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-34	0135	T1 石川原				560		
	22-35	0281	T1			2.7	1050		
	22-36	0046	T1 石川原				370		
	22-37	0360	南区	28.2		2.0	1140		
	22-38	0012	T1 石川原				620		
	22-39	0016	T1 石川原	27.7		1.8	1040		
	22-40	0046	T1 石川原				360		
	22-41	0428	T3				310		
	22-42	0126	T1 石川原			1.8	700	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-43	0014	T1 石川原	28.1		2.2	1320	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-44	0198	南区				340		
	22-45	0033	T1 石川原			2.0	980		
	22-46	0107	T1 石川原	29.0		2.1	1190		
	22-47	0295	南区	29.6		2.0	1370		
	22-48	0300	南区				430		
	22-49	0038	T1 石川原			2.0	1190		
	22-50	0299	南区			2.0	770		
	22-51	0461	南区				320		
	22-52	0461	南区				400		
	22-53	0292	T1				620	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む、西側に傾方向の明瞭なナズダあり	イ
	22-54	0039	T1 石川原	28.0		2.2	1000	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-55	0461	南区				260		
	22-56	0461	南区				320		
	22-57	0463	南区				420	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-58	0252	T2				240	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-59	0453	T2			2.6	970	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-60	0453	T2				230	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-61	0296	南区			1.7	620	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-62	0223	南区			1.9	690		
	22-63	0295	南区				250		
	22-64	0323	南区	30.4		2.0	1090		
	22-65	0342	T1				350		
	22-66	0013	T1 石川原			2.1	1320		
	22-67	0342	T1				270		
	22-68	0347	南区			2.0	680		
	22-69	0335	T1				450		
	22-70	0332	T1			1.9	710	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-71	0275	T2	31.6		1.7	1330	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-72	0276	T2	27.6		2.2	1180		
	22-73	0244	南区				500		
	22-74	0130	T1 石川原			2.0	720	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ
	22-75	0137	T1 石川原				900	胎土焼成ともに緻密で堅い、胎面は滑らか	ウ
	22-76	0011	T1 石川原			1.8	600		
	22-77	0193	T5				360		
	22-78	0164	T3 石川原				480		
	22-79	0283	T2	28.7		2.0	1460		
	22-80	0067	T1 石川原				370		
	22-81	0066	T1 石川原			2.0	920		
	22-82	0284	T2				370		
	22-83	0284	T2				520		
	22-84	0140	T1 石川原				1130	胎面はザラついている、胎土中に砂礫を多く含む	イ

回 No.	ID番号	注記番号	出土地点	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土の特徴	分類	
	22-85	0286	T1				360	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む		
	22-86	0334	T1 石所遺	29.0		2.0	960			
	22-87	0028	T1 石所遺	28.0		1.5	800	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
	22-88	0029	T1 石所遺				590			
	22-89	0260	南区	28.0		2.0	930			
	22-90	0139	T1 石所遺			1.9	590	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-91	0429	T3				520	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
	22-92	0389	T1				960	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
	22-93	0006	T1				280			
	22-94	0389	T1				610			
	22-95	0254	T2			1.8	1030			
	22-96	0040	T1 石所遺			2.3	930			
	22-97	0119	T1 石所遺				460			
	22-98	0120	T1 石所遺				660			
	22-99	0222	南区			1.9	940	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか		
	22-100	0222	南区				440			
	22-101	0222	南区			1.6	770			
	22-102	0222	南区				450			
	22-103	0250	T2	28.2		2.0	1030		ウ	
	22-104	0250	T2				190			
	22-105	0406	T2				480			
	22-106	0408	T2				420			
	71	22-107	0260/0258	T2 南区	29.3		2.6	3030	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか。西面に四つ葉状の模刻あり	
		22-108	0260	T2			150			
		22-109	0408	T2			770			
		22-110	0240	南区	31.8		2.0	1660	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	
		22-111	0240	南区			1000			
		22-112	0240	南区			630			
		22-113	0068	T1 石所遺			520			
		22-114	0424	T3			490			
		22-115	0424	T3			200	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
		22-116	0424	T3			260			
		22-117	0424	T3			150	器面のザラつきの顕著（砂粒を多く含む）。1cm程度の指入し器面のヒビ割れが目立つ	ア	
		22-118	0228	南区			420			
		22-119	0228	南区		1.6	630	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-120	0205	南区			580			
		22-121	0260	T1			320			
		22-122	0408	T2		3.0	670	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
		22-123	0341	T1			450	器面のザラつきの顕著（砂粒を多く含む）。1cm程度の指入し器面のヒビ割れが目立つ。凸面にヨコナガあり	ア	
		22-124	0341	T1			450			
		22-125	0217	南区			410	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-126	0279	T2		2.0	780			
		22-127	0279	T2		2.3	780	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
		22-128	0464	南区			400	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-129	0464	南区			120	不明	不明	
		22-130	0279	T2		3.0	440	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-131	0464	南区			350			
		22-132	0464	南区			420			
		22-133	0465	南区			570			
		22-134	0465	南区	28.4	2.0	3230	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
		22-135	0280	T2			560			
		22-136	0280	T2			250			
		22-137	0280	T2		1.9	800			
		22-138	0323	南区			550	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-139	0323	南区			370			
		22-140	0256	南区			400			
		22-141	0256	南区			580	器面はザラついている。胎土中に砂粒を多く含む	イ	
		22-142	0253	南区		2.0	810	胎土焼成ともに緻密で堅い。器面は滑らか	ウ	
		22-143	0443	T4			280			
		22-144	0425	T3			470			
		22-145	0425	T3			250			

### 3 石器・石製品 (第25図、第7表)

合計6点の石器・石製品が出土した。内訳は、硯1点、砥石2点、敲石1点、二次加工ある剥片1点、石核1点がある。このうち近世ないし近代に帰属する可能性のあるものを中心に3点を図示した。

1は、粘板岩製の硯で、墨池部が欠損し、全体的に鉄分が付着している。平面形は、外・内両側とも長方形を呈す。陸部中央の窪みは使用によるものと考えられる。2は、緑色凝灰岩製の砥石である。砥面は1面あり、使用により若干内湾している。裏面は、幅0.4mm程度のノミ痕が多数観察される。また、側面にはノコギリによる切断痕と思われる細かい線状痕が観察され、未使用面である。石材から仕上げ砥であろう。3は、頁岩製の砥石である。長軸に半分折れているが、砥面が4面に渡ることが確認できる。小口面には円盤ノコギリによる切断痕と思われる線状痕がみられる。

第7表 石器・石製品一覧表

図 No.	ID	出土地点		器種	石材	寸法			重量 (g)	破損状況	備考
		トレンチ	地点			最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)			
1	T1	砲丸	硯	粘板岩	(1070)	784	2.55	339.3	墨池部折れ	完全部湾心、縁辺付近に墨け残存	
2	T1	砲丸	砥石	緑色凝灰岩	(1760)	704	3.32	727.8	両縁折れ	砥面1面、表面ノミ整形痕あり(ノミ幅約0.6mm)、側面切断痕有	
4	T1	砲丸	敲石	砂岩	(1377)	607	5.37	572.1	下平折れ	縁部1面	
3	T2	跡土	砥石	チャート	2.07	1.99	0.53	1.7		2軸線に二次加工	
3	3	跡土	砥石	頁岩	(724)	5.52	3.64	263.8	上半折れ	砥面4面、小口円盤ノコギリ切断痕有	
6		跡土	石核	チャート	7.32	4.81	2.21	83.7		打割3面	

寸法(括弧)は現存前をあらわす。

### 4 金属製品 (第25図、第8表)

金属製品は18点出土している。種別は釘、小柄、煙管、銭貨、滓、不明品がある。このうち、層位や出土地点から近世に帰属する可能性のあるものを中心に、10点を図化した。銭貨については現存状態が悪く、図化提示はできなかった。

瓦釘 1・2は長さが20cm以上あり、頭部が鍵状になっているもので、瓦を固定するために使用したのと考えられる。1は、瓦に刺さった状態で出土している。

釘 3～8は角釘で頭巻釘である。いずれも板材に刺さった状態で出土した。7は湾曲した状態で出土しており、釘抜きによって湾曲した可能性が考えられる。

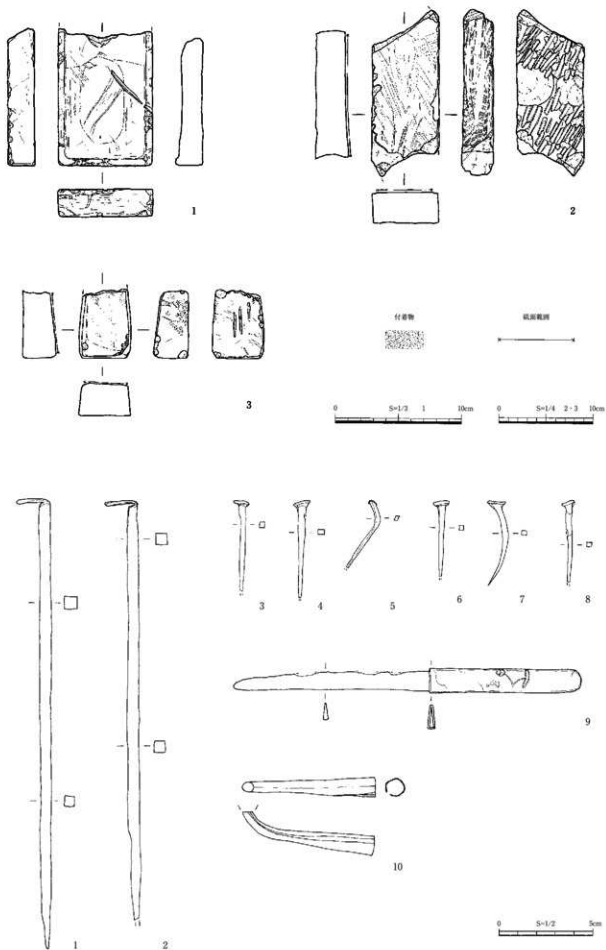
小柄 1点(9)が出土した。柄部分には、金鍍金が施されており、草花の装飾が見られる。刃部の残存長さは10.4cmである。

煙管 10は煙管の雁首部分であるが、火皿が欠損している。材質は銅とみられ、わずかに金鍍金が残存している。

銭貨 3点出土した。銭種は熙寧元宝、開元通宝、元豊通宝である。

第8表 金属製品一覧表

図 No.	ID	トレンチ	地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属 種類	備考
1	11	庫区	石所前	瓦釘	238.5	7.1	7.0	57.8	Fe	
2	14	T2	石所前	瓦釘	222.2	7.0	6.4	59.1	Fe	
3	2	T1	石所前	釘	48.2	4.5	3.1	1.3	Fe	
4	3	T1	石所前	釘	52.2	3.5	3.1	2.0	Fe	頭巻釘
5	4	T1	石所前	釘	45.7	2.2	2.2	1.4	Fe	頭巻釘 湾曲している
6	5	T1	石所前	釘	40.0	3.0	2.8	1.7	Fe	頭巻釘 頭部先端欠損
7	6	T1	石所前	釘	46.3	2.7	2.4	1.7	Fe	頭巻釘 湾曲している
8	7	T1	石所前	釘	43.8	3.3	2.3	1.1	Fe	頭巻釘 湾曲している
9	10	T3	石所前	小柄	186.3	12.7	4.2	24.1	Fe-Cu	頭巻釘が壊れているように見える
10	15	T3	裏込め土層	煙管	71.4	10.7	9.8	5.9	Cu	雁首
9	T1	表地層	豊地層	熙寧元宝	25.4	25.3	1.0	2.3	Cu	
12	T1	豊地層	豊地層	開元通宝	25.3	25.1	1.0	2.3	Cu	
13	T1	豊地層	豊地層	滓	-	-	-	47.0	Fe	
8	T1	石所前	石所前	元豊通宝	24.3	24.3	1.3	3.7	Cu	
17	T1	石所前	石所前	不明	81.2	13.0	7.2	11.9	Cu	
18	T1	石所前	石所前	不明	10.6	10.3	0.6	0.1	Cu	
1	T2	豊地層	豊地層	不明	47.7	14.5	6.8	11.7	不明	種名と共に出土
16	T3	裏込め土層	裏込め土層	釘?	78.3	2.9	2.9	2.8	Fe	瓦釘小



第25図 石器・石製品、金属製品

## 5 木製品・植物繊維製品（第26・27図、第9表）

今回の調査では、55点の木製品と1点の植物繊維製品が出土した。そのうち、完形品や用途が明瞭であるものを中心21点図化し、概要を記す。以外のもは一覧表を参照されたい。木製品は、層位から近世末～現代に廃棄されたと考えられるが、大半は製作時期は不明である。これらのうち、総堀の埋め土からの出土量は45点で、木製品全体の81.8%を占める。残りの10点は近代の建物基礎～現代造成土から出土している。

**漆器（1・2）** 1は、内面に朱漆、外面から底面にかけて黒漆が塗られている椀である。底部が厚く、口縁にもけて薄くなっていく。2は、内外面に朱漆が塗られている椀蓋である。

**曲物（3）** 3は、側板のみ残存し、両面に黒漆が塗られている。接合部に樺皮が残る。

**円板（4～7）** 曲物または桶・樽の底板と考えられるものを総称して円板とした。4・5は直径9～11cmの曲物の底板である。4は、カキソコ状を呈しているが、釘孔や樺皮綴じ孔はみられない。5は、クレゾコで樺皮綴じ孔はみられるものの、釘孔は確認できない。6は、湾曲してない方の側面に竹釘が残る、接合式の円板である。片面に墨書がみられ、もう片面には削り調整が確認できる。7は、両面に墨書がみられ、中央付近に指頭圧痕と考えられる痕跡がある。側面等に釘孔等はみられない。

**桶（8）** 結桶の側板が1枚出土した。厚さ1.1cmの湾曲した板材で、内外面に加工痕が観察される。表面に線状痕が確認できる。

**栓（9）** 9は、削り出しによって截頭円錐形状に製作された栓である。

**差歯下駄（10）** 10は、前部が欠損しており、鼻緒孔がわずかに残る。台部形状は長円形を呈し、幅が6.0cmと狭く、後歯は後歯より前にある。台裏に柄孔がみられないことから、陰卯下駄であると思われる。

**箸（11～14）** 11～13は竹製である。削り調整はほとんどみられない。断面形はいずれも長方形に近い。14は白木箸で、やや粗めに削り出されている。断面形は六角形である。

**木札（15）** 一方の端部は剣先状に削られている。片面のみに削り調整が施されている。墨書は確認できなかった。

**短冊状木製品（16～18）** 16～18は、片面あるいは両面に削り調整が施されている。16は5cm前後の間隔で3か所に木釘もしくは釘孔が観察される。

**刷毛（第27図19）** 刷毛の幅は6.8cm（2寸5分幅）あり、平面形は筋違い形である。刷毛固定部の中央付近には木釘が残存し、朱色顔料の付着が確認できる。また、柄の下半に指頭圧痕が何か所もみられるため、比較的良好に使い込まれたものと推測される。

**その他木製品（種別不明品）（20・21）** 20は、厚さ2.2cmの板材で、中央に直径2.6～2.8cmの孔が削り貫かれている。孔の内側に釘が刺さっており、孔周辺は鉄分が付着していることから、鉄製のものが孔に差し込まれていた可能性が考えられる。21は、上端から下端までの径がほぼ同じで、円柱状を呈する。両端ともに面取り加工が施されている。

**草鞋か** T1の整地土から鼻緒履物が1点出土した。取り上げに関しては、形状を保持し取り上げることが困難であったため、周辺の土ごと採取した。その後、(株)文化財ユニオンに委託し、保存処理を行った。処理手順は、①表面のクリーニング、②劣化防止などのため薬品を塗布含浸、③取り上げの際に生じた割れを接合、クラック部を擬土で補填、④擬土部分の補彩である。図化が困難であるため、写真のみ掲載をした。腐食がかなり進み、観察が困難であったため、詳細は判然としない。台部の寸法は長さ25.5cm、幅12.2cmを測る。台部の下部と側部から紐状痕跡が確認できることから、草鞋類を想定できる。また、踵部分のカエシや着装のための孔は不明である。

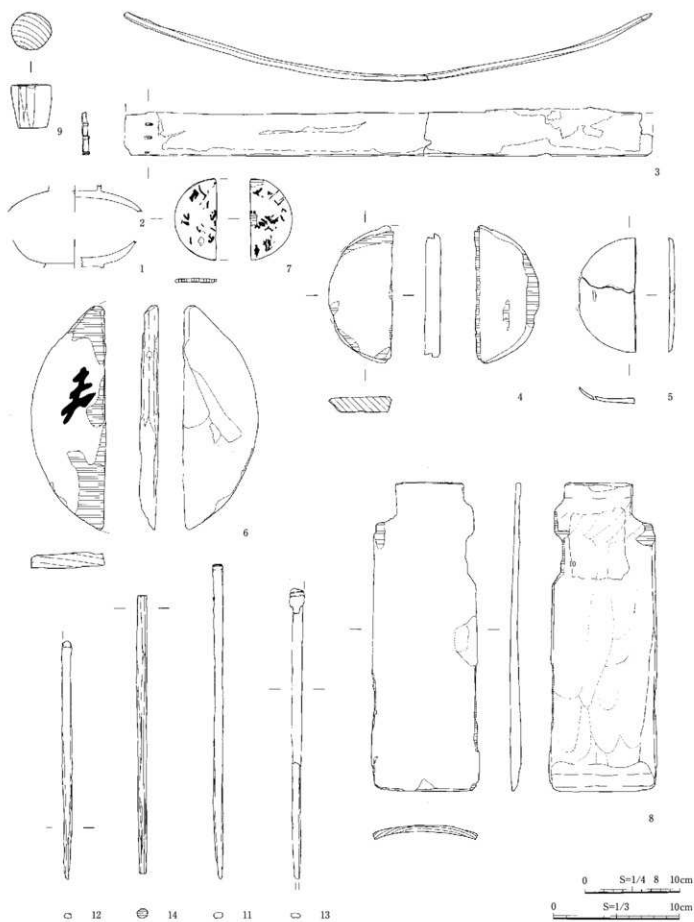
<参考文献>

江戸遺跡研究会[編] 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』

第9表 木製品・植物繊維製品観察表

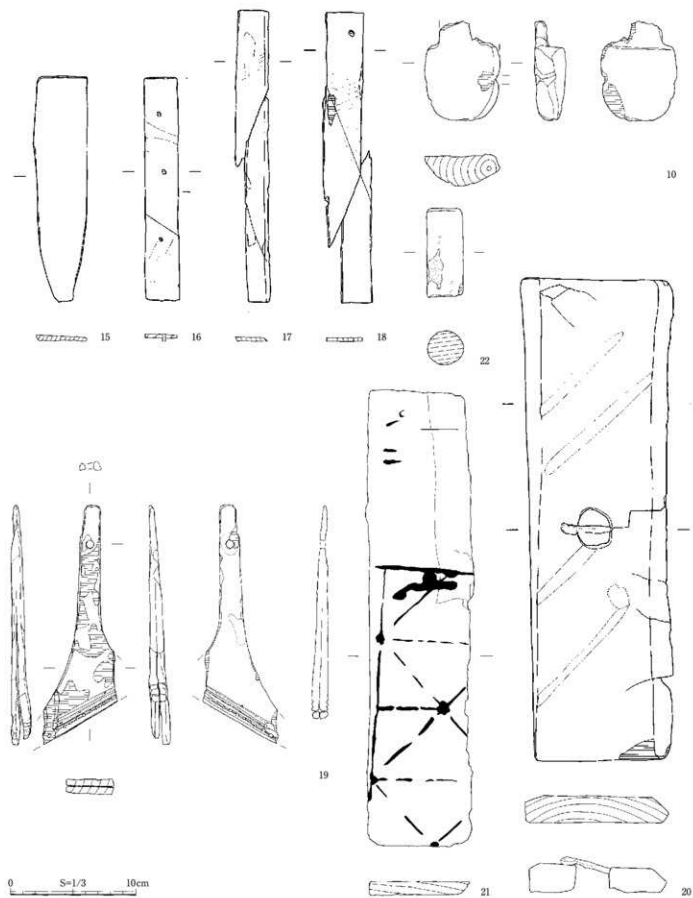
順 No.	トレンチ / 地点	発見	部種	手法	長・口幅 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	破損状況	備考	
1	18	T1	福屋土	漆桶	挽物	高台径 (46)	高 (22)	2/3欠損	内面赤漆 外面黒漆	
6	1	T1	福屋土 No.114	円板(蓋?)	板材(板目)	(17.8)	(6.0)	1.4	2/3欠損	木口に漆塗りあり
8	31	T1	福屋土	楊柳板	板材(板目)	32.7	11.5	1.1	一部欠損	木口に黒面塗り 表面に黒漆塗りあり 断面はやや曲し
9	2	T1	福屋土	栓	丸木割り出し	断面径 3.0	高 2.5	一部欠損		
10	3	T1	福屋土	漆桶下駄	板材(板目)	(8.0)	6.0	2.3	前面欠損	縦孔あり 裏なし 台座形状は長円形
11	13	T1	福屋土	箸(竹)	籠ざき	25.0	0.8	0.5	表面一部剥落	断面はほぼ正方形
12	15	T1	福屋土	箸(竹)	籠ざき	18.0	0.8	0.5	両端欠損	一部削りなし 断面はほぼ正方形
13	16	T1	福屋土	箸(竹)	籠ざき	22.0	0.8	0.3	両端欠損	3つに割れ 断面はほぼ正方形
15	7	T1	福屋土	木札	板材(板目)	18.0	4.3	0.5	欠損	下端の角を先に整形
19	9	T1	福屋土	箸(竹)	板材(板目)	(38.9)	(6.0)	1.3	一部欠損	縦毛割る前に本釘が3本残る。表面に黒漆塗りあり 縦毛割る前と表面の一部に朱色顔料付着
20	32	T1	福屋土	不明	板材(板目)	8.4	12.3	2.2	欠損	中央に孔があり釘がささる 孔部周辺は黒分付し 木端に向かつて濃縮に塗り込みあり
20	T1	福屋土	箸	棒材(割り出し)	(13.5)	0.8	0.6	本口欠損	先端削り落とし	
21	T1	福屋土	箸(竹)	籠ざき	16.60	0.9	0.8	本口剥離欠損		
22	T1	福屋土	不明	角材(板目)	3.6	3.1	2.5	欠損		
23	T1	福屋土	削りか	角材(板目)	14.0	2.4	2.3	欠損	片が10g弱くなるよう斜めにカット	
41	T1	福屋土	端材	角材(板目)	21.2	(2.6)	(1.8)	木端欠損		
42	T1	福屋土	端材?	板材(板目)	8.8	3.7	0.8			
43	T1	福屋土	不明	板材(板目)	(13.7)	(3.1)	0.8	木端欠損	木表・裏に本釘うちこまれている。木表は段がつき薄く削られる。表面黒漆	
44	T1	福屋土	箸	棒材(割り出し)	(9.8)	0.7	0.6	本口欠損		
45	T1	福屋土	漆桶?	挽物	底径 (4.0)	高 (1.5)			内面赤漆・外面黒漆 3個体に割れ。うち2個体融合	
46	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(22.5)	4.0	2.4		先端は割り出し・濃れ 加工痕あり	
47	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(14.3)	3.7	4.2		先端部のみ残 加工痕あり	
48	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(11.2)	3.9	2.4		先端部のみ残 加工痕あり 先端濃れ	
49	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(9.2)	3.7	2.5		先端部のみ残 加工痕あり 両長が直行	
50	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(13.7)	4.1	2.4		先端部のみ残 加工痕あり	
51	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(8.7)	2.6	(1.9)		先端部のみ残 加工痕あり	
52	T1	福屋土	板	角材(割り出し)	(16.4)	2.5	2.3	木端欠損	先端部のみ残 加工痕あり	
3	17	T2	聖地土	動物炭板	板材(板目)	(43.5)	(3.9)	(0.6)	木端欠損	木表・裏面黒 結合部に赤漆残る
5	12	T2	福屋土	動物炭板	板材(板目)	9.1	(4.5)	0.4	1/2欠損	クレソコ 棒状に孔あり 2つに割れ
21	33	T2	福屋土	板材	板材(板目)	36.3	(8.4)	1.2	片側欠損	木口に漆塗りあり、本口切り落とし 木端切り落とし 木表加工調整痕あり 木表削りっぱなし
53	T2	福屋土	板	丸木(芯材)	(29.8)	(7.2)	(4.2)		先端部のみ残 加工痕あり 欠陥か割れか不明	
56	T2	聖地土	円板(桶蓋?)	板材(板目)	41.8	(29.5)	1.1	1/3欠損	両面に黒漆 両面に漆塗り 中央部黒漆(コゾ)	
58	T2	聖地土	動物(筒板)	板材(板目)					縦割りのため同化不可	
4	11	T3	動物炭板	板材(板目)	11.0	(5.0)	1.1	半分欠損	カザゴ	
2	19	南区	漆桶の蓋	挽物	高台径 (4.2)	高 (2.0)		1/2欠損	両面赤漆	
14	14	南区	箸	棒材(割り出し)	22.1	0.8	0.7	欠損	断面部は赤面凹削	
40	桜山面	東	箸?	棒材(割り出し)	(6.2)	0.8	0.6		本口1つ切りあり(欠陥ではない)	
7	8	桜山面	北東隅	円板	板材(板目)	6.5	(3.3)	0.3	1/2欠損	両面とも黒漆塗りあり 片面中央に黒漆塗り痕あり
16	24	桜山面	東	短冊状木製品	板材(板目)	37.8	2.6	0.3	欠損	本釘之本・釘孔1か所あり
17	25	桜山面	東	短冊状木製品	板材(板目)	22.2	2.6	0.3	木端一部欠損	2つに切り取りきている
18	28	桜山面	東	短冊状木製品	板材(板目)	22.1	(3.8)	0.3	木端一部欠損	1つで割れる
24	桜山面	東	短冊状木製品	板材(板目)	14.3	4.0	0.4		端に孔あり	
54	桜山面	北東隅	短冊状木製品	板材(板目)	25.0	(10.0)	0.3	木端片側欠損		
27	桜山面	東	棒状木製品	丸木(芯材)	(22.8)	0.8	0.8		断面が丸る	
39	桜山面	東	端材(建築材?)	板材(板目)	(15.1)	(5.2)	1.9			
30	桜山面	東	端材	板材(板目)	2.0	(0.6)	0.9	木端欠損	木表に刃物による加工痕多数あり	
34	桜山面	東	端材	板材(板目)	3.8	(0.6)	0.9	木端欠損	木表面削り	
35	桜山面	東	端材	板材(板目)	(6.2)	2.2	1.1	本口一部欠損	全面削りっぱなし 本口切り直し	
36	桜山面	東	端材	板材(板目)	30.1	(2.6)	1.8	一部欠損	木表に黒の切り込み刃物による複数の歯	
37	桜山面	東	削りくず	板材(端材)	6.9	4.3	(1.2)	本口と木表の一部欠損	片面削りで切り割り 木表一部黒漆(コゾ)	
22	10	桜山面	東	不明	丸木割り出し	径27	2.9	高 7.1	欠損	断面が一部残る 表面に黒漆塗りあり 上下端に面取り加工
29	桜山面	東	不明	棒材(割り出し)	(16.3)	0.4	0.4	本口両方欠損	両り加工(黒い)あり 表面に赤漆? 断面部は多角形	
28	桜山面	東	不明	棒材(板目)	(14.0)	2.9	0.8	本口欠損	全面削りっぱなし 木表に刃物痕あり	
55	桜山面	北東隅	不明	板材(板目)	9.3	(1.4)	0.4	木端片側欠損	赤面黒面で見られている	
57	桜山面	東	不明	角材(板目)	15.2	(11.2)	3.5		全体部に黒熱強い	
39	T1	聖地土	鼻緒履物		内筒長さ 25.5	台座幅 12.2	0.8		断面小	

※( )内数値は残存部を表す



第26図 木製品 (1)





第27図 木製品 (2)

## 6 松本城大手門枳形跡出土骨の同定

パリオ・サーヴェイ株式会社

### (1) はじめに

松本城は、安土桃山時代末期～江戸時代初期の建造とされており、天守が現存する城跡である。今回の発掘調査が行われた大手門枳形跡では近代と考えられる堀埋土が確認され、その埋土中からは骨が出土している。

本報告では、これらの出土骨の種類について明らかとし、当時の動物利用に関する情報を得ることを目的として、骨同定を実施した。

### (2) 試料

大手門枳形跡のT1-1～4、T2-2、T2-2(拡)、T3北端より出土した骨13試料で、それぞれ試料IDが付されている(ID1-1～13)。大半の試料は1試料1点であるが、ID4.7.11は複数の試料が認められる。

出土骨は、多くが近代の堀埋土からの出土とされるが、近世整地層あるいは掘乱層等から出土した骨もある。試料の詳細は、結果とともに第10表に示す。

### (3) 分析方法

試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。また、一部の骨については一般工作用接着剤で復元を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。なお、骨格各部の名称については、ニホンジカを例として第28図に示した。

### (4) 結果

骨13試料からは、腹足綱1種類(マルタニシ)、爬虫綱1種類(イシガメ)、鳥類1種類(ニワトリ)、哺乳綱5種類(ネコ、イヌ、ウマ、イノシシ属、ニホンジカ)が確認される(第10表)。同定結果を第11表に示す。以下、種類毎に結果を記す。

#### ・マルタニシ

ID1-13で検出される。破片となるが螺塔の一部が残る。

#### ・イシガメ

ID1-7で左中腹骨板が検出される。ほぼ完存する。

#### ・ニワトリ

ID1-7で頭蓋と右上腕骨が検出される。頭蓋は、いわゆる嘴部が欠損し、頭頂骨～後頭骨部が復元したものの破損した状態であった。また、前頭骨には、解体に伴うと思われるカットマークが認められる。右上腕骨は、遠位端が欠損する。近位端側にカットマークがみられ、また一部切断される。

#### ・ネコ

ID1-11で左橈骨と左脛骨が検出される。いずれもほぼ完存する。左橈骨は、全長83.19mm、近位端幅6.32mm、遠位端幅10.34mmを測る。左脛骨は、全長99.90mm、近位端幅16.10mm、近位端矢状径15.47mm、骨体中央横径6.48mm、骨体中央矢状径5.64mm、遠位端幅12.53mm、遠位端矢状径7.95mmを測る。

第10表. 検出動物分類群の一覧

軟体動物門	Phylum Mollusca
腹足綱	Class Gastropoda
前縁蓋綱	Subclass Prosobranchia
中腹足目	Order Mesogastropoda
タニシ科	Family Viviparidae
マルタニシ	<i>Cipangosepulonia chinensis laeta</i>
脊椎動物門	Phylum Vertebrata
両生綱	Class Reptilia
カメ目	Order Testudines
イシガメ科	Family Geomydidae
イシガメ	<i>Manis japonica</i>
鳥綱	Class Aves
キジ目	Order Galliformes
キジ科	Family Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus gallus var. domesticus</i>
哺乳綱	Class Mammalia
ネコ目(食肉目)	Order Carnivora
ネコ亜目	Suborder Fissipedia
ネコ科	Family Felidae
ネコ	<i>Felis catus</i>
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ウマ目(奇蹄目)	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ属	Genus <i>Sus</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

・イヌ

ID1-4に左第3中足骨・左第4中足骨、ID1-6に腰椎、ID1-7に肋骨、ID1-8に肋骨・右大腿骨が認められた。保存状態は非常によく、ID1-7を除きほぼ完存する。左第3中足骨は全長70.39mm、左第4中足骨は72.00mmを測る。また腰椎は、椎体長27.03mm、椎体径20.46mmを測る。右大腿骨は両端が未化骨で外れる。

・ウマ

ID1-2でほぼ完存する基節骨（後肢）が検出される。全長69.25mmを測る。

・イノシシ属

イノシシ属はブタの可能性があるが、イノシシとの区別が不可能であったため、イノシシ属にとどめている。ID1-7に右肋骨、ID1-9に左肩甲骨、ID1-12に右橈骨が核にされる。左肩甲骨は、頸部最小幅34.54mm、頸部厚14.92mm、下部幅40.31mm、関節窩長31.34mm、関節窩幅27.82mmを測る。関節窩付近において、やや幅広の傷跡が多数みられる。右橈骨は、近位端のみが残存し、近位端幅28.59mmを測る。また、骨体にはカットマークがみられる。

・ニホンジカ

ID1-1に左下顎骨、ID1-3に右上腕骨、ID1-5に右肋骨、ID1-10に左寛骨が検出される。左下顎骨は破片であり、第3臼歯が植立し、下顎枝部が切断される。右上腕骨は、遠位端が残る。ID1-10の左寛骨は、ほぼ完存する。



第28図. ニホンジカの骨格(八谷・大塚, 1994を改変)

・獣類

ID1-7で部位不明破片が検出される。

(5) 考察

検出された種類の中でマルタニシは、北海道南部～九州・沖縄諸島に分布し、田や沼に最も普通にみられるとされることから（奥谷編著,2004など）、堀内などに生育していた可能性もある。また、食用としての利用も可能である。

イシガメは、河川・湖沼・池・湿原・水田等に生息しやや流れのある流水域を好むとされる。このことから、堀内に棲息していた可能性がある。本資料は、部分的な検出であり解体痕も認められなかったため、利用状況については不明である。

哺乳綱では、ネコ、イヌ、ウマ、イノシシ属、ニホンジカが検出される。ネコは、ほぼ完存する左橈骨と左脛骨が見られる程度である。同一の試料内に検出されることから、同一個体由来するとみられるが、検出数が少ないため詳細不明である。イヌは、重複する部位がないものの、出土位置がT3北端、T1-3、T14と異なっているため、同一個体由来する資料であるかは不明である。ウマは、後肢基節骨が検出される。

一方、ニワトリ、イノシシ属、ニホンジカは、遺構内に廃棄された食料残渣と考えられる。ニワトリでは、頭蓋と右上腕骨にカットマークがみられ、右上腕骨近位端部には切断された痕跡もみられる。イノシシ属は右橈骨にカットマークが認められる。イノシシ属の右橈骨遠位端側、ニホンジカは右上腕骨の近位端側に認められる割れ口は、丸みを帯びることから当時の痕跡と考えられる。また、ニホンジカの左下顎は下顎支部を欠損するが、比較的直線的な状態であることから、当時の切断による可能性がある。

これらの痕跡は、解体時あるいは調理時につけられた痕跡とみられる。ニホンジカは、検出される骨の大きさからみて、いずれも成獣であったと考えられ、後背山地で狩猟されていたとみられる。左下顎骨が検出される点を考慮すると、狩猟地で解体されたものでなく、消費地で解体されたことも考えられる。イノシシ属は、左肩甲骨が成獣、右橈骨が幼獣～亜成獣程度と推定され、山野での狩猟も考えられるが、ブタであるならば飼育されていた可能性もある。

#### <引用文献>

奥谷喬司編著 2004 改訂新版 世界文化生物大図鑑 貝類株式会社世界文化社,399p.

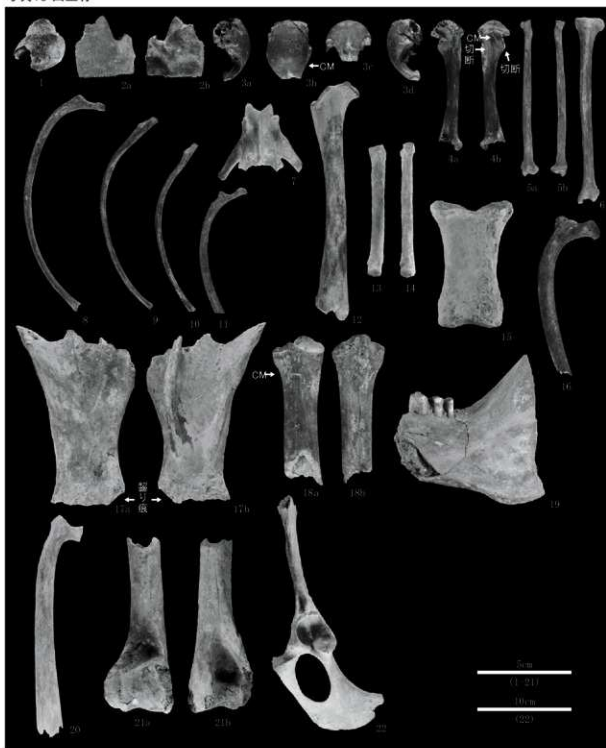
八谷 昇・大薬司 紀之 1994 骨格標本作製法北海道大学図書刊行会,129p.

表11表 骨同定結果

試料ID	出土地点	層位	記載事項	種類	部位	左右	状態等	数量	CM	計測値	備考
1-1	T1-1	(後)馬場後整地土	No.215	ニホンジカ	下部骨	左	破片	1			M3直立下頸枝部切断
1-2	T1-1	近世整地土	No.202	ウマ	基節骨(後股)		ほぼ完存	1		全長69.25	
1-3	T1-2	整地土→カク乱	石垣背面	ニホンジカ	上腕骨	右	遠位端	1			遠位端破損
1-4	T3北端	近世?根固内	石垣(築石)前	イヌ	第3中足骨	左	ほぼ完存	1		全長70.39	
1-5	T1-4	近代・埋理土	No.12	ニホンジカ	肋骨	右	破片	1		全長72.00	
1-6	T1-3	近代・埋理土	No.13	イヌ	腰椎		ほぼ完存	1		椎体長27.03 椎体径20.46	
1-7	T1-4	近代・埋理土	暗オリーブ褐色土層	イシガメ	中腕骨板	左	ほぼ完存	1			
				ニワトリ	頭蓋		破損	1	○		
				イヌ	上腕骨	右	遠位端欠	1	○		切断
				イノシシ属	肋骨	右	破片	1			
				獣類	不明		破片	1			
1-8	T1-3	近代・埋理土	石垣前・瓦面①	イヌ	肋骨		ほぼ完存	3			
			暗オリーブ褐色層		大腿骨	右	ほぼ完存	1			両端未化石外丸
1-9	T1-4	近代・埋理土	暗オリーブ色シルト層	イノシシ属	肩甲骨	左	破片	1		頭部最々幅34.54 頭部厚14.92 下部幅40.31 四節高長31.34 四節高幅27.82	鑿り痕有
1-10	T22(北)	近代・埋理土	No.88	ニホンジカ	寛骨	左	ほぼ完存	1			
					肋骨	左	ほぼ完存	1		全長83.19 近位端幅6.32 遠位端幅10.34	
1-11	T22(北)	近代・埋理土	暗オリーブ灰色層	ネコ	脛骨	左	ほぼ完存	1		全長99.90 近位端幅16.10 近位端矢状径15.47 骨体中央矢状径6.48 骨体中央矢状径 5.64 遠位端幅12.53 遠位端矢状径7.95	
1-12	T22	近代・埋理土	暗オリーブシルト層	イノシシ属	肋骨	右	近位端	1	○	近位端幅28.59	
1-13	T1-3	近代・埋理土	北野際 石垣1段目~2段目 ブロック多量粘土質土 礫面直上	マルタニシ	股		破片	1			

M3: 第3段白濁

写真19 出土骨



1. マルタニシ 殻 (ID1-13)
4. ニワトリ 右上腕骨 (ID1-7)
7. イヌ 腰椎 (ID1-6)
10. イヌ 肋骨 (ID1-8)
13. イヌ 左第3中足骨 (ID1-4)
16. イノシシ属 右肋骨 (ID1-7)
19. ニホンジカ 左下顎骨 (ID1-1)
22. ニホンジカ 左寛骨 (ID1-10)

2. イシガメ 左中腹骨板 (ID1-7)
5. ネコ 左桡骨 (ID1-11)
8. イヌ 肋骨 (ID1-8)
11. イヌ 肋骨 (ID1-7)
14. イヌ 左第4中足骨 (ID1-4)
17. イノシシ属 左肩甲骨 (ID1-9)
20. ニホンジカ 右肋骨 (ID1-5)

3. ニワトリ 頭蓋 (ID1-7)
6. ネコ 左脛骨 (ID1-11)
9. イヌ 肋骨 (ID1-8)
12. イヌ 右大腿骨 (ID1-8)
15. ウマ 基節骨(後肢) (ID1-2)
18. イノシシ属 右桡骨 (ID1-12)
21. ニホンジカ 右上腕骨 (ID1-3)

## 第IV章 調査のまとめ

### 第1節 調査成果の総括

今回、松本城大手門枡形跡として、初めて発掘調査を実施した。松本城の重要な施設である大手門枡形遺構と総堀の残存状況や構造を明らかにするため、保存を前提とした発掘調査を実施した。ここでは発掘調査によって得られた情報を整理し、明らかになった事柄についてあらためて総括する。

#### 1 大手門枡形跡の遺構について

- (1) 南北19mにわたって発見された石垣は、絵図等の資料と照合すると、大手門枡形跡の東縁の石垣列と考えられる。
- (2) 石垣西側に確認された石列は、枡形跡を区画する土塀の内側の石列と考えられる。ただし、石列の裏込め内からは18世紀代の陶器が出土しているため、18世紀代以降に改修された可能性が考えられる。
- (3) 石垣東側の落ち込みは、総堀の掘り方と考えられる。
- (4) 石垣と石列の残存部分の間隔は、5.5mを測る。約3間幅で、絵図から推測すると、この上部に土塀があったと考えられる。
- (5) 石垣前で確認された瓦・建築材の包含層と割り石層は、明治4年頃に行われた大手門の破却の際に、投棄されたものと考えられる。
- (6) 石垣の構造については、次のように考えられる。
  - ① 胴木の上に根石を置き、その下部は根固め用のグリ石（円礫）で充填している。
  - ② 根石の上には築石を積み、築石の石間には破碎された礫を用いた間詰石が入れられていた。
  - ③ 築石の背面には、破碎礫を用いた裏込めが詰められていた。
- (7) 石垣前には、地盤を強固にするためとみられる捨て杭が打たれていた。
- (8) 石垣は、間詰石を伴う野面積の手法で積まれていたため、古い様相がみられる。
- (9) 石垣を構築する築石や間詰石の石材は、珒岩（閃緑斑岩）系が主体で、天守や太鼓門の石材とも類似している。また裏込石として用いられた礫は、安山岩・緑色凝灰岩・珒岩などがみられ、こうした石材は付近を流れる女鳥羽川や薄川に多くみられるものである。

#### 2 出土遺物について

- (1) 今回の調査で最も多量に出土した瓦は、藩主・水野氏と戸田氏の家紋の入った軒丸瓦が確認されており、ある程度の時間幅が考えられる。これにより、瓦を葺き直すような修理が複数回行われてきた可能性が考えられる。
- (2) 出土した瓦は、瓦当面に残る文様と、内面に残る叩き調整痕、側縁・側面の形状などの特徴で、丸瓦は5種類、軒平瓦は3種類に分類される。
- (3) 石列の裏込めから出土した陶器は18世紀後半のものである。このため、18世紀後半以降に枡形内側の石列が修理された可能性が考えられる。



第29図 絵図にみる調査位置(推定)  
享保十三年秋改松本城下絵図(郭内部分・松本城管理事務所蔵)



## 第2節 大手門枳形の破却について

今回の調査では、石垣際の総堀内に破却の様子が窺える遺物出土状況が観察された。明治維新後、どのように大手門枳形が破却され、総堀が埋められていったのかについて、概略を記したい。

### (1) 破却前の俯瞰図

「松本城見取図」には、天守・太鼓門などのほか、大手門枳形の様子が描かれており、明治維新直後の様子が窺える。

### (2) 大手門の破却

松本藩士樋口充造の明治5年(1872)正月元旦の日記には「一 旧冬御城櫓、南御門、東御門、北御門、太鼓門等取り払い入札にて取り毀ち相いなりそうろうて、・・・」とあり、明治4年12月には「南御門」すなわち「大手門」は破却されたことがわかる(文献1)。

### (3) 門台の破却と千歳橋・緑橋の架設

明治6年(1873)には、博覧会が開催されるが、「筑摩県博覧会錦絵」をみると、門が破却された大手門の門台が描かれている。この時、女鳥羽川にかかる大手橋は、木製の橋である。

大手門台の石垣は、大手橋が石橋へ架け替えられるために石垣が転用され、破却された。その様子は、「信府統記追捕」(大岩昌藏)に次のように記載されている。

「明治9年12月女鳥羽川石橋なる。命じて千歳橋という 同月廿四日渡り初の式を行ふ

此橋は旧城追手前より南深志に通ずる往来にして、古へより板橋なりしを、今度大手橋跡升形の石垣を崩し其石を用ひ架設せしものにて、是吾が信濃に石橋を造れる魁にして、実には不朽の事業千歳の橋名空しからず、蓋し、大手橋を千歳橋と改めとなえしは是より前一年にあり」

千歳橋の架設は明治9年9月に着手し、12月に竣工した。設計監督は南深志戸長の河野百壽(このひゃくす)、石工は久保田兼太郎であった。橋には大手門の門台石垣が利用されるとともに、橋の手すりの欄干には諏訪の鉄平石が用いられた。この橋は、東京神田の万世橋の規模にならったため、橋の名もこれにならない、千歳橋とした。

明治11年11月には、大手門の門台石垣を使用し、緑橋(旧名:袖留橋)が架設された。

「南深志一番町・二番町の境なる長沢川へ石橋架設 12年1月なる。名付けて緑橋という。」



写真20 「筑摩県博覧会錦絵」明治6年 (松本市立博物館所蔵)

#### (4) 神道本社設立と南総堀の埋め立て

明治7年(1874)2月、大教院神道事務局の松本分院が宮村町長松院跡に開設された。明治11年、現・四柱神社の場所に移され、本殿・事務局が新築された。この時に、総堀の一部が埋め立てられた。

「神道中教院は南深志七番丁に在りしを、明治8年大教院廃止せられしの際、神道事務局と改称なし、同十一年十月三日旧松本城道手枡形より東縄手堀北岸土手とも(敷地反別九反式拾歩一厘六毛、招魂社地反別壹反九畝十六歩)に払下げ許可成る、同年十一月濼水を落し埋立に着手す、土方人足ハ諸講中各村等の寄付する所なり、十二年五月埋め立て成る、同月十五日地祭を行ひ兩日(十五・十六)角力を興行す、同十三年六月宮殿並事務局普請落成、同月十七日棟上式を行ふ。」

(明治11年10月3日東縄手堀北岸土壘ともに払下げの許可が下り、11月より埋め立てを始め、明治12年(1879)5月に埋め立てが終了した。5月15日には地鎮祭を行い、明治13年6月宮殿と事務局が落成し、同月17日棟上式が行われた。)

現在も残る四柱神社は、明治12年に神道事務局に隣接して創建された。

#### (5) 御幸橋の架設

「明治十三年六月神道本社前に石橋を架設する。初めて駕輿を渡し奉るにより、名付けて行幸橋(みゆきばし)といふ。六月廿四日松本へ明治天皇巡幸あり。」

明治13年6月24日、明治天皇の行幸で、行在所(新築された神道事務局)に向かうため、行幸橋(みゆきばし、現在は御幸橋の字をあてる)を渡り初めた。千歳橋と同様に、大手門の門台石垣が利用された。設計は河野百壽、橋の両側に刻まれる御幸橋の文字は、ときの裁判所長・判事であった脇屋菊外の筆によるものである。



写真21 明治13年6月 御巡幸松本御通図 (松本市立博物館所蔵)

#### (6) 明治13年以降の大手門枡形跡

大手門枡形跡付近には、西側に警察署が設置され、南総堀西側は埋め立てられ本願寺別院の敷地の一部になっている。大手門枡形の東側の南総堀は、僅かに南側に堀の一部が残されるまでに埋められ、神道事務局などが造られていた。六九の北側の旧・預所役所は郡役所となり、通りの南側東端には郵便局(電信局)があった。

明治期から大正期にかけての大手門枡形跡付近は、縄手東の市役所とあわせ、郵便・消防・警察・測候が集まる行政の中核の場所となった。



写真22 明治42年(1909)頃の千歳橋(大手門門台石垣が転用された石橋)を写した絵葉書。右側木の奥の建物は松本郵便局(明治22年施工)、橋の奥には開智学校が見える。両建物ともに立石清重の設計・施工である。(文献2)



写真23 明治43年頃の御幸橋を写した絵葉書。大手門の門台石垣が利用された。(文献2)



写真24 大正時代末から昭和初期頃の大手門桁形跡(調査地付近)火の見櫓の奥に、まだ総堀の一部が埋められずに残っている。右側は縄手通り。(文献2)

### 第3節 災害等による修理と瓦

今回の発掘調査において、松本城主の水野氏や戸田氏の家紋や巴紋が入る軒丸瓦をはじめ、多くの瓦類が出土した。出土遺物の項でも記載した通り、これらには同紋であっても複数の范型が存在することや、丸瓦四面や瓦当面周辺の調整方法が異なるなどの特徴が見られる。これらの特徴が生じる背景としては、複数回にわたり門の普請事業が行われてきたことが考えられる。こうした普請を行う原因としては、①政治的な意図、②老朽化による修復、③災害などの外的要因による補修など、様々な原因が考えられる。

このうち、明らかな政治的意図をもつ普請としては、松平直政（寛永10年・1633～寛永15年・1638）による整備事業がそれにあたる。松平直政の従兄弟である將軍徳川家光が、上洛の帰路に松本城へ立寄るとの連絡があったため、「此時天守並に門々修復アリ 本城ノ東ヶ輪渡り櫓ハ此時出来タリト言ヒ伝ヘリ」と『信府統記』では記している（文献3）。この時、辰巳付櫓と月見櫓が造られたと言われている。

信府統記の記述をみると「門々修復アリ」とあるので、天守だけではなく大手門も修復された可能性は十分考えられる。

しかし、城普請についての記録のほとんどが断片的であるため、老朽化や政治的背景に係わらず、直接大手門の修理につながる記録はほとんど残されていない。

そこで、③の災害などの外的要因、つまり地震や火事などの被災の記録を取り上げ、修復について推察してみたい。以下、本稿では可能な限り、江戸時代における松本城下での災害記録と発掘調査地である大手門付近での普請記録を集成し、災害修復と瓦の葺き替えとの関連について考察を試みる。

#### 1 大手門に関連する災害記録（第12表）

##### (1) 地震による被害

文書に残る地震の記録では、江戸時代に大小含め13度の地震が松本城下を襲ったとある。しかし、被災記録がほとんどなく、詳細な状況は不明である。したがって、大手門についての震災状況を記した記録についても見つからない。しかしながら、宝永4年（1707）、弘化4年（1847）・嘉永7年（1854）・安政元年（1855）に発生した地震は、特に大地震と呼ばれるもので、松本城にも大きな被害が出たと思われる。この時の記録は、柳沢吉保の公用日記『楽只堂年録』、松代藩月番家老・河原綱徳の記した『むしくら日記』に見ることができる。

江戸時代、城普請を行う際には、たとえ災害などが原因であっても、その修復箇所と内容を記した絵図を幕府に届け出を行い、許可をとる必要があった。柳沢吉保の公用日記『楽只堂年録』は、そうした届出の記録から作成されたものである。『むしくら日記』によれば、松本城下にも大きな被害が出たため、松代藩の使節が松本に派遣され、被害状況の調査を実施したとある。

##### ア 水野氏時代の地震記録

宝永4年に発生した地震は、東海以西および日本海沿岸、信濃地域など広範囲に大きな被害をもたらした。これにより、松本城下では櫓や塀、門などが破損し、藩は幕府に補修の許可を届け出ている（『楽只堂年録』）。被災場所や補修箇所の詳細については不明だが、規模の大きさから、この時大手門付近にも甚大な被害が生じたと思われる。

一方で昭和8年（1933）刊行の『松本市史 上巻』は以下のように記している。「宝永四年十月四日晝八時地震古来始めての強震と云ふ。中町飯田町博勢町人家損害を蒙る、川北は左程にも無し、翌月迄小震續く。」

これによると、被害があったのは町人町の人家で、女鳥羽川以北への影響は少なかったと記され、上述の記録と異なる。この記述からすれば大手門に関する修復工事が行われた可能性は極めて低いが、引用元が明

らかでないため、参考程度に留めておく。

また、この地震によって各藩から被害報告と城内の補修の届出が幕府へ相次ぎ、松代藩、諏訪藩が石垣などの補修を幕府へ願ったとある（『楽只堂年録』ほか）。この状況からすると、松本藩も同程度の被害を受け、城内の補修が行われたことも十分考えられる。

今回の調査では、水野氏家紋「立沢瀉文」の記された軒丸瓦が多数出土した。宝永4年の地震に起因する門の修復の可能性も考えられるが、現時点では判然としない。

#### イ 戸田氏時代の地震記録

戸田氏が松本藩主の頃の享保11～明治4年（1726-1871）に発生した大地震の被害記録は2点ある。まず、弘化4年の善光寺平を震源とした善光寺地震があげられる。この地震については、松代藩による調査記録が残っている。

松本候御知らせ左のごとし

丹波守様御領分信州筑摩郡・安曇郡、去ル三月廿四日夜四時此地震強、其後折々震有之、破損所等有之、左之通、

- 一 御城内要害之外、所々屋根損壁瓦損
- 一 侍屋敷並土蔵所々墜落
- 一 城下町潰土蔵ニヶ所（以下略）

（『信濃史料叢書第9巻』むしくら日記P351）

また、安政元年に起きた大地震による城内への被害について松代藩は以下のように記している。しかし、この記述は引用の文献以外では確認できず、また諸文献によって地震発生日が異なっている。おそらくは前年の嘉永7年から安政元年にかけて立て続けに日本各地で大地震が多発したことや、それに伴い改元が行われたことに加え、その安政年号の始点を、遡る嘉永7年の1月1日からとする解釈も行われたため、記録の混乱が生じたと考えられる。

当四日朝五時半頃、松本御城下大地震、其上大火之由、内穿鑿被二仰渡一左ニ申上候。

- 一 御城内二之丸石垣二十間程大崩、御櫓ニヶ所大破、御家中十七八ヶ所程も潰、其外大潰も御座候得共、駈と不二相分一、取調中之由、御家中死失・怪我無二御座一由。（以下略）

（『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』P1191）

上記によれば、城内外の石垣、屋根、壁が大きく崩れ、櫓、武家屋敷、土蔵などが半壊あるいは全壊したとあり、規模の大きさからみても大手門にも同様に何らかの損害が及んだと考えられる。この震災を受けて藩が行った普請と考えられるものに、弘化4年の「角櫓普請」、安政2年（1855）の「古山地普請」、同3年（1856）の「御殿向き所々普請・辰巳御殿普請・古山地普請」があるが、「角櫓」（隅櫓）の位置や工事の詳細は不明である。このように、記録の上では城内の北側の普請が多くみられ、大手門付近の被災の程度は明らかではない。したがって、これらの地震による普請と今回の大手門から出土した戸田家家紋「離れ六つ星文」の入る丸瓦やそれに属する瓦類との相関性を明示することは難しいが、今後城内で出土する瓦と、城内に影響した地震災害との関わりを考察する上での一例にはなり得る。

## (2) 火災による被害

火災は、密集した人家を形成する城下において頻繁に発生し、延焼が広域にわたるものが多く、安永5年(1776)、享和3年(1803)、慶応元年(1865)の大火では、松本城下の家屋1000軒以上を焼失する大きな被害が出た。以下、大手門に係わりが考えられる火災記録をあげていく。

享保12年(1727)に本丸御殿が焼失したが、この時は門櫓や二の丸、三の丸などには被害はなかったとしている(文献5)。

安永5年(1776)12月の火災については、『東筑摩郡松本市・塩尻市誌』によると「松本城内も火にかこまれたが、土蔵4ヶ所、外囲いの櫓9ヶ所、大手門屋根・東門屋根を少々焼き、(中略)結局城内は八丁四面が焼失し・・・(以下略)」とある。この火災によって、城内の土蔵、総堀を囲う櫓、そして大手門・東門の屋根が焼け、延焼規模は城域のおよそ半面以上に至ったことがわかる。

また、昭和8年刊行の『松本市史』の記述によると、「大手門・東門既に危き所漸く防ぎ止む。」とあり、城門を焼いた被害は相当であったことがうかがえる。そしてこの翌年、当時の松本藩主である戸田氏が新御殿や石垣などの修復工事に加え「南門並櫓普請」を行なった記録が残っていることから、この大火を原因として即普請を必要とする被害を受けたことがわかる。この大火が起きたのは12月であるから、松本藩は、翌年にすぐさま補修に取り掛かれるよう発生後ただちに幕府へ普請を願ひ出たことがうかがえる。

この火災記録から、大手門にかなりの被害が生じ、瓦を載せる修理が生じたことが考えられる。したがって、今回の調査で出土した戸田家家紋の入る瓦については、安永5年の火災を受けての修復事業に伴って葺かれた可能性が高いと考えられる。

このほか、大手門に直接関わるものではないが、水野期の火災に関する興味深い記録がある。明暦2年(1656)、火災により当時大手橋西の女鳥羽川南岸にあった極楽寺が焼失した。その頃の藩主であった水野忠職は、記録によると、当時北馬場にあった瓦屋が手狭となったため、水汲へ職人を移して天守の瓦や鯨を新たに作り、取り替えるという大普請を行っている。元来、鯨などの鰻尾飾りは、火除けのまじないを意味する。魚が水面から飛び上がり尾を水面上に出した姿をし、屋根上面を水面、そしてその水面下に建物があるので燃えないと考えられていた。また、一説には、鯨が口から水を吐き出し火を止めるためともいわれる。

これらが相互関係にあるとすれば、おそらく忠職はこの極楽寺の大火事を受け、より良い瓦を大量に生産し、より良い精度の鯨を天守へ葺き、防火対策をとったことが想像できる。水野氏の家紋の入った瓦については、これらの記録との関連が十分に考えられる。水野氏時代の生産の様相については今後の課題となる。

## (3) その他の修理記録

地震・火災記録でこれまで述べたほかに、大手門付近における災害修復作業の事例は、慶応元年(1865)の水害で埋没した南総堀の浚渫が確認されている。

また、大手門に関しての明確な普請記録については、宝暦14年(1764)の「大手櫓普請」をはじめ文化13年(1816)の「南門修復」、そして国立公文書館の有する『信濃国松本城絵図慶応三年 松平丹波守』にみえる大手門石垣と土塁の修理に至る計7度の記録が確認されているが、そのほとんどの史料において、修復の箇所や内容について明らかでない。城普請事業は幕府の命や許可のもとで行われていたため、冒頭で述べたように普請理由は天災を受けての修復はか新しい施設の増築、時代を経るにつれ生じる傷みや歪みの修繕など、原因や規模も様々でありその回数も多い。その中でも特に災禍が頻発したために、多くの藩が補修のための城普請を幕府へ願ひ出していたとされ、松本藩も被災による再普請を幾度となく行なったと思われる。

## 2 まとめ

以上、大手門に関する地震や火災の事例記録をあげて今回の大手門跡出土瓦との関係を述べてきたが、参考とする諸史料について、災害の復旧事業に関する詳細記録が少ないことや、記載内容に相違のある箇所、不明瞭なものがみられた。しかしながら、火災の発生後における事業については、諸書の文献が良く合致し、大手門での瓦の葺き替え作業との関係が大いに推察しうる成果を得たといえる。

今回の発掘調査で出土した瓦について、その成形技法が様々であり、同紋を有する同瓦においてもその内部の調整法はいくつかに分類される。各地の瓦師がそれぞれ成形を行ったことによる工法の差、あるいは生産時期と並行するもの、あるいは複合的な理由によるものなのかは明らかでないが、瓦を大量に生産する原因の1つには災害による普請が大きく作用しているといえる。そして、当時の瓦生産について、その生産体制、原材料の粘土の採取地、また被災によって破損した瓦の廃棄なども、今後検討していく必要がある。



写真25 参考資料:明治45年の火災の被害を伝える絵葉書  
片端付近の様子(文献2)

### <参考・引用文献>

- 1 青木教司 2011 「資料 松本城大手門枱形の歴史的変遷」 松本城管理事務所
- 2 窪田雅之監修 2009 「信州松本絵葉書集成」 書肆 秋櫻舎
- 3 松本市史編さん室 1995 「松本市史」 第二巻歴史編Ⅱ近世 松本市
- 4 郷土資料編纂会 1968 「東筑摩郡 松本市 塩尻市 誌」 第二巻下
- 5 長野県史刊行会 1974 「長野県史」 近世史料編 第5巻(三)

第12表 災害と普請の記録

年(西暦)	災害	普請記録			城主
		槽	門	その他普請	
明暦2年 (1656)	[火災] 極楽寺焼失				水野忠職
宝永4年 (1707)	[地震] 槽、塀、門破損	記録あり	記録あり		水野忠直
宝暦14年 (1764)		大手槽普請	黒門普請		戸田光和
明和7年 (1770)		大手槽普請		古山地屋根普請	*
安永5年 (1776)	[火災] 土蔵・槽・大手門、 東門屋根被災				戸田光悌
安永6年 (1777)			南門並槽普請	新御殿修復、古山地普請、花畑修復	*
寛政3年 (1791)	[地震]本丸高塀30間倒壊、 土蔵壁破損			囲普請	戸田光行
寛政4年 (1792)			大手普請	古山地井戸普請、太鼓門石垣普請	*
享和3年 (1803)	[火災] 家中屋敷など、 2027軒余焼失				戸田光年
文化元年 (1804)			南門西不明門 普請	新御殿所々普請、花畑囲普請、裏 御門脇高塀、花畑高塀御涼所	*
文化13年 (1816)			太鼓門修復 南門修復	古山地普請	*
弘化4年 (1847)	[地震] 城内の屋根壁瓦損壊、武家 屋敷・土蔵壁崩落	隅槽普請			戸田光則
嘉永7年 (1854)	[地震] 本丸北御石壁50 余間崩壊				*
安政元年 (1855)	[地震] 二の丸石垣20間、 槽2ヶ所、武家屋敷崩壊				*
～安政3年 (1856)				古山地普請、御殿向き所々普請、 辰巳御殿普請	*
慶応元年 (1865)	[水害] 南総堀まで川水流れ込む			南総堀浚渫	*
慶応3年 (1867)			大手門普請	辰巳御殿普請	*

表.文中に示した災害と大手門に関わる普請記録の関係(松本城管理事務所 後藤芳孝氏資料を引用一部改変)



# 写真図版

---



発掘調査団

松本城周辺の空中写真  
写真中央下端が調査地



ビル解体前の調査地  
南側の千歳橋より撮影



解体中のビル  
(旧鶴林堂ビル・旧ノセビル)





調査区全景（空中写真）

調査区北半部  
T1・T2・T4  
(空中写真)



T2 遺物出土状況  
(空中写真)



南区  
(空中写真)





T1 全景 (東から)



T1 全景 (西から)



T1・T4 石列検出状況 (北から)

T1 石垣（東から）



T1 石垣前面瓦出土状況  
（東から）



T1 南壁（北から）







T1 小礫面検出状況(東から)



T1 小礫面立沢瀉文瓦  
出土状況



T1 小礫面立沢瀉文瓦  
出土状況

T2 瓦出土状況（北から）



T2 瓦出土状況（東から）



T2 礎(根固め)検出状況  
(東から)







T3 根石・胴木検出状況  
(東から)



T3 胴木検出状況



T3 小柄出土状況

T4 全景・石列検出状況  
(西から)



T4 石列検出状況  
(北西から)



草鞋出土状況  
(T1 整地土出土)





南区北端  
石垣前の瓦出土状況  
(東から)



南区北端 瓦出土状況  
(東から)



南区北端  
石垣・根固め礫検出状況  
(東から)

T2 北壁土層



現地見学会



作業風景





埋め戻し状況



埋め戻し状況



松本城大手門枡形跡広場の整備状況

※写真右下番号は実測図掲載No.



陶器



内耳鍋



硯



砥石



砥石



煙管

10



1

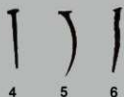
2

3



小柄

9



4

5

6

釘



小柄 (拡大)

9



8

7

瓦釘





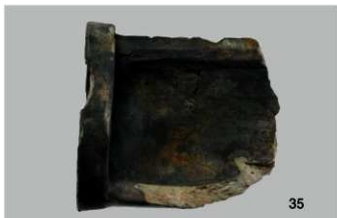
13 (11-1) 軒丸瓦(離れ六つ星文・瓦当面) A類



13 (11-1) 軒丸瓦凹面



35 (11-3) 軒丸瓦(離れ六つ星文・瓦当面) A類



35 (11-3) 軒丸瓦凹面



13 (11-1) 軒丸瓦凹面拡大



35 (11-3) 軒丸瓦凹面拡大



14 (11-2) 軒丸瓦(離れ六つ星文・瓦当面) A類



42 (11-4) 軒丸瓦(離れ六つ星文・瓦当面) A類



17

17(11-52) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文15)B-1類



48

48(11-56) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文15)B-1類



16

16(11-51) 軒丸瓦(立沢瀉文・瓦当面・連珠文16)B-1類



16

16 (11-51) 軒丸瓦凹面



44

44 (11-58) 軒丸瓦(立沢瀉文・連珠文16) B-1類



44

44 (11-58) 軒丸瓦凹面



15

15 (11-50) 軒丸瓦(立沢瀉文・連珠文17) B-1類



15

15 (11-50) 軒丸瓦凹面





11-55 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-1類



11-55 軒丸瓦凹面 B-1類



15 (11-50) 軒丸瓦凹面拡大 B-1類



44 (11-58) 軒丸瓦凹面拡大 B-1類



43 (11-66) 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-2類



43 (11-66) 軒丸瓦凹面 B-2類



20 (11-68) 軒丸瓦 (立沢瀉文・瓦当面) B-2類



43 (11-66) 軒丸瓦凹面拡大 B-2類



52 (11-19) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



52 (11-19) 軒丸瓦凹面



53 (11-20) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



53 (11-20) 軒丸瓦凹面



22 (11-11) 軒丸瓦 (連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



22 (11-11) 軒丸瓦凹面



52 (11-19) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



53 (11-20) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



22 (11-11) 軒丸瓦凹面拡大 C-1類



23(11-12) 軒丸瓦(連珠左卷三巴文・瓦当面) C-1類



51(11-17) 軒丸瓦(連珠左卷三巴文・瓦当面) C-3類



51 (11-17) 軒丸瓦凹面



51 (11-17) 軒丸瓦凹面拡大 C-3類



24 (11-23) 軒丸瓦凹面拡大 C-2類



58(11-27) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面) D-1類



58 (11-27) 軒丸瓦凹面



37 (11-29) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面) D-1類



37 (11-29) 軒丸瓦凹面



57(11-32) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面)D-2類



57 (11-32) 軒丸瓦凹面



57 (11-32) 軒丸瓦凸面刻印㊦



33 (11-45) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面) D類



38(11-31) 軒丸瓦(連珠右卷三巴文・瓦当面)D-3類



38 (11-31) 軒丸瓦凹面



37 (11-29) 軒丸瓦凹面拡大 D-1類



29 (11-42) 軒丸瓦凹面拡大 D-1類



57 (11-32) 軒丸瓦凹面拡大 D-2類



38 (11-31) 軒丸瓦凹面拡大 D-3類



61 (12-20) 丸瓦凸面・E類



61 (12-20) 丸瓦凹面



62 (12-18) 丸瓦凸面・E類



62 (12-18) 丸瓦凹面



62 (12-18) 丸瓦凹面拡大・E類



61 (12-20) 丸瓦凹面拡大・E類



67 (21-4) 軒平瓦 (中心五花弁唐草文)



67 (21-4) 軒平瓦凸面



67 (21-4) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



69 (21-9) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



69 (21-9) 軒平瓦凸面



69 (21-9) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



73

73 (21-1) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



73

73 (21-1) 軒平瓦凸面



73

73 (21-1) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



72

72 (21-3) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



72

72 (21-3) 軒平瓦凸面



72

72 (21-3) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



66

66 (21-7) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



65

65 (21-6) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



64 (21-5) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



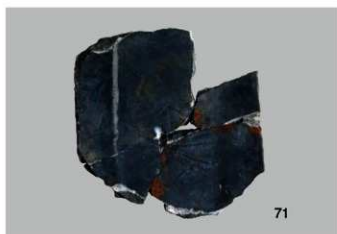
68 (21-10) 軒平瓦 (三葉文唐草文)



70 (21-8) 軒平瓦 (中心三葉文唐草文)



70 (21-8) 軒平瓦 顎裏接合部 (ヨコナデ)



71 (22-107) 刻書平瓦 (凹面)



71 (22-107) 刻書平瓦 (拡大)



瓦整理作業風景



瓦整理作業風景





1

漆碗



2

漆碗の蓋



4

曲物底板



5

曲物底板



6

曲物円板・墨書 (赤外線撮影)



9

栓



7

曲物円板 (表) 墨書 (赤外線撮影)



7

曲物円板 (裏) 墨書 (赤外線撮影)



15

木 札



16

短冊状木製品



21

墨書板材 (赤外線撮影)



19

刷毛 (表)



19

刷毛 (裏)



20

板 材

## 長野県松本市 松本城大手門枳形跡 発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうおおもんますがたあと はっかつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城大手門枳形跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№219							
編者名	竹内増長、原田健司、山田雅恵、鈴木仁美							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2015 (平成 27) 年3月30日 (平成 26 年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
まつもとじょうあと 松本城跡 (8871414村跡) (大手門枳形跡)	ながのけんまつもとし 長野県松本市大手3丁目 67-10 他	20202	494	36度 14分 5秒	137度 58分 11秒	2012.07.30～ 2012.12.28	215.5 m <sup>2</sup>	将来的な遺跡保存を前提とした松本城大手門枳形跡広場(多目的歴史広場)整備に伴う発掘調査
所収遺跡名	類別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
まつもとじょうあと 松本城跡 (8871414村跡) (大手門枳形跡)	城跡	近世	石垣 1列 石列 1列 総堀、枳形内の築地層	土器・陶器 瓦 石製品 金属製品 木製品 植物繊維製品 獣骨類			松本城大手門枳形跡東縁の石垣・総堀・枳形内の築地層を確認した。石垣の構造や位置などを確認することができた。	
要約	調査地は、松本城大手門枳形跡にあたる。将来的な遺跡保存を前提とした枳形遺構・総堀跡の残存状況、位置、構造などを確認するため、調査を実施した。調査の結果、枳形東縁部の石垣や石列の基礎部、総堀の落ち込み、枳形内の築地層(地形層)を確認した。石垣は野面積りで覆まれており、古い塚相が観察された。総堀内の石垣前面部分では、明治期の枳形破却時に投棄されたと考えられる瓦・建築材などの遺物が集中して出土した。また、枳形内石列の裏込め部分からは、18世紀代の陶器が出土しているため、江戸時代後半に改修されていた可能性が高い。出土した瓦にはいくつかの特徴がみられたため、形状や成形技法などから分類した。							

---

---

松本市文化財調査報告№219

長野県松本市

松本城大手門枡形跡

—発掘調査報告書—

発行日 平成 27 年 3 月 30 日

発 行 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印 刷 アサカワ印刷

---

---